

石川県埋蔵文化財情報

第 3 号

巻頭カラー写真 畝田・寺中遺跡 九谷A遺跡

平成11(1999)年度上半期の発掘調査から調査部長 小嶋芳孝... (1)

発掘調査略報 (3)

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1 三引遺跡(調査第3課) | 9 戸水B遺跡(調査第2課) |
| 2 国分遺跡(調査第3課) | 10 畝田・寺中遺跡(調査第2課) |
| 3 甘田タイ遺跡(調査第2課) | 11 金沢城跡(調査第4課) |
| 4 四柳ミッコ遺跡(調査第1課) | 12 橋爪新A遺跡 橋爪新B遺跡(調査第2課) |
| 5 四柳白山下遺跡(調査第1課) | 13 大長野A遺跡(調査第1課) |
| 6 荻島遺跡(調査第2課) | 14 大長野A遺跡(調査第2課) |
| 7 倉見オウラント遺跡(調査第4課) | 15 幸町遺跡(調査第3課) |
| 8 観法寺遺跡(調査第1課) | 16 九谷A遺跡(調査第3課) |

整理作業の現場から(1999年度上半期).....整 理 課... (44)

調査・研究報告

- 1 弥生時代中期後半土器の併行関係と暦年代観河合 忍... (46)
- 2 羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠について林 大智... (53)
- 3 石川県における古墳時代研究の動向について(1998~99年).....安中哲徳... (59)
- 4 能登地域における11・12世紀代のロクロ土師器について(粗描)...柿田祐司... (62)
- 5 「九泉」柿田祐司・滝川重徳... (66)
- 6 [発掘余話] 金沢城跡五十間長屋出土の「鋤始」刻石北野博司... (68)
- 7 クサビ・カスガイの金属学的調査
.....(株)九州テクノリサーチ 営業技術部・TACセンター... (74)

2000年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



写真1 畝田・寺中遺跡出土木簡



写真2 木簡を出土した溝の完掘状況（北西から）

(写真の解説)

写真1 畝田・寺中遺跡出土木簡

冒頭には「天平勝寶四年」(752年)と年号が記されており、その内容から出挙の貸付・収納を行う際に使用した作業用帳簿と考えられる。

写真2 木簡を出土した溝の完掘状況(北西から)

8世紀中葉から後葉に比定される時期の溝で、木簡は南肩部より出土した。



巻頭カラー写真

九谷A遺跡

写真1 九谷A遺跡第4次調査区の俯瞰



写真2 第4次調査区出土の色絵磁器

(写真の解説)

写真1 九谷A遺跡第4次調査区の俯瞰

屋敷跡は古九谷の生産時期に拡張を行い、
石垣、建物、道路などを新設している。

写真2 第4次調査区出土の色絵磁器(原寸大)

江戸前期の屋敷跡からは3点の色絵磁器
が出土した。左は白磁胎に紫・黄・緑色を
使い幾何学文を描いた大平鉢の底部で、右
の2点は白磁胎に緑と赤色で植物を描いた
皿である。

平成11(1999)年度上半期の発掘調査から

調査部長 小嶋 芳孝

平成11(1999)年度は、県教委から33遺跡の調査を受託して四月からはじまった。調査面積の総計は、100,840㎡を予定していた。内訳は、建設省事業に伴う調査が8件で34,000㎡、鉄道建設公団が2件で12,000㎡、県農林水産部関係が11件で10,850㎡、県土木部関係が11件で47,890㎡、県教委関係が1件で2,100㎡である。

三引遺跡は能越自動車道と側道の県道建設に伴って平成6(1994)年度に調査を開始し、今年度で現地の調査を完了した。6年間にわたる大規模調査だったが、この遺跡の調査で最も大きな成果は縄文時代前期初頭の貝塚を検出できたことだった。貝塚は平成7(1995)年度調査の終了直前に見つかり、翌年から今年まで調査に4年間を要した。今年度の調査では、貝塚の形成と海面変動の関係に関する新たな資料を得ることができた。

羽咋市四柳ミッコ遺跡では、溝で画された区域から滑石製の剣形品や有孔円盤が古墳時代後期の小型壺や高坏などとともに出土しており、邑知地溝帯での古墳時代祭祀を考える新たな資料となった。また、ミッコ遺跡に隣接して調査を行った四柳白山下遺跡では、平安時代初頭に比定できる三×三間の掘立柱建物の周囲から銅碗や稜碗などの仏器片が出土しており、村堂ないし小規模な寺院の存在を推測できる。

観法寺遺跡は道路遺構の可能性のある直線溝を検出している。今年度の調査では、溝内から木簡が出土し、また溝に並行した建物も検出しているため、北陸道に関連した道路遺構の可能性が高いと考えている。

畝田・寺中遺跡は、金沢西部第二土地区画整理事業に伴う初年度の調査である。上半期の調査では古墳時代後期初頭、奈良時代、中世の三時期の遺構が検出されている。古墳時代後期初頭には、滑石製白玉を多量に埋納した土坑を多く検出し、また溝からも土器と共に滑石製の紡錘車、勾玉、有孔円盤など祭祀遺物が出土している。ちなみに、宇ノ気町指江遺跡でも溝内から多量の滑石製白玉が出土しており、加賀の古墳時代後期初頭の祭祀関係資料が増加している。奈良時代には、幅10m前後の河道と掘立柱建物、溝などを検出している。河道では下層から前述の古墳時代後期初頭の祭祀遺物や土器が多量に出土し、上層から奈良時代の遺物が出土している。なかでも墨書土器が多数出土し、「津司」や「天平二年」、「語」などの墨書が注目を集めている。「津司」の評価については、金石本町遺跡を中心とする犀川河口に存在した郡レベルの港湾管理者の職名なのか、越前国の港湾や海上交易を統括する職名なのか、今後検討を要する資料である。また、天平勝賣四年銘の出拳木簡は一枚の貸付台帳的な性格を持っており、出拳の実態を示す貴重な資料となった。この木簡の発見により出拳事務を行った郡家関連施設が周辺に存在していた可能性を想定している。今後、金石本町遺跡など、7世紀から8世紀の大型建物をもつ遺跡などと総合して検討していく必要があるだろう。

金沢城跡では、菱櫓、五十間長屋、続櫓の石垣を解体する調査を平成10(1998)年度から継続して行った。調査成果の詳細は本文に譲るが、文献に残る数次の石垣修築をほぼ確認できたこと、二ノ丸の造成時期を寛永8(1631)年とする従来の史料について考古学的にもほぼ同時代の造成であることが確認できたこと、石垣の下から慶長～元和(1595～1624年)頃の城内に存在したと伝えられる重臣の屋敷群の一面と思われる遺構を確認したことなど、多くの成果をあげている。

九谷A遺跡では、平成11年度の上半期は遺跡範囲の再確認と一昨年存在を確認した礎石を伴う焼

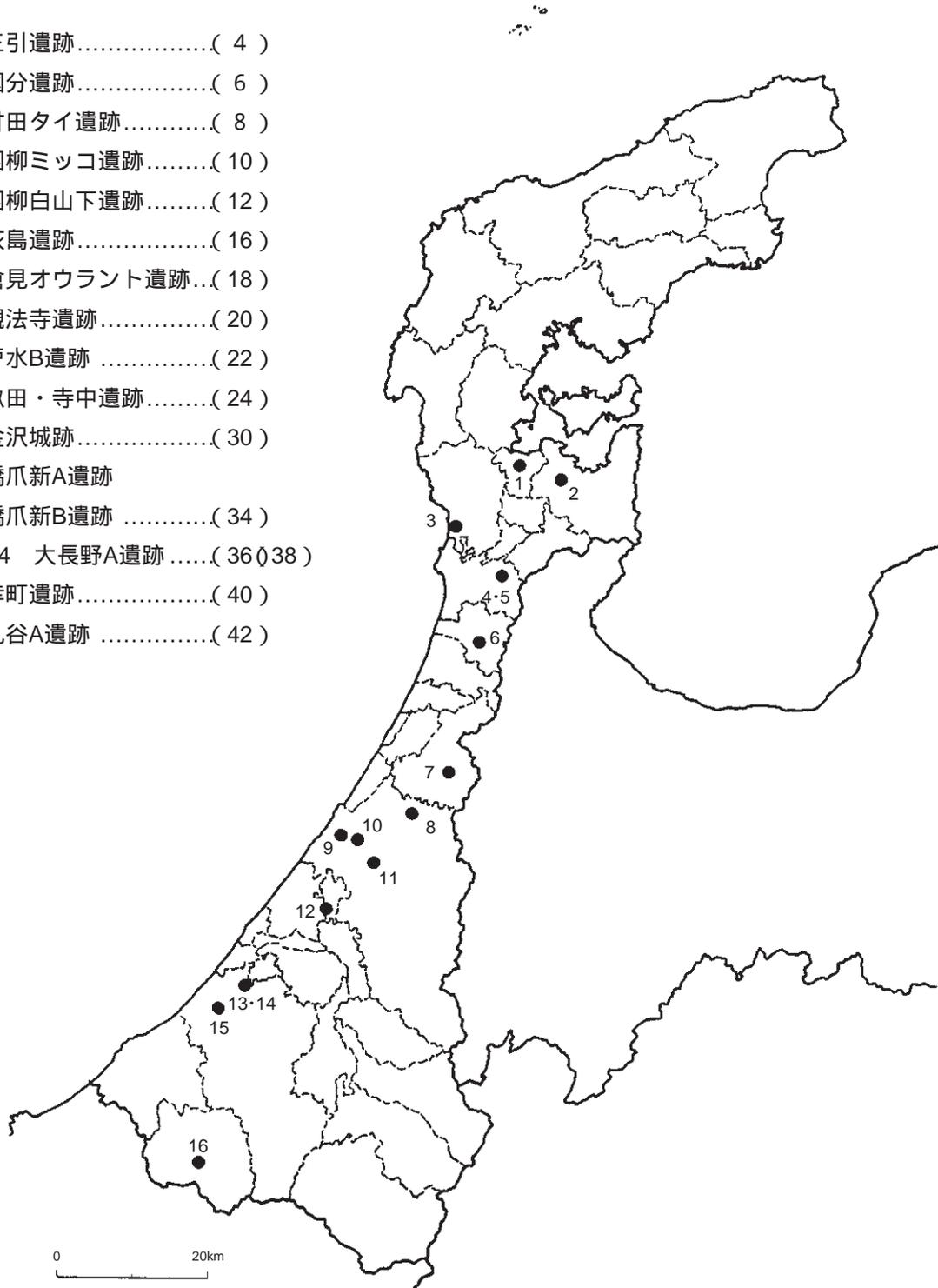
土遺構の性格確認が主要な調査となった。下半期には、大聖寺川左岸の杉ノ水川に沿った県道建設予定地の調査を行っている。焼土遺構については、礫を敷いた上に礎石を配置した建物が何らかの焼成作業の結果堆積した焼土に接していることが判明している。この遺構の性格については、色絵窯の可能性を探ることも調査目的の一つだったが、現在のところは断定するまでに到っていない。関係の諸先生から御教示を得ながら、今後も検討を進めていきたい。また、今回の調査で戦国から江戸時代にかけておこなわれた盛土造成地の範囲が約7,000㎡であることが判明した。この盛土造成された範囲の性格については古九谷操業時の管理施設的なものと想定しているが、その内容についてはこれまでの調査資料の検討を進めると共に今後の調査で解明を図りたい。

調査課	事業者	担当課	事業名	場 所	遺跡名	面 積(㎡)	
調査一課	建設省	金沢工事事務所	津幡北BP	津幡町	加茂遺跡	5,000	
			東部環状線	金沢市	梅田B遺跡	6,400	
			東部環状線	金沢市	観法寺谷遺跡	1,800	
			東部環状線	金沢市	観法寺古墳群	5,800	
			小松BP	小松市	大長野A遺跡	5,000	
			鹿島BP	羽咋市	四柳白山下遺跡	5,000	
			鹿島BP	羽咋市	四柳ミツコ遺跡	2,000	
			鹿島BP	羽咋市	大町ダイジングウ遺跡	3,000	
調査一課合計						34,000	
調査二課	農用地整備公団	西部支社	県営ほ場整備	志賀町	甘田タイ遺跡	350	
				加賀市	弓波遺跡	1,900	
		加賀		加賀市	柴山出村遺跡・柴山貝塚	900	
				石川	松任市	橋爪地内の遺跡	360
		小松		松任市	橋爪ガンノアナ遺跡他	1,120	
				小松市	大長野A遺跡 他	500	
		小松市		矢田野遺跡 他	1,000		
		津幡		宇ノ気町	指江遺跡 他	3,400	
	羽咋	津幡町	領家指江ハシバ遺跡	70			
		志雄町	荻島遺跡	600			
	珠洲	珠洲市	粟津カンジャバタケ遺跡	650			
	農林小計						10,850
	都市計画課	西部開発	第2土地区画整理	金沢市	畝田遺跡 他	17,600	
	道路建設課	金沢	海側幹線	金沢市	豊穂遺跡	1,400	
県庁舎建設局		県庁舎建設	金沢市	戸水B遺跡	1,030		
西部・海側幹線・県庁の小計						20,030	
調査二課合計						30,880	
調査三課	道路建設	七尾	氷見田鶴浜線	田鶴浜町	三引遺跡	1,800	
			志賀鹿西線	鹿西町	徳丸遺跡	2,000	
	道路整備課	小松	国道360号	小松市	ブッシュウジヤマ古墳群	700	
	河川課	七尾	御祓川	七尾市	国分遺跡	860	
	河川開発課	九谷ダム	九谷ダム	山中町	九谷A遺跡	3,000	
	港湾課	金沢港建設	金沢港	金沢市	近岡遺跡	1,000	
	都市計画課	鉄道高架	小松駅立体交差	小松市	八日市地方遺跡他	7,500	
調査三課合計						16,860	
調査四課	公園緑地課		金沢城整備	金沢市	金沢城跡	11,000	
	鉄建公団		新幹線	津幡町	倉見オウラント遺跡	1,000	
		金沢市		梅田B遺跡	5,000		
	教育委員会	庶務課	小松高校	小松市	小松城跡	2,100	
調査四課合計						19,100	
総合計						100,840	

(財)石川県埋蔵文化財センターの発掘調査計画(平成11年度当初)

[発掘調査略報]

- 1 三引遺跡.....(4)
- 2 国分遺跡.....(6)
- 3 甘田タイ遺跡.....(8)
- 4 四柳ミッコ遺跡.....(10)
- 5 四柳白山下遺跡.....(12)
- 6 荻島遺跡.....(16)
- 7 倉見オウラント遺跡...(18)
- 8 観法寺遺跡.....(20)
- 9 戸水B遺跡(22)
- 10 畝田・寺中遺跡.....(24)
- 11 金沢城跡.....(30)
- 12 橋爪新A遺跡
橋爪新B遺跡(34)
- 13・14 大長野A遺跡(36) (38)
- 15 幸町遺跡.....(40)
- 16 九谷A遺跡(42)



[発掘調査略報] 掲載遺跡位置図 (S=1/800,000)

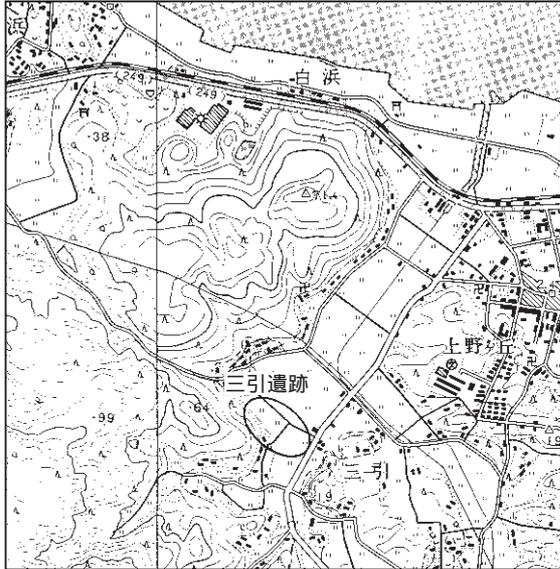
1 三引遺跡 (第6次調査)

所在地 鹿島郡田鶴浜町三引地内

調査期間 平成11年4月20日～平成11年11月29日

調査面積 1,800m²(2層累積)

調査担当 金山哲哉 加藤克郎 菅野美香子(調査第3課)



遺跡位置図 (S=1/25,000)

三引遺跡は、鹿島郡田鶴浜町三引地内に所在する、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡は七尾湾岸から1km程内陸の山裾から平野部にかけて立地する。本年度の調査区は、既に供用を開始している能越道に平行する形に設定されており、昨年度調査区の東側に位置する。

今回の調査は、昨年度調査で検出のみに終わった縄文時代前期初頭の貝塚を対象とするものである。本遺跡では本年度調査対象の貝塚を含め、4箇所で見出された貝塚の分布が確認されている。その内の3箇所に見出された貝塚については昨年度までに調査を終えているが、いずれも数m～10数m四方の、貝層厚も30cm前後の小規模なものである。

調査対象となったのは、現地表面から約-2.5mの深部に位置する低湿地性貝塚である。貝層はサルボウ及びハイガイを主体とし、そのほかカキガイやアサリ、シジミ類などにより構成される。貝層厚は調査済みの貝塚同様の薄層であるが、東西約30m、南北約1～6mを測る、県内最大規模の貝塚である。新第三紀中新世基盤層である珪藻泥岩層上に堆積した粘質土層上に形成されており、検出面の標高は、最高所で約+0.5m、最深部で約-0.2mを測る。

貝塚の調査については、一括廃棄のまとまりと判断されるような廃棄状況を確認することは面の観察でも困難であったことから、これまで同様公共座標に基づく最小50cmメッシュのグリッドにより10cm単位での掘り下げを行った。一方で、貝塚の東端部で設定したトレンチの断面では貝塚が基盤層とする粘質土中にも数層の貝層が確認されたため、この部分については各貝層毎に掘削を行っている。

既往の調査同様、遺物については上述した貝類のほか、シカやイルカなどの陸・海獣骨、タイ類を主体とする微細な魚骨や、種子などの自然遺物を始めとして、土器や石錘を主体とする石器などの人工遺物が大量に出土している。また埋葬施設こそ確認されなかったが、本貝塚上や周辺の遺物包含層から人骨が出土するなど、まさに多種多様な遺物が出土している。

このような食物残滓と人工遺物が大量に出土するなかで、貝層中やその覆土にはウミニナが多く認められている。貝層は上述のように、貝塚と貝塚基盤層下で検出したいわば下部貝層の2層に大きく分け



貝塚検出状況 (南西から)



同検出状況 (北西から)

られるが、貝塚中のウミナナについては捕食後に廃棄されたものではなく、貝塚形成後の海水面の上昇に伴い貝塚中に棲息したものが出土したと、現在のところは考えている。但し、下部貝層についてはその分布範囲が狭いことや、貝殻の密度が貝塚に比して著しく低いこと、またそれに反して土中に含まれるウミナナの量が貝塚に比して多いことなどから、自然貝層の可能性も視野に入れながら貝塚の貝類構成との比較・検討を行った上で、人為による貝層の可否を判断する必要があると考えている。

珪藻分析の結果では、基盤層からの誘導化石の影響も考慮しなければならないが、いずれの層からも汽水種と海水泥質干潟双方の指標種群が検出されており、小海退と小海進を繰り返す環境も想定される。貝塚検出面が平坦であることや貝層が薄層であることも、貝塚形成後の海面上昇による波蝕の可能性が考えられるなど古環境の変遷についても注目される。

また、下部貝層が分布する粘質土層は、貝塚形成以前の遺物包含層とみられるものの、出土する土器は、貝殻による条痕調整が施される、尖底を主体としたいわゆる佐波式の土器群であり、貝塚でみられる土器群との明瞭な差異は認められていない。これら早期末～前期初頭土器群の位置付けについても、今後の大きな課題である。

なお、この遺物包含層除去後、基盤珪藻泥岩層上でドングリとみられる種子を含むピットが33基確認されている。土器が殆ど出土しなかったため時期の特定は困難であるが、採取した種子を資料として年代測定を実施する予定である。

本遺跡の発掘調査は、能越自動車道とその側道の建設を原因として平成6年より継続して進められてきたが、今回の調査をもって全ての現地調査が完了したこととなる。調査中に採取した貝塚土壌の洗浄作業については既に終了しており、現在は洗浄後の資料の選別を行っている段階である。今後はこれらの資料により、貝塚の詳細な分析を行っていく予定である。

また、今回の調査では一部貝層の剥ぎ取りを実施している。この剥ぎ取った断面は当埋文センターにて展示を行っているので、自由にご覧頂きたい。
(金山)



貯蔵穴群完掘状況（北東から）



完掘状況（南東から）



完掘状況（東から）



剥ぎ取り断面

2 国分遺跡 (第4次調査)

所在地 七尾市国分町地内

調査期間 平成11年4月13日～平成11年5月31日

調査面積 860㎡

調査担当 安中哲徳 加藤克郎 (調査第3課)



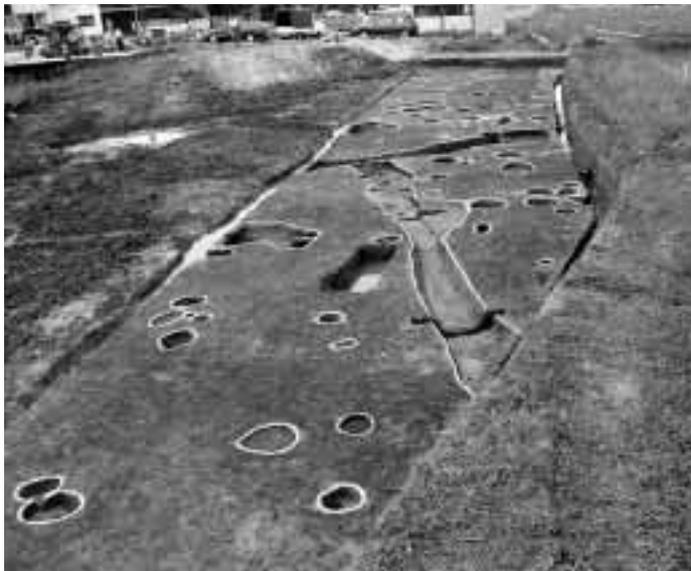
遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、能登半島のほぼ中央に位置する七尾市内を流れる御祓川みそぎの下流域に広がる弥生時代～中世の集落遺跡である。この御祓川は石動山系を水源としていて、七尾南湾へと北流する河川で、流域には多くの遺跡が点在する。なかでも本遺跡の対岸の丘陵上には、県内でも最古級の前方後方墳として知られる国分尼塚1号・2号墳がそびえ、更に約1km上流の右岸には国指定史跡の能登国分寺跡が所在する。

発掘調査は御祓川広域基幹河川改修工事に伴い、平成8年度より発掘調査を実施している。昨年度までに3次にわたり調査され、平成11年度は第4次調査に当たり、最も上流側の約860㎡が調査対象となった。今年度の調査区は下流側からA区・B区・C区と便宜的に設定した。そ

の内A・B区は第3次調査区のすぐ東側に隣接しており、3・4次調査区にまたがっている溝・土坑も検出しており、一連の遺構と捉えられる。

A・B区からは、溝5条、土坑7基、掘立柱建物5棟以上が検出されている。これらの内、SD09及びSD11は3次調査区に連続する遺構で、SD11は3次調査区のSD02に当たる。このSD11は幅約1.5m、深さ約0.5mの溝で、3次調査区で検出された旧河道へと流れ込むものである。溝中からは弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。またこのSD11の両側にあるP68・69の底面からは古墳時代後期の土師器甕の下半部及び碗が埋納されていた。ところでA区のSD10とB区のSD07・08とは一見すると直線的で連続するようには見えたが、溝の幅、深さ及び覆土の色などの違いから一連のものではないと考えられる。

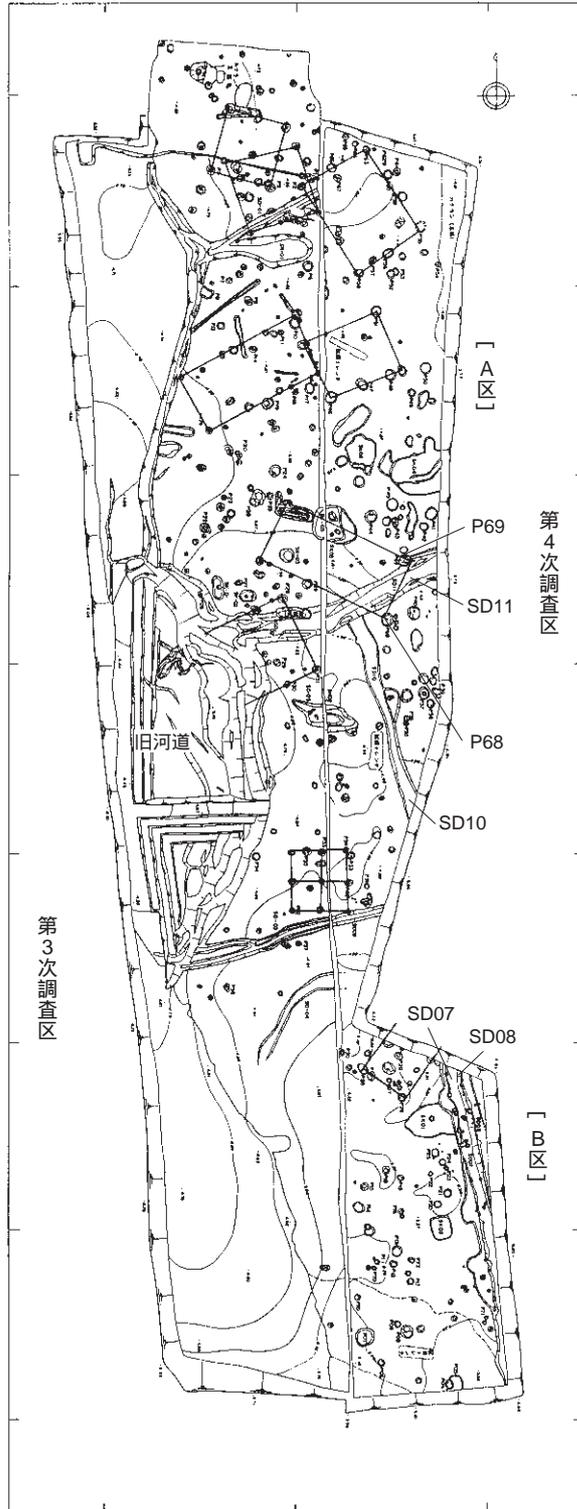


A区 完掘状況 (南から)

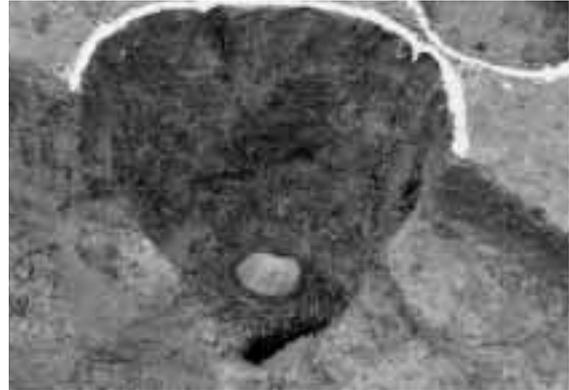
SD07からは古墳時代前期及び古代の土師器、SD08からは弥生時代後期及び古代の土師器が出土していることから、以上の2つの溝は古代のものであると推定される。さてA・B区全体の遺構の時期を大別すると、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、古代、中世の遺構の遺構が存在することがわかる。このような状況から本遺跡は上記の期間に断続的に集落が営まれていたものと考えられる。

A・B区とは約70m南に隔てて立地するC区は北側と西側及び南側の三方が洪水によって遺構面が削られているが、こ

ここからは溝6条、ピット約10基が検出されている。それらの出土遺物の時期からは弥生時代後期、古墳時代後期、古代にそれぞれ属するものと判断される。 (加藤)



遺構略図 (S=1/400)



A区 P69 土器出土状況 (南から)



A区 SD11 完掘状況 (西から)



B区 完掘状況 (南から)

3 ^{あまた}甘田タイ遺跡

所在地 羽咋郡志賀町甘田地内

調査面積 350m²

調査期間 平成11年4月26日～平成11年6月7日

調査担当 久田正弘 国守 剛（調査第2課）



遺跡位置図 (S=1/25,000)



A区 竪穴式住居・掘立柱建物



D区 竪穴式住居・掘立柱建物

甘田タイ遺跡は海岸段丘の東斜面と内陸部側に位置する谷平野に立地する。調査区は斜面の中段と平野部に位置する。

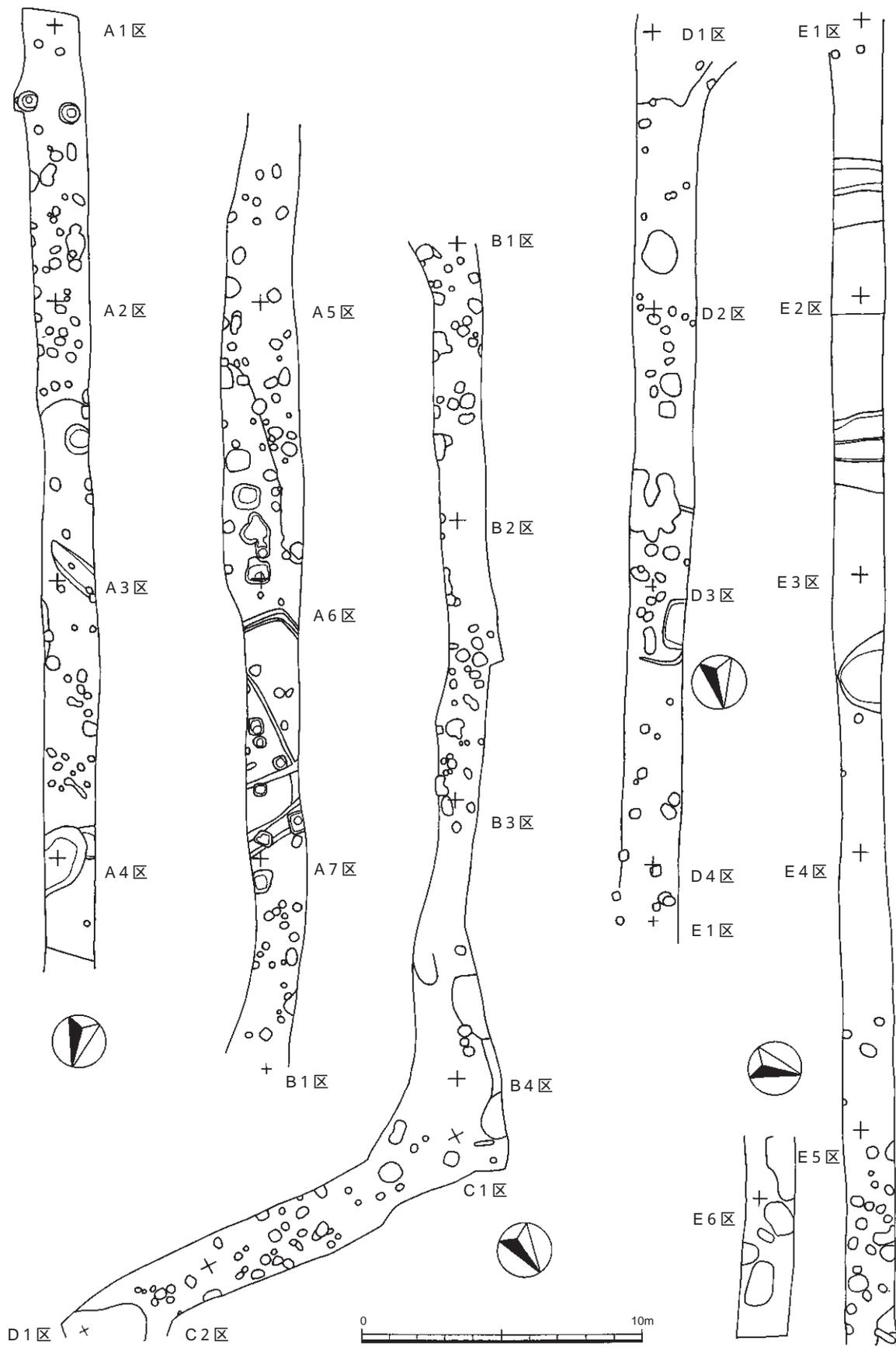
一番南端に位置するA1区には掘立柱建物が1棟存在するが、主要遺構はA区の北側に存在する。A2～4区では谷と思われる落ち込みを確認した。A6区では掘立柱建物が1棟存在し、柱穴の掘り方が60～100cmを測る大きなものである。A7区（写真上）では竪穴住居が3棟存在し、主軸を同じくして、狭い範囲に存在することから同じ住居の建替えと思われる。時期は古墳時代後期と思われ、その場所には古代と思われる掘立柱建物が2棟存在する。

B区には4間と思われる掘立柱建物1棟と不正形な土坑群を確認した。土坑群からは多くの鍛冶滓が出土しており、付近は焼土が2箇所存在した。C区では、柱穴群が存在したが、明確な建物は確認されなかった。

D区には、竪穴住居と掘立柱建物（写真下）を1棟ずつ確認した。D2～3区の竪穴住居内には地床炉と思われる焼土が2箇所存在した。D3～4区には、4間と思われる掘立柱建物が1棟存在した。D1区には袋状土坑が1基確認された。

E区は急斜面と平野部に立地している。急斜面に位置するE3・4区では厚さ2m近い包含層の堆積が認められた。大きく3層に分かれ、上層は古墳時代後期～古代の土器が主体的に出土し、鍛冶滓も多く出土した。中層は縄文時代後期前半の気屋式土器が、下層は中期後半の串田新式土器が主体的に出土した。縄文時代の遺構は確認されなかったが、E区の北側には斜面の中段（平坦面）が続いており、そこには縄文時代の集落が存在したものと推定される。

（久田）



調査区全体図 (S=1/200)

4 四柳ミッコ遺跡 (第3次調査)

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成11年4月19日～平成11年8月3日

調査面積 2,000㎡

調査担当 岡本恭一 林 大智 (調査第1課)



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

四柳ミッコ遺跡は、羽咋市の北東端で、羽咋から七尾にかけて存在する帯状の平野部 (邑知地溝帯) の南東側山麓地域に位置する。遺跡は扇状地の扇端部で、湧水の豊富な場所に立地している。

遺跡の南西側には、近隣まで旧邑知漏がひろがっていたと考えられ、また南東側山麓の裾部には、古代の主要官道があったと推定されている。このことから、遺跡の周辺が、陸路・海路双方を包括する交通の要所であったことが推測できる。

この遺跡の発掘調査は、国道159号鹿島バイパス改築工事に伴い実施した。平成9(1997)年度には、(社)石川県埋蔵文化財保存協会、平成10(1998)年度

には、(財)石川県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施し、中・近世の水田跡、奈良・平安時代の集落跡、古墳時代中～後期の集落跡などを検出した。今年度は第3次調査として、F地区 面(1,000㎡)、面(1,000㎡)の調査を実施した。以下、各遺構面の概要を述べる。

[F地区 面]

この遺構面からは、掘立柱建物跡2棟、および溝や鞍部などの遺構を検出した。平成10年度に調査を実施した、D地区 面と同一遺構面であると考えられる。

掘立柱建物跡は、梁間1間×桁行2間のもの〔SB01〕と、梁間2間×桁行2間のもの〔SB02〕の2棟が認められる。SB02は、総柱の柱穴配置であることから、倉庫としての機能を推測できる。この建物跡の柱穴には柱根が遺存していた。時期は7世紀後半頃と考えられる。

建物跡の西側には、北東から南西方向に溝〔SD01〕が掘削されている。SD01より北西側には、畝溝が数条存在する以外に、建物跡などの遺構は認められない。このことから、SD01は居住域と生産域を区画する機能をもつ溝と考えられる。掘立柱建物跡とほぼ同時期と考えられる。

調査の結果、F地区 面では7世紀後半頃の建物跡とその生産域が確認できた。平成5(1993)年度には、羽咋市教育委員会によってF地区の南東側の発掘調査が行われている。この調査においても同時期の出土遺物が認められていることから、居住域は南東側一帯にひろがる可能性が高い。



SB01 完掘状況 (南東から)



土器集中箇所 (東から)

[F地区 面]

この遺構面からは、方型溝およびその他の溝、鞍部、ピットなどの遺構を検出した。平成10年度に調査を実施した、D地区 面と同一遺構面であると考えられる。

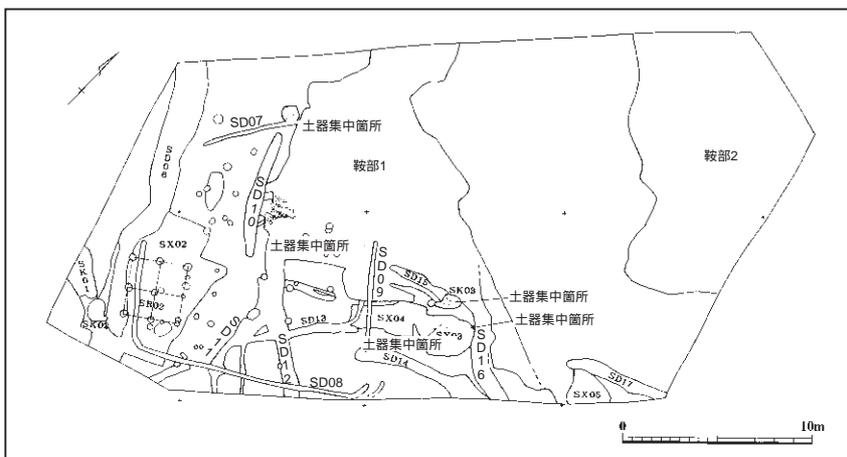
調査区南半部に認められた方型溝〔SD07・08・09〕は、鞍部をとり込むように掘削されている。平面は台形を呈し、長辺約14.5m、短辺約12mを測る。幅は20cm程度と狭く、溝内には部分的に小ピットが認められることから、柵状の施設であると推測できる。方型溝内部には、建物跡などの施設は確認できず、東西方向の溝〔SD10〕のみが確認できた。

溝〔SD11・12・16〕は、南東方向から鞍部1に向かって掘削されている。これらの溝と鞍部が合流する箇所の周辺からは、多数の土器が集中して出土した〔土器集中箇所～〕。

この土器集中箇所からは、小型壺や高杯などの器種が高い比率で認められる。また、それらに伴って、からは滑石製模造品剣形、からは同じく滑石製の有孔(双孔)円板が出土している。さらに、からは手づくね土器が多数出土している。これらの遺物が、隣接する居住域でほとんど認められないことや、ブロック状のまとまりをもって分布することから、この土器集中箇所は、非日常的な行為すなわち「まつり」の結果として形成されたことが推測できる。

鞍部は、調査区中央および北端に認められた。鞍部1より北側には、明確な遺構は認められないことから、この場所が古墳時代中～後期の居住域の北端にあたることが推定できる。

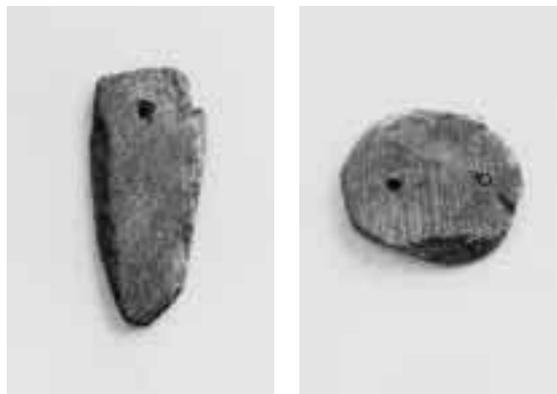
調査の結果、F地区 面では平成9・10年度に調査を実施した古墳時代中～後期の居住域の北端を確認した。また、その場所には方型溝が設けられ、「まつり」の場が造作されていたことが明らかになった。この場で行われていた「まつり」は、居住域とその外部空間を区別するという機能をもつと思われる。また、空間内に鞍部をとり込んでいること、溝と鞍部の合流箇所付近に土器集中箇所が認められること、およびそこから滑石製模造品が出土することなどから、“水辺”と関わりの深いものであることが推測できる。(林)



第2図 F地区 面遺構概略図 (S=1/400)



土器集中箇所 (南西から)



土器集中箇所出土の滑石製模造品(原寸)

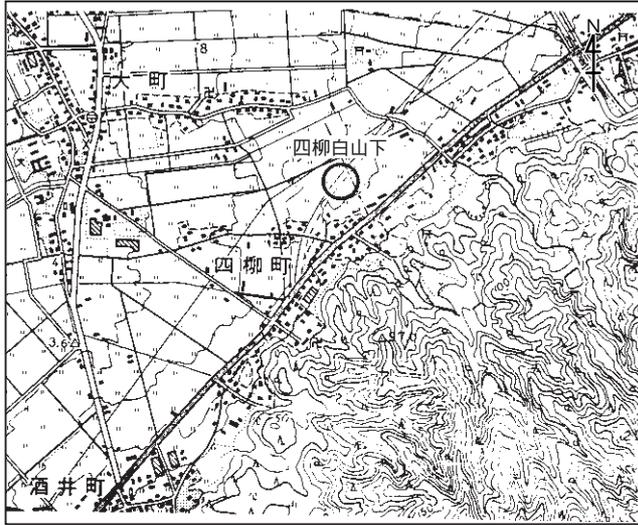
5 よつやなぎはくさんした 四柳白山下遺跡 (第6次調査)

所在地 羽咋市四柳町地内

調査期間 平成11年5月10日～平成11年9月10日

調査面積 4,000m²

調査担当 田村昌宏 宮川勝次 (調査第1課)



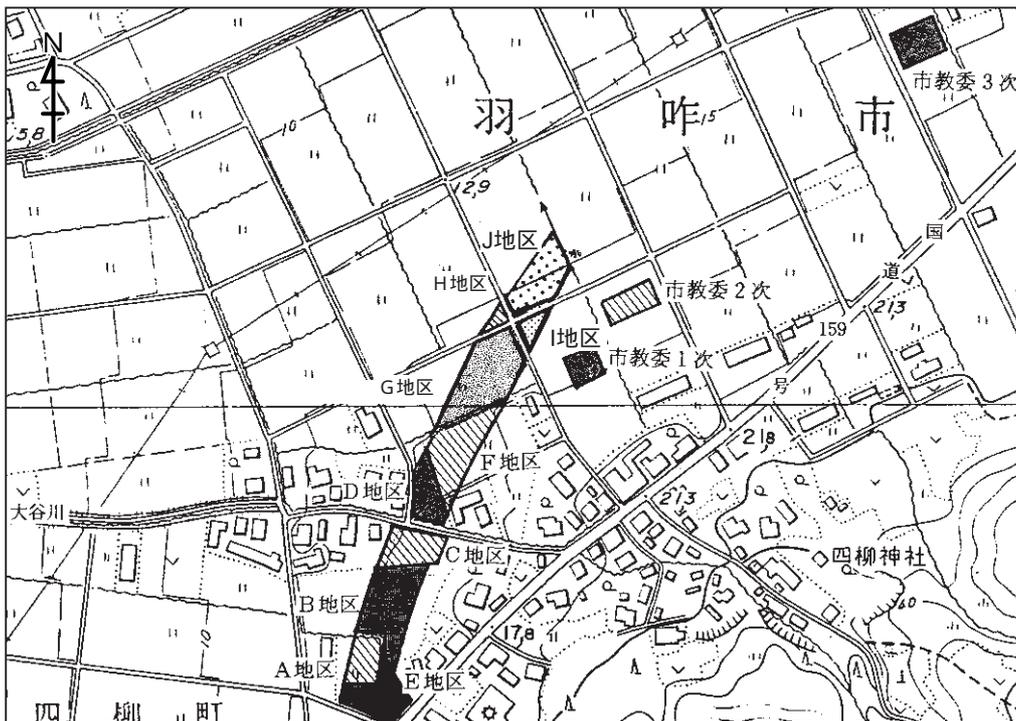
遺跡位置図 (S=1/25,000)

四柳白山下遺跡は、能登半島の基部にある日本海側の眉丈山地と富山湾側の碁石ヶ峰山地に挟まれた羽咋市と七尾市を走る帯状の平野部 (邑知地溝帯) に立地し、碁石ヶ峰山麓の四柳町地内に所在する。

発掘調査は、国道159号線鹿島バイパス改築工事を原因として、平成6(1994)年度から継続して行われており、今年度は第6次調査となる。

本遺跡は、縄文時代中期頃から江戸時代にかけての生活面が確認されており、また、土の堆積状況からこの一帯が土砂災害多発地帯であったことが分かっている。

今年度は、第5次(1998年度)調査区北側のI地区とJ地区を調査し、これまでに、I・J地区第0面(中世末～近世) J地区第1面(中世前半) I・J地区第2面(古代末～中世前半) I・J地区第3面(古代末～中世前半) I・J地区第4面(平安時代)の集落跡及び水田跡などを検出している。今後はさらに下層の生活面を検出していく予定である。以下、各時代の概要を述べていく。



調査区位置図 (S=1/5,000)

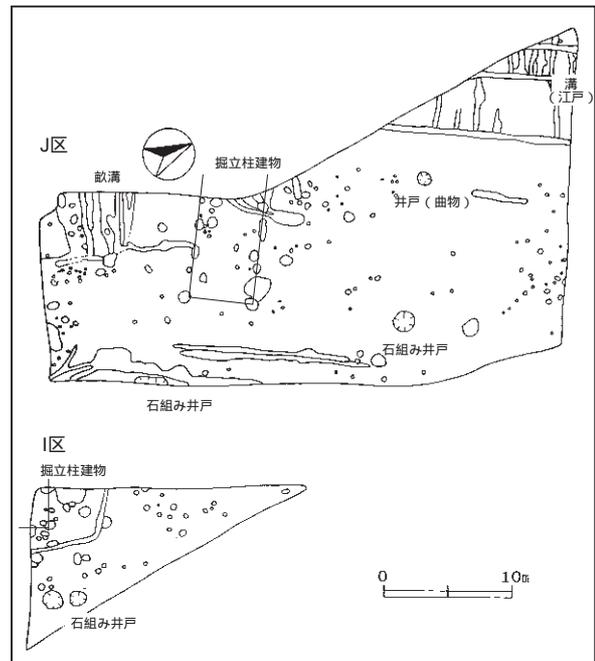
[I・J地区第0・面]

現地表下約80cm前後で検出された室町時代を中心とする生活面である。掘立柱建物は、現段階で1×3間以上のものが1棟確認されているが、柱根を有するピットが切り合いながら検出されており、更に多くの建物が確認できるかもしれない。

井戸跡は10基検出されており、うち4基は石を使用している。石組の井戸は直径約30cmの大型の石を積み上げて、その背後は直径約10cmの栗石で補強したものである。残りは曲物による井戸である。直径約60cm、高さ約30cmの大型のものと、直径約30cm、高さ約20cmの小型の2タイプある。小型のものは、ピットの掘り方に合わさるようにおさまっている。

J区北側には江戸時代後半頃の用水が南北方向に走り、唐津焼が1点出土している。また、南側には東西方向に畝溝が数条走っている。

遺物は、15Cを主体とする珠洲焼を中心に漆皿や箸、銅銭（永楽通宝）などが出土している。



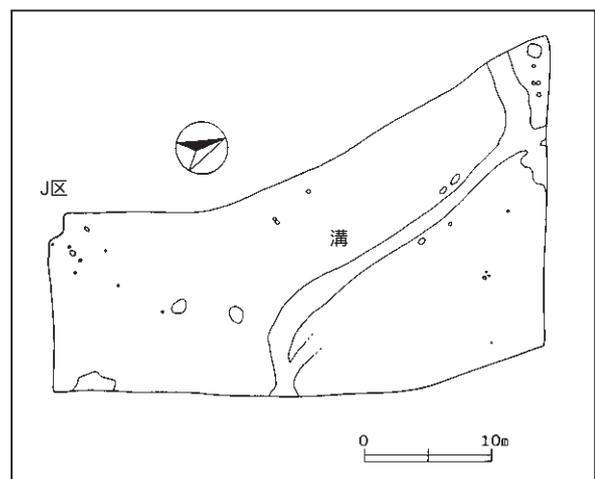
I・J地区0・面 遺構略図 (S=1/600)



J地区0・面 完掘状況(南から)

[J地区 面]

第0・面を包含層とする面であるが、土石流により削平されている。そのため、I地区での検出は不可能であった。J地区においても遺構密度が低く、溝2条とピットが検出されている。溝は幅約1mを測り、断面形は逆台形を呈している。南北方向に流路をとり、調査区北側で東西方向に走る溝に切られている。遺物はごく少量であり、鎌倉時代の土師器椀が1点出土しているが時期決定には至ってない。



J地区 面 遺構略図 (S=1/600)

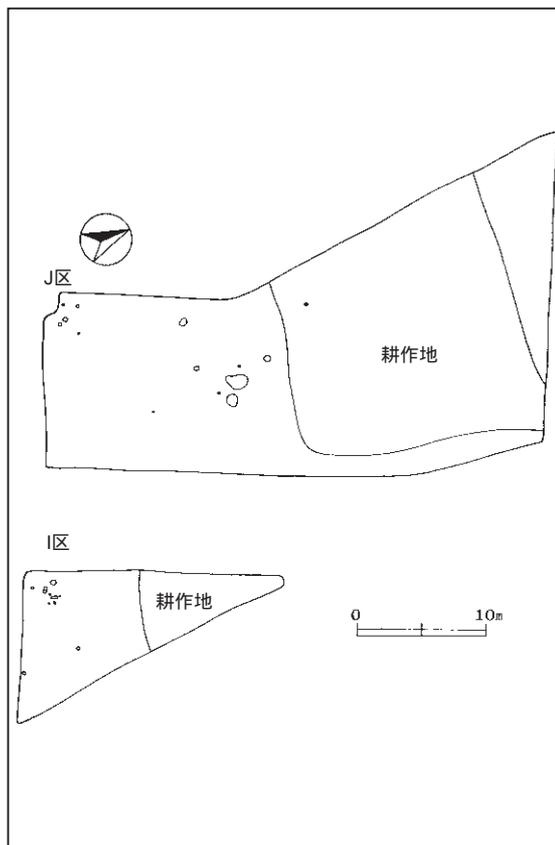
[I・J地区第 -0面]

第 面を包含層とする面で、ベース土は腐植物が多量に混じった黒褐色弱粘質土である。面との間層には粗砂が多量に入り込んでおり、土石流の痕跡が認められる。この時代は耕作地として使用されており、南から北へ傾斜する自然地形を利用して階段状に作られている。遺物は土師器片が少量出土している。

[I・J地区第 -1面]

第 -0面直下の面で、同様に耕作地として使用されている。第 -0面の1区画と比べて小規模であり、1辺が8m前後を測る。J地区の一部の耕作地土手には礫群が巡っている。これは、崩落防止のために積まれたもので土止めの機能を果たしている。遺物は須恵器などが少量出土している。

面は耕作地という性格上、遺物は皆無に等しいため時代決定は難しく、層位によって古代末～中世前半（第 面と第 -2面の間）という長期間に設定せざるを得ない。



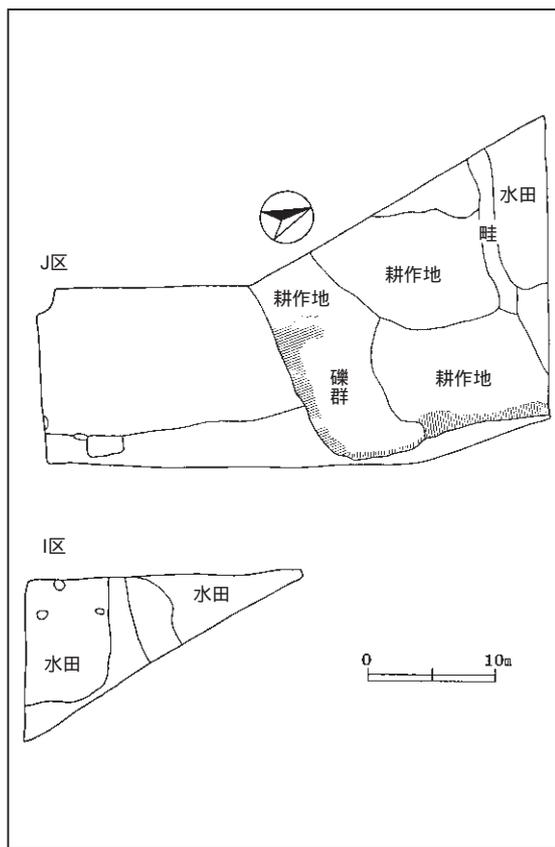
I・J地区 -0面 遺構略図 (S=1/600)



J地区 -1面 礫群 (西から)



J地区 -1面 耕作地跡完掘状況 (北から)



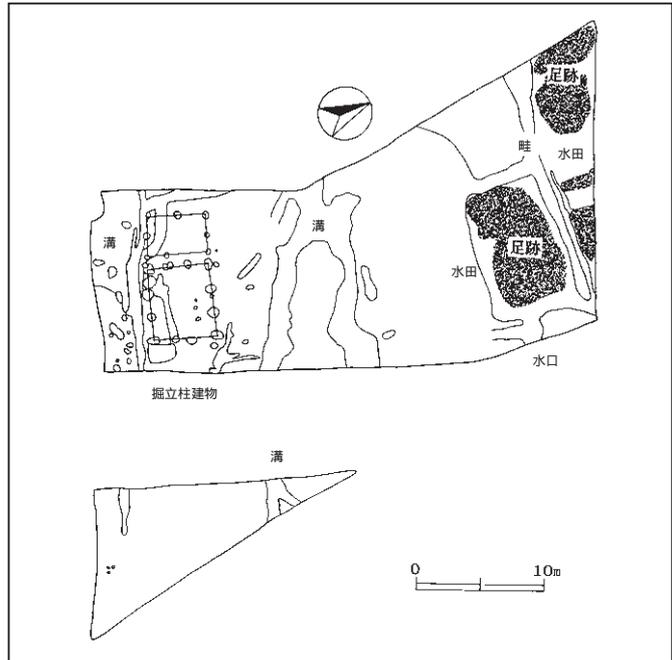
I・J地区 -1面 遺構略図 (S=1/600)

[I・J地区第 -2面]

現地表下約160cmで検出された平安時代初め頃の生活面である。遺構は、掘立柱建物2棟、溝4条、水田跡などを検出している。3×3間の掘立柱建物は梁行と桁行ともに約6mを測る正方形をした側柱建物である。その柱穴掘り方の形は多様な様相をみせており、平均して約70cm×約60cm（円形に近いものは径約70cm）、深さ約30cmを測る。その周辺からは、銅碗や稜碗などの仏器が出土していることから、寺（村堂）跡の可能性もある。もう一つは、梁行約3m、桁行約4.5mの2×2間の建物である。この柱穴掘り方は円形で、直径約40cm、深さ約30cmを測る。溝は4条ともに東西方向に走っているが、うち1条は南北にクランクする。調査区中央を東西に走る溝をはさんだ北方には水田跡が検出されている。約10×6mの長方形をした水田が1枚、さらに畦をはさんだ向かいに4枚程度あったと思われる。水口が山手側（東側）で確認されており、水田内には人や動物の足跡が多数みられる。

遺物は、9C頃の須恵器や土師器が多量に出土し、「田地」「文人」と書かれた墨書土器や「井」と刻書された土器もみられる。

（宮川）



I・J地区 -2面 遺構略図 (S=1/600)



J地区 -2面掘立柱建物跡完掘状況（東から）



J地区 -2面須恵器出土状況



J地区 -2面水田跡完掘状況（西から）

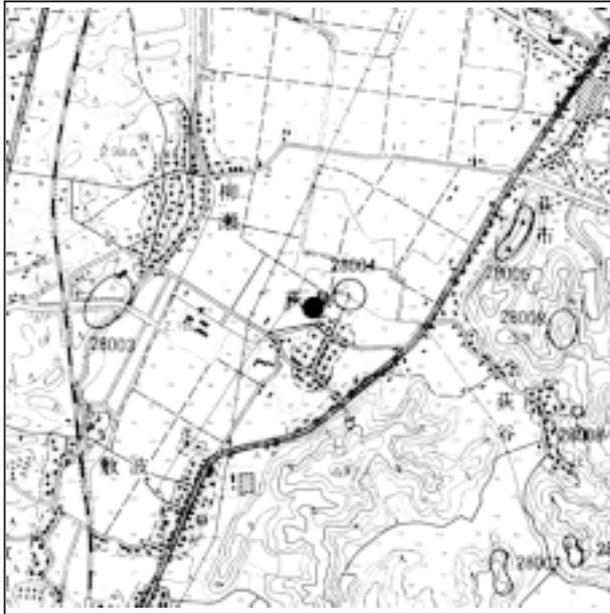
6 荻島遺跡 おぎのしま

所在地 羽咋郡志雄町荻島地内

調査面積 400m²

調査期間 平成11年6月9日～平成11年7月9日

調査担当 久田正弘 国守 剛（調査第2課）



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

荻島遺跡は呂知地溝帯内の南西端に位置し、海岸砂丘の後背地にあたる平野部に立地する。遺跡は丘陵部裾近い海岸砂丘と思われる微高地に立地している。過去にトレンチ調査が行なわれており、縄文土器（前期）弥生土器、土師器、須恵器、近世の土人形が出土している。調査区は遺跡の西側縁辺部にあたり、遺跡中心部と比べると1m近く低い場所である。調査区内では比高差はほとんど無いが、調査区外では30～60cm低くなっている。

A2区北～B2区には鞍部があり、B1区東側までに多量の土器が出土した。古墳時代後期～平安時代までの土器が出土し、中層には叩き板と思われる木製品が出土した。A3～4区では掘立柱建物が3棟、竪穴式住居と思われる土坑が2基存在した。A8区には鞍部が存在し、井戸と思われる土坑1基と掘立柱建物1棟が存在した。A9区では竪穴式住居と思われる土坑1基と井戸と思われる土坑1基、掘立柱建物1棟が存在した。A10区では古代の竪穴式住居（次頁写真）が存在したが、A11～C3区では、遺構はほとんど確認されていない。D1区には縦板組の井戸（写真下）が出土し、水溜めには曲物を使用していた。D2区には1×2間以上の掘立柱建物（写真上）が存在した。D3区には幅の広い溝が存在し、時期は古代である。

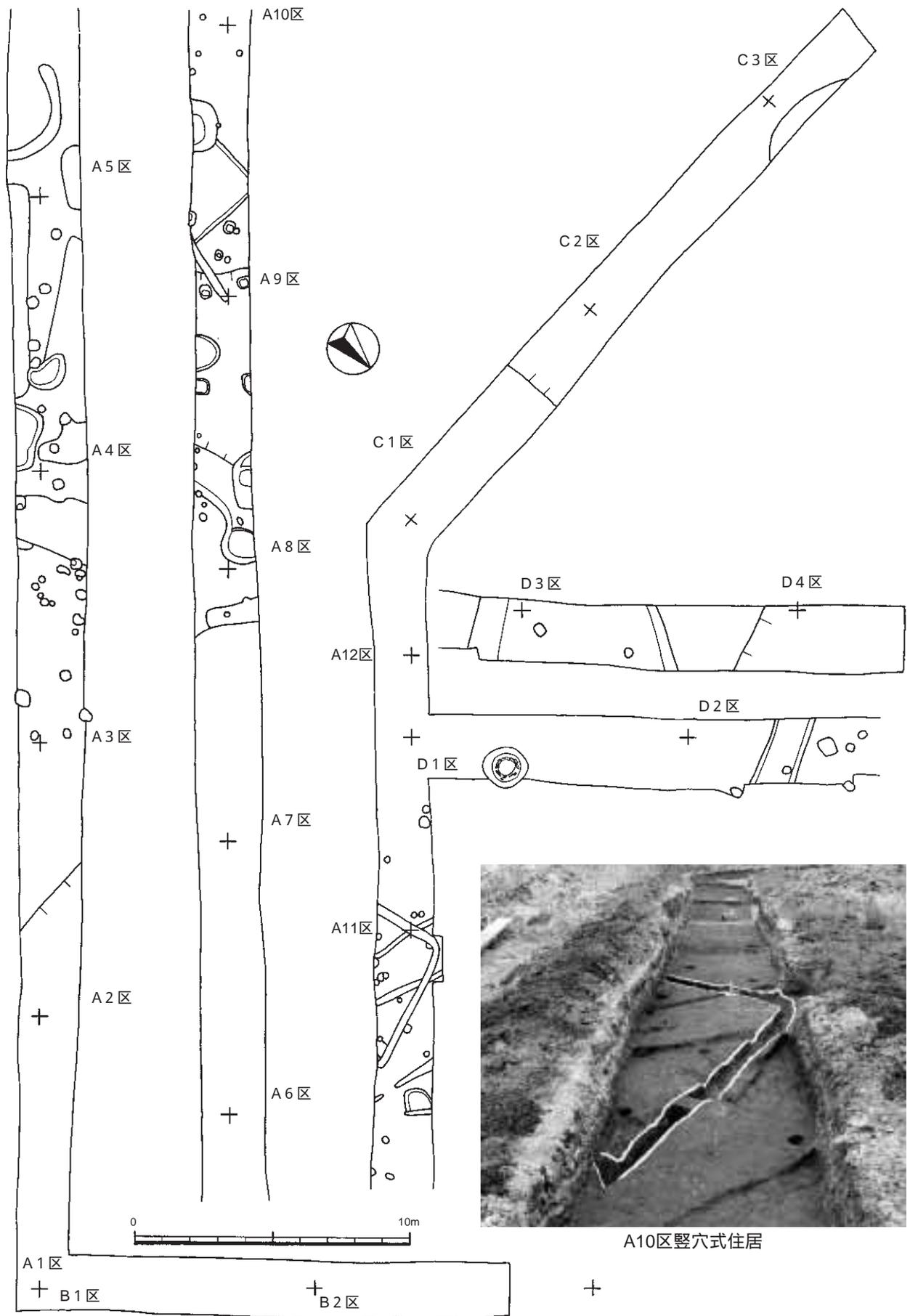


D2区掘立柱建物



D1区井戸

A2～7区では、過去のほ場整備事業で包含層が削平されており、調査区内では一番高い地点であったと思われる。また、調査区端付近（A2区北、D3区西、C1区東）では、地山（砂）が緩やかに落ち込んでおり、遺物包含層は腐植土層ないし腐植土を多く含む土であった。出土遺物からA2区では古墳時代後期から、C1区では10世紀後半から鞍部（湿地）の状態であったと推測される。（久田）



調査区全体図 (S=1/200)

7 倉見オウラント遺跡（第2次調査）

所在地 河北郡津幡町倉見地内

調査期間 平成11年5月17日～平成11年7月6日

調査面積 1,000m²

調査担当 中西洋司 三浦ゆかり（調査第4課）

本遺跡は、倉見川左岸の標高約19mの丘陵上に営まれた、弥生時代後期後半の集落遺跡である。北陸新幹線の建設工事に伴い、昨年度から発掘調査が進められているが、今年度の調査区は、昨年度の調査区の南に広がる丘陵斜面上に位置する。

調査区域は、東側が「おうらんと」と地元で呼ばれてきた墓地で、西側は近年まで畑地であった。「おうらんと」は、恐らく「大卵塔」つまり墓地を指す呼称で、墓標から幕末頃までその立地を遡ることができた。墓地の東側斜面の土層からは、墓地が立地する以前に地すべりがあり、表土である黒色砂質土が大量に流れ込んだ様子うかがえた。



遺跡位置図（S=1/25,000）

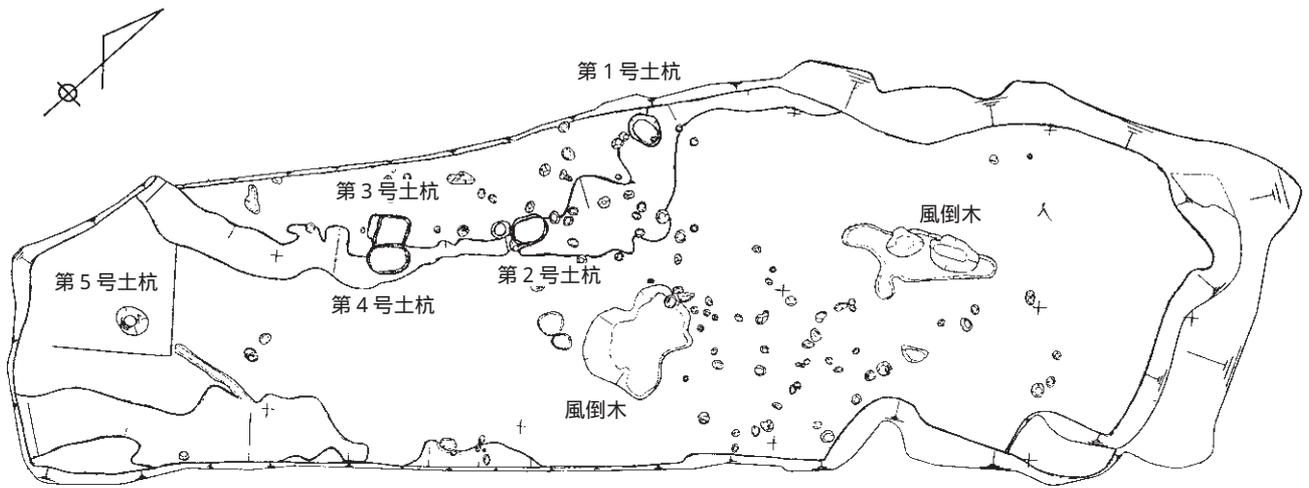
調査では、弥生時代後期後半と思われる4基の土坑をはじめ、ピットや風倒木の跡が検出された。土坑の平面形は、円形のものが3基と隅丸方形のものが1基で、いずれも規模は長径約150cm前後、深さ約30～60cmを測る。丘陵の裾部を巡るように立地することや、断面形などから小型の貯蔵穴とみられる。その他ピットを多数検出したが、須恵器を出土しているものもあり、古代の建物跡になる可能性もある。

調査区の地形については、北西に丘陵の裾が広がることから平坦面が若干みられたが、大半は北東から南西方向に走る幅10m前後の鞍部からなる。南東で鞍部が再び立ち上がり始めてはいるが、平坦面が広がるのは調査区外になると思われる。鞍部上層の覆土である褐色砂質土層には、多量の弥生時代後期後半の土器と、8世紀後半頃とみられる須恵器が少量含まれていた。鞍部の形成時期については、弥生時代後期後半から古代とみられるが、上層を除去した黒色シルト層の上面が古代の遺構面で、下層の暗褐色シルト層の上面が弥生時代の遺構面になるのではないかと推測している。

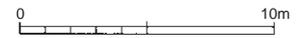
また、鞍部の最深部分から円形の土坑を1基検出したが、遺物は出土せず時期は不詳である。土坑の規模は、径約120cm、深さ約100cmで、断面は外開きに立ち上がる。重機で掘削中に検出したため掘り込み面が確認できなかったが、恐らく鞍部の下層から切り込んでいると思われるので、深さはさらに30～40cm深かったものと推測される。その形状や立地のあり方から、貯蔵穴以外の可能性も考えられる。

一方、調査区の南東約40m離れた丘陵上の先端で、津幡町が平成8年度に発掘調査を実施しており、弥生時代後期後半とみられる竪穴住居跡や、貯蔵穴群が検出されている。本調査区の土坑群と同時期の遺構とみられることから、住居域は本調査区の南東方向に広がる丘陵の緩斜面に存在するものと推測している。

（三浦）



調査区平面図 (S=1/300)



調査区全景 (南西から)

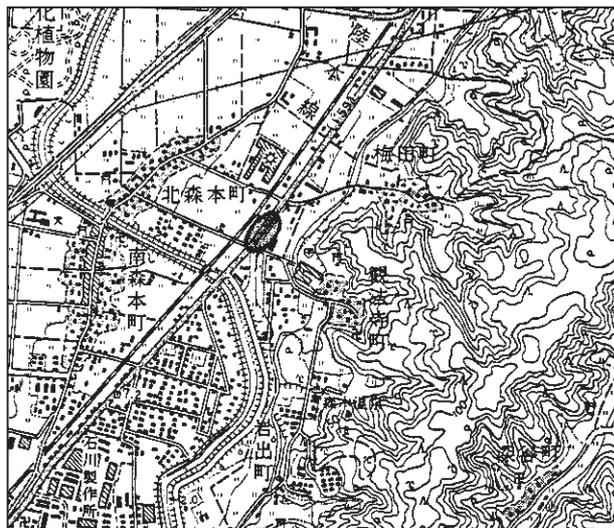
8 観法寺遺跡

所在地 金沢市観法寺町地内

調査期間 平成11年5月11日～平成11年8月12日

調査面積 2,500m²

調査担当 松浦郁乃 荒木麻理子(調査第1課)



遺跡位置図 (S=25,000)

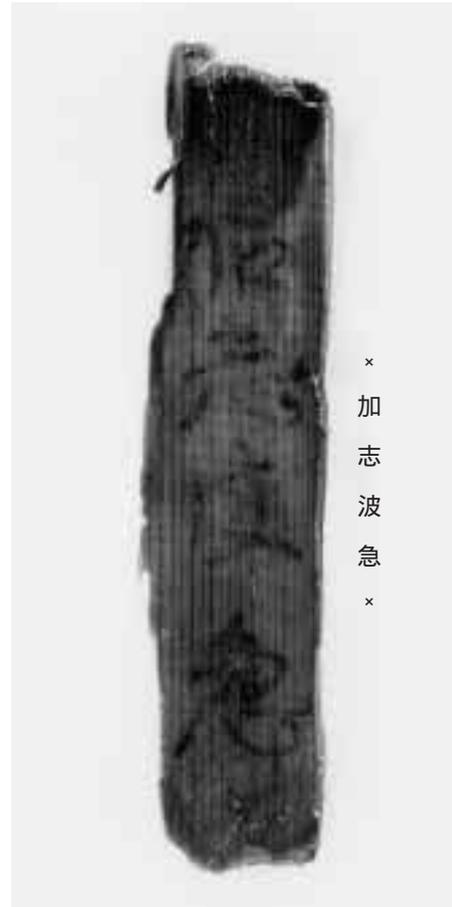
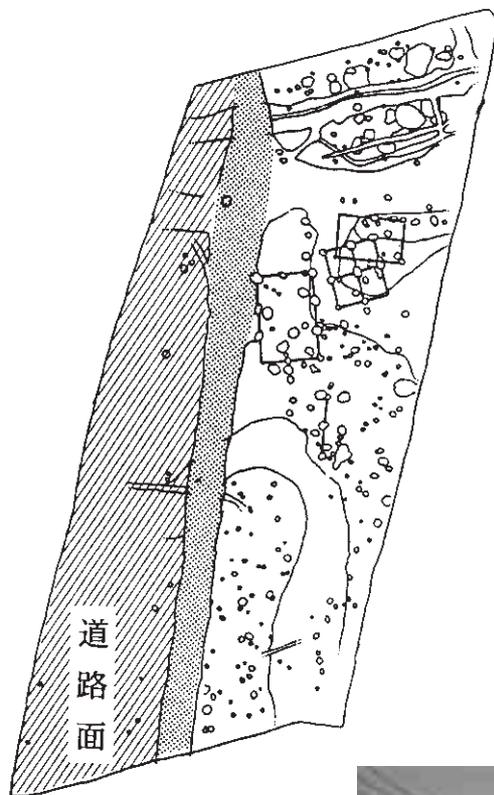
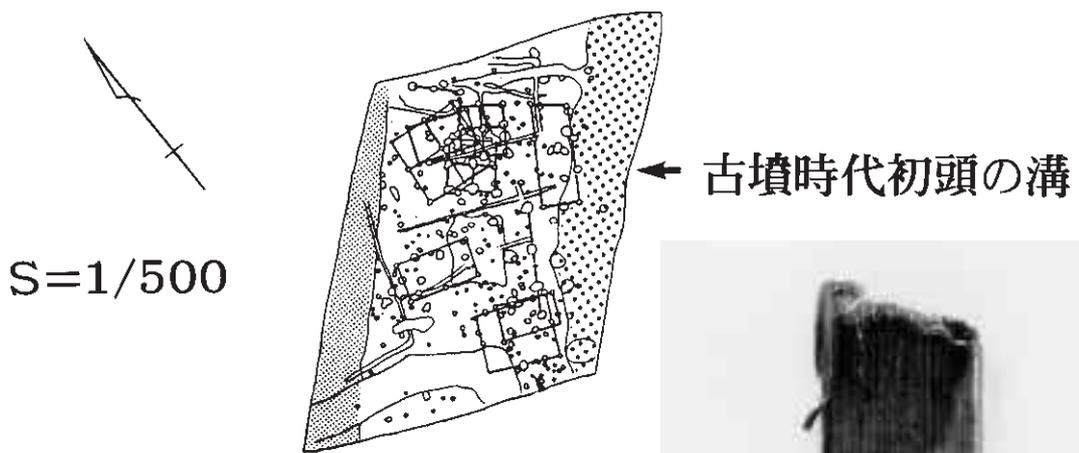
本遺跡は国道8号東部環状道路改築工事にと
もない調査が行われた。北東約500mには縄文
から近世にかけての複合遺跡の梅田B遺跡が、
東側丘陵部には観法寺古墳群が存在する。

本遺跡からは、主に古墳時代初頭と古代の遺
構と遺物が確認された。古墳時代初頭の遺構は、
幅約4m・深さ約1mの溝が検出され、埋土中
からは多量の遺物が出土した。甕・壺・高坏な
どの土器に加え、緑色凝灰岩の剥片や玉砥石・
玉製品などが出土した。調査区内からは同時期
の他の遺構は確認できなかったが、遺物の量、
内容からも周辺に集落が広がっていた可能性が
考えられる。

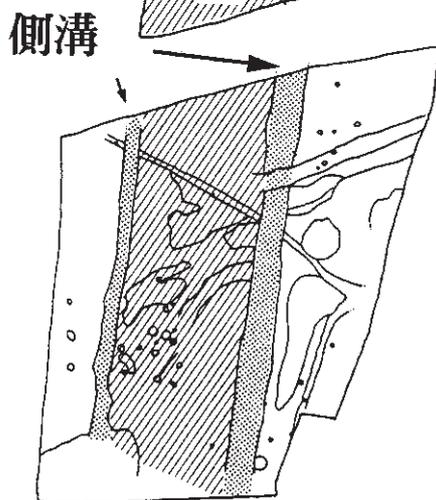
古代では、2つの主だった遺構が確認された。一つは建物跡で約11棟が確認された。いずれも2
間×3間程度の側柱建物と2間×2間の総柱建物であった。多いところでは4棟の建物が重複して検
出されたが各建物跡の詳細な時期については、今後の出土遺物の整理を行いながら考えていきたい。

もう一つは古代の道路遺構があげられる。道路の側溝とみられる、並行し直線的に延びる溝が2条
検出された。1条は総延長にして約100m、ほぼ調査区を縦断して検出された。溝の幅約2m・深さ
約60cm～1mで、もう1条は幅約1m・深さ約70cmで約20mにわたって検出された。いずれも溝断
面形は逆台形を呈する。両側溝は心々距離にして約9.5m離れており、津幡町加茂遺跡で確認された
「北陸道」とみられる道路遺構とほぼ同様の規模の道幅をもつ。残念ながら硬化面や波板状凹凸面等
の確認できなかったが、ほぼ直線的な溝が2条並行して延びていくこと、加茂遺跡の道幅と近似値を
示すこと、各地の駅路とされる道路遺構では8世紀末に廃道となるものがみられ、本遺跡の側溝の埋
没もほぼ同時期に見られることなどから、駅路である北陸道の一部の可能性が考えられる。しかし、
加茂遺跡では8世紀末までの旧道路と、幅約3mに縮小され10世紀初頭に埋没した新道路が見られる
のに対して、当遺跡では新道路に該当する部分が確認せず、そのルートが不明である。また、このま
ま側溝を真っ直ぐに延長させると、すでに調査が完了している梅田B遺跡にぶつかるが、そのような
遺構は、図面上は確認できない。現段階ではカーブして現国道159号線の下へと続いていくのではな
いかと想定しているが、今後の梅田B遺跡の整理作業の結果を待って再考したい。側溝の埋土中から
は8世紀後半を中心とする須恵器と、瓦・木簡等が出土した。瓦については当遺跡の近隣に観法寺瓦
窯があったとされ、その地点で表採された瓦とも胎土が類似することから、観法寺瓦窯で製作された
瓦と考えられる。パンケースに1箱分出土しており、周辺に瓦葺きの建物が存在していた可能性もあ
る。木簡は上下左の部分が欠損しているが、「加志波急」の4文字がはっきりと読みとれる。「加志波」
とは人名とみられる。

今後の課題としては、周辺で確認された建物跡は道路を意識していないものと、道路の方向に軸を
揃えるものに分かれることから、整理作業の段階で、周辺の集落の形成や廃絶と道路の成立・廃絶
などの関係についても検討していきたい。(松浦)



出土木簡



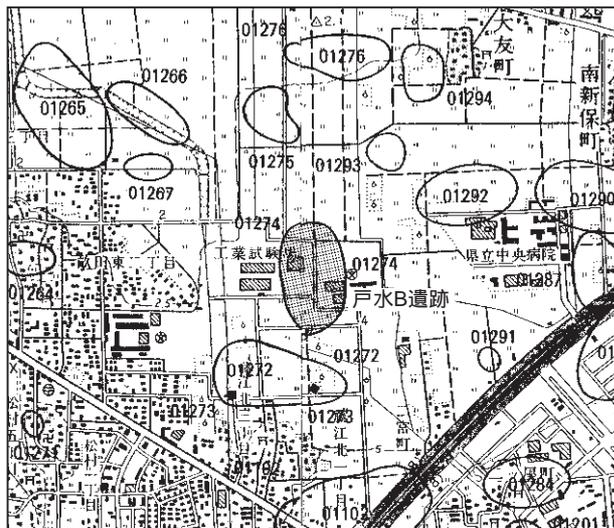
遺構略図 (S=1/500)



道路遺構全景 (南西から)

9 戸水^{とみず}B遺跡（第13次調査）

所在地 金沢市藤江北4丁目、戸水町イ地内 調査期間 平成11年4月12日～平成11年6月30日
調査面積 1,030m² 調査担当 岩瀬由美 浅野豊子 加藤裕介



遺跡位置図 (S=1/25,000)

(調査第2課)

戸水B遺跡は弥生時代中期末葉、北陸第 様式の標式遺跡である。

今年度の発掘調査は県民せせらぎの杜整備事業に伴うものであり、第13次調査となる。中央調査区、北調査区、南調査区の3地区の調査を実施した。中央調査区は旧金沢西高等学校のグラウンド部分に位置し、南調査区は体育館西棟の南階段付近であり、1981年の第3次調査区に隣接している。北調査区は現石川県地場産業振興センターの東側、1989年の第6次調査区に隣接している。

以下、各調査区の概要を紹介したい。

[中央調査区]

掘立柱建物跡2棟、トチの実の貯蔵穴数基、溝・土坑・ピット多数を検出したが、時期は戸水B式期が主体であった。南北方向に走る溝SD13014はその内外で遺構密度が異なる事などから、集落の区画溝の可能性が高いと考えられるが、土器の出土状態からは区画外に居住域が存在する可能性も残る。また、SD13020は建て替えの痕跡を残す平地式住居の可能性もある。注目される遺物としてはSD13014より出土した大型石包丁が上げられる。最大長21.2cm、最大幅10.6cm、最大厚1.9cm、重さ381.3gを測る。石材は凝灰岩であり、両側穿孔が施されているが、未貫通である。刃部は丁寧に仕上げられている。他に小型の分銅型土製品が包含層より出土している。

[北調査区]

溝、土坑、ピット等を検出したが、戸水B式の土器を多量に出土した土坑1基の他は遺構密度が希薄で遺物量も少なく、本遺跡の北東部縁辺と考えられる。

[南調査区]

中央調査区、北調査区と同様に溝、土坑、ピット等を検出したが、北から東方向に湾曲する溝SD13032については、第3次調査における平地式建物等の周溝の延長である可能性が高い。この溝内

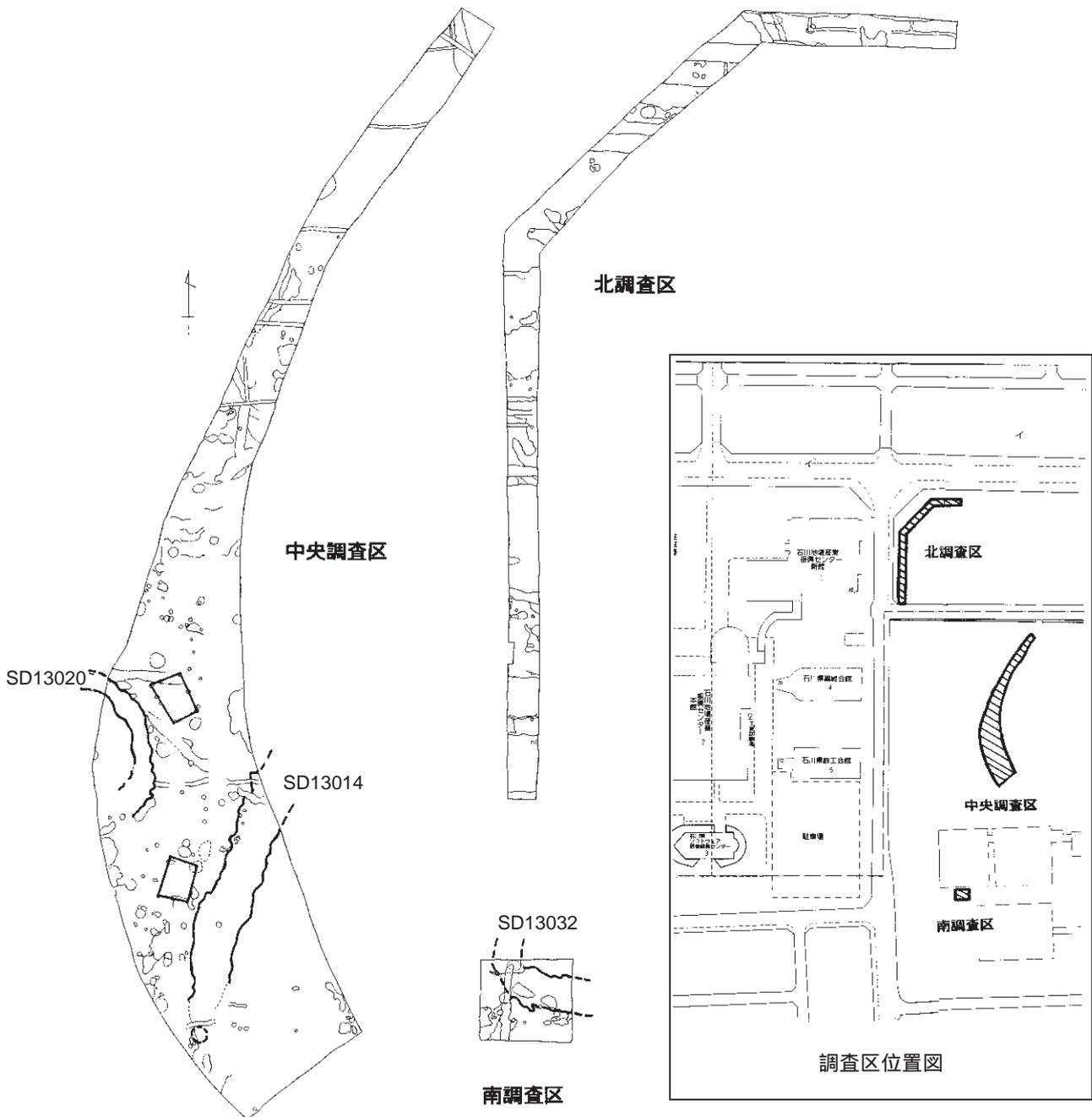


中央区完掘状況 (南から)



石包丁出土状況

の調査区北端より厚い炭層と土器が混入した土坑を検出した。建物が使用されなくなった後の生活用品の廃棄場として利用されたとも考えられ、その機能も注目される。土器の時期は戸水B式期である。
 (浅野)



各調査区 遺構概略図 (S 1/500)

10 畝田・寺中遺跡 (A1・A2・B地区)

所在地 金沢市畝田西3丁目地内 調査期間 平成11年4月15日～平成12年1月6日
 調査面積 A1・A2地区 1,850㎡ 調査担当 中森茂明 白田義彦 西田昌弘 和田龍介
 B地区 1,750㎡ (調査第2課)

畝田・寺中遺跡は金沢平野の一部をなす河北低地の南西部、犀川右岸に位置する。犀川までは約1.3km、海岸線までは約1.5kmであり、近くに金沢港、金石港がある。周辺は近年まで水田地帯だったが、今では宅地化がすすみ、当時の面影が失われつつある。本遺跡周辺は県下有数の遺跡密集地域であり、時代が複合する遺跡が多く存在する。本遺跡も弥生時代中期～中世までの複合遺跡である。



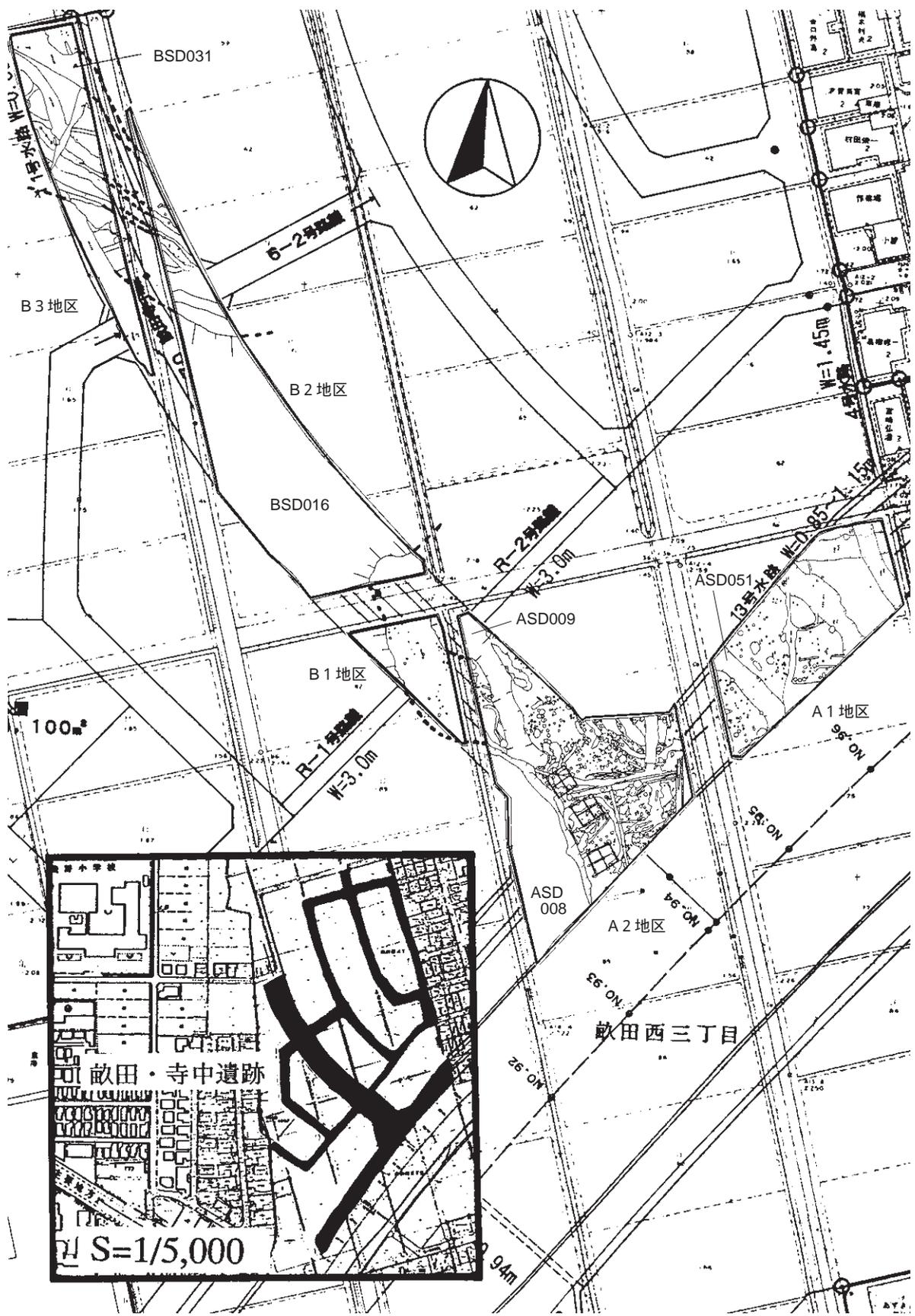
遺跡位置図 (S=1/25,000)

本調査は金沢西部第二土地区画整理事業に伴うものである。本年度は外環状道路(側道部分)都市計画道路、区画整理に伴う街路部分の調査を行った。外環状道路(側道部分)をA地区(A1～4)、都市計画道路をB地区(B1～3)、街路をC～G地区、その他現道部分をH～J地区として調査を行った。本誌では11年度上半期の調査箇所であるA1・A2・B地区の概略を述べる。(白田)

本調査は金沢西部第二土地区画整理事業に伴うものである。本年度は外環状道路(側道部分)都市計画道路、区画整理に伴う街路部分の調査を行った。外環状道路(側道部分)をA地区(A1～4)、都市計画道路をB地区(B1～3)、街路をC～G地区、その他現道部分をH～J地区として調査を行った。本誌では11年度上半期の調査箇所であるA1・A2・B地区の概略を述べる。(白田)



調査区遠景(南から)



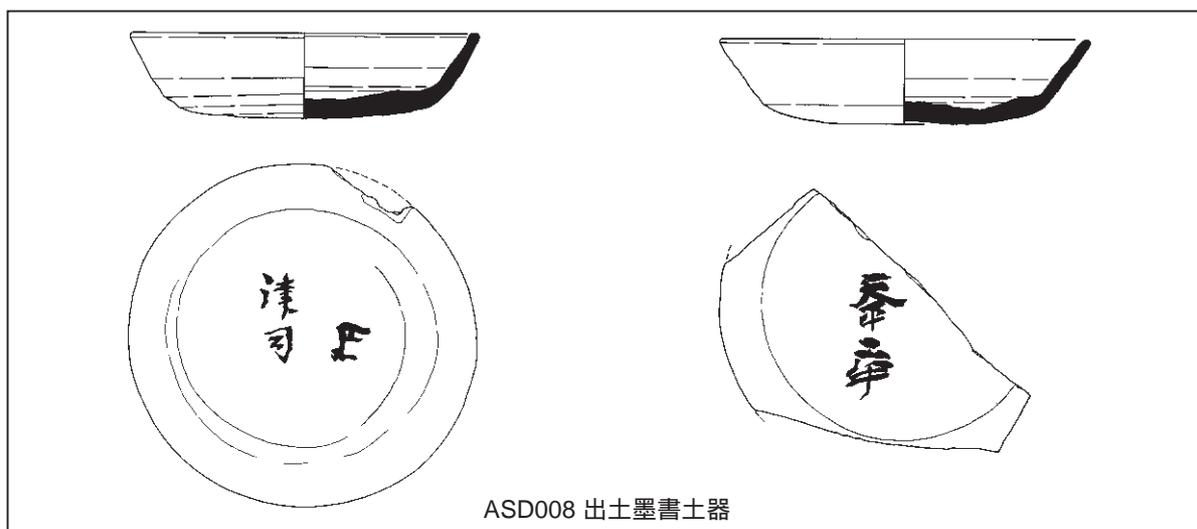
遺構配置図 (S=1/1,000)

[A1地区]

外環状道路の東端にあたる調査区となる。遺構密度は全体的に希薄で、特に東に行くほどその傾向が強かった。遺跡の縁辺部にほど近い部分と考えられる。掘立柱建物跡2～3棟大溝、ピット、土坑、井戸などが検出されている。ピットは大半が小型のものである。大溝ASD004およびASD051は規模の似たほぼ平行に走る南北溝で、古墳時代中期～後期頃の所産と考えられる。出土遺物の時期もほぼ同じである。双方とも溝底に近いレベルで土器の集中箇所がみられたが、後述するA2地区ASD009ほどではない。なおASD051の溝底からは網代に編まれた籠状製品が出土している。ASD004以东では、大きめの溝の他はピット等の遺構をほとんど検出できなかった。井戸は縦板組隅柱横棧どめの井戸側をもつASE003、井戸側を抜き取られて曲物水溜を残すASE002の2基を検出しているが、出土遺物が少なく時期は定かでない。

[A2地区]

外環状道路と都市計画道路が合流する交差点部分にあたる。A1地区ASD051以西より遺構密度が過密となり、そのままA2地区の遺構群に展開する。旧河道、古墳時代大溝、建物跡、ピット、土坑等が検出されている。建物跡は現状で側柱建物を4棟、2×2間の総柱建物を3棟復元しているが、今後の検討で増える可能性を残している。倉庫と考えられる総柱建物3棟は旧河道の流れに沿うようにして建てられており、河道を用いた物流に関する施設の可能性を指摘できる。土坑では多量の土器に混じって白玉を多く出土する土坑が数基確認されており、焼土坑と思われるような炭化物層を有するものもあった。溝では南北に走る大溝ASD009で一括廃棄と思われる多量の土器群を2面検出している。全体としてA2地区は、古墳時代の遺構群が大半を占める様相を呈しているといえよう。



掘立柱建物群完掘状況 (南東から)



墨書土器「語一語」

A2地区の中心となるのが、遺跡地を蛇行して流れる旧河道ASD008（B地区ではBSD016）である。旧河道は古墳時代中頃～9世紀まで流れていたと考えられ、土器・木製品等多量の遺物を出土している。河道内の肩近くには流れに沿うようにして打ち込まれた杭列と、杭列によって保たれている2～3mほどの細長い板材が一部で残っていた。また河道中央付近には径20cmほどの太い杭が数本打ち込まれて列をなしており、護岸もしくは舟の係留施設のようなものがあったのかもしれない。これらの構造物については、今後の重要な検討課題となろう。

旧河道出土遺物は、8世紀代の須恵器を中心として土器が多量に出土しているが、これらの中には130点あまりの墨書土器（すべて須恵器）が含まれていた。書かれた文字は「語」・「語 - 語」・「語成人」などの「語」字グループが全体の7割ほどを占めている。この「語」についてはウジ名（語部か？）役職名（「津司」墨書の出土から通訳・訳語とする考え方がある）吉祥句（「語語」で「よろこぶこと」の意あり）などが考えられる。この「語」字グループ墨書は旧河道でもA2地区のみで出土していることが特徴的である。また出土墨書土器全体の傾向として、墨書土器の出土がある特定の箇所に集中して出土すること、それぞれの箇所ですべての文字・語句を持っていることが挙げられる。現在墨書土器を抽出中であるが、遺跡全体を通して共通の、キーワードとなるような文字・語句は確認できていない。他に公的機関の存在を窺わせる「天平二年」、田地開発の拠点であったことを示唆する「荒田家」などがあるが、最も問題となるのが「津司」墨書であろう。「津司」を役所名ないし役職名と解釈すると、本年度の調査では津（司）という官衙的施設を思わせるような遺構群を確認できていない。「津」の機能・構造や津を管理する施設・役職については文献史学・考古学ともに研究が進んでいるとはいえない現状である。本資料が研究を深化させる契機となることを期待している。

（和田）

[B地区]

本調査区では、A地区より続く旧河道（BSD016）が大半を占めている。この他、多数のピット・土坑とともに、河道以北において、北肩部にほぼ平行する溝群数条と掘立柱建物跡1棟を確認している。時期はいずれも旧河道とほぼ同じ、古墳時代中期から8世紀代にかけてが中心であった。

調査区中央以南に位置する旧河道は、A地区寄り、上層の暗灰色粘土層より多量の8世紀代の須恵器を、下層の青灰砂層で若干の木製品と自然木を出土する似通った様相を示していた。しかし、中央部以北では須恵器の出土は稀となり、中層の暗青灰色砂層以下から大量の木製品の出土がみられた。地山の青灰色粗砂からの激しい湧水のため木製品の保存状態は良く、大量の部材の他、鍬や鋤等の農具、弓、木錘、網杵、盤、曲げ物、剝物桶、漆塗りの椀、木筒片などを確認している。木筒片は、南肩部より出土しており、現存長で長さ110×幅15×厚さ4mmを測る。表裏ともに墨痕を確認できたが、縦方向に細かく分割された内の一片であったため、文字を判読することはできなかった。

これら木製品とともに、桜などの自然木も多数認められた。特に、北肩部と河岸から約4～5mのところ検出された杭列との間で、密集して出土している。本調査区検出の杭列は不規則ながらも、河岸と平行して2列に並ぶものと思われ、その杭間は80cm前後を測る。A地区ほど規格性をもっていないため、何らかの水利施設であったとは推測できるが、性格は掴みきれず、今後旧河道と周辺の溝群の全体的なプランを踏まえ考察していきたい。

また、石製品としては勾玉や管玉、白玉、紡錘車などが出土している。勾玉は、滑石製の板状勾玉とコハク製勾玉を各1点確認している。特に後者は、頭部が欠けた後も、再度磨かれ孔が開け直されており、その貴重性を窺い知れる。また、出土した紡錘車の中には、木製の軸をつけたまま出土した資料が2点確認された。内1点には、軸頭部に糸を掛けるための切り込みが施されていた。この他に

上層より金環を、中層より土馬を確認している。

旧河道の断面観察から、本調査区内では2、3度の流路変遷が推測されたが、それらを平面的に追うことはできなかった。また、上・中・下層に大別して遺物を取り上げたが、調査段階ではそれらに明瞭な時期差を認めることはできなかった。流路の問題も含め、今後旧河道の時期的変遷を捉えていきたいと思う。

旧河道以北の溝群では、調査区最北端部で検出されたBSD031から、「津」と墨書された8世紀中頃の須恵器を5点確認している。溝は幅4～5m、深さ約1mを測り、南東から北西へと日本海に向かって流れていたと推測される。出土した「津」の墨書土器より、BSD031と旧河道は一時期併存して流れていたと考えられる。

BSD031からは、墨書土器の他にも木簡（1号木簡）が1点出土している。本木簡は、長さ（103）×幅292×厚さ9mmを測り2つに割れた状態で出土した。内容は、「天平勝實四年」（752年）に始まり、人名に続いて稲の数量が書かれていることから、出挙の貸付・収納を行う際に使用した作業用帳簿と推定される。人名は11人分書かれており、6人目までの人名の上には合点が打たれていた。これは帳簿が確認されたことを示していると考えられる。また、最初の人名の上には「戸主」と書かれていることから、「合稲二百」までの7人は「阿刀足人」を戸主とするひとつの戸であると考えられる。以上のことを踏まえると、本木簡に関して以下の4点の特徴が挙げられる。

出挙関係木簡としてほぼ完形で出土しており、なおかつ文書の全容が明らかである。

計帳の形式にのっとった様式・体裁で書かれている。

戸単位で出挙が把握され、戸の構成人員ごとの貸付額が書かれている。

「天平勝實四年」の年号をもっており、絶対年代が明らかになっている。

これらの点から、本木簡は古代国家の重要な財源であった出挙の実体をより明らかにする資料といえるだろう。

また、BSD031北肩部寄りでは、井戸を1基確認している。井戸は2重の井籠組で、長軸約280cm、深さ約95cm、内枠約65cm四方、外枠約135cm四方を測る。上部は削平されているものの、現存で内枠板5段、外枠板2段が確認できた。時期は、BSD031の覆土を掘り込んで作られていたため、溝が機能しなくなった後と推測される。しかし、井戸内枠底部から出土した須恵器坏は8世紀後半に比定されることから、溝の廃棄と井戸の形成にはあまり時期差がなかった可能性がある。

旧河道とBSD031に挟まれた区域で、掘立柱建物跡を1棟確認している。しかし、2間分の柱穴が確認できたのみで、続きは西側調査区外にのびる。軸は北西-南東方向で、3基中2基からは柱根を確認できた。B地区で確認できた建物跡はこの1棟のみであるが、未調査区を含め、今後河跡や溝群との関わりを考慮しつつ、その時期や機能に関して検討していきたい。（中森・西田）



BSD016 北肩部自然木検出状況（北西から）



BSE001 内枠内完掘状況（南から）



1号木簡

1号木簡実測図 (S=1/2)

- 「天平勝寶四年上領
- 「戸主阿刀足人六十×
- 「妻答尋宅女卅×
- 「阿刀三繩州束
- 「妻館氣奈加女×
- 「山邊足君州×
- 「内麻呂廿×
- 「悪万呂×
- 「合稻二百□×
- 「田秋人卅×
- 「答尋□□女卅束
- 「刑マ小當廿束
- 「姓味知万呂十×

1号木簡积文

11 金沢城跡(五十間長屋調査区)

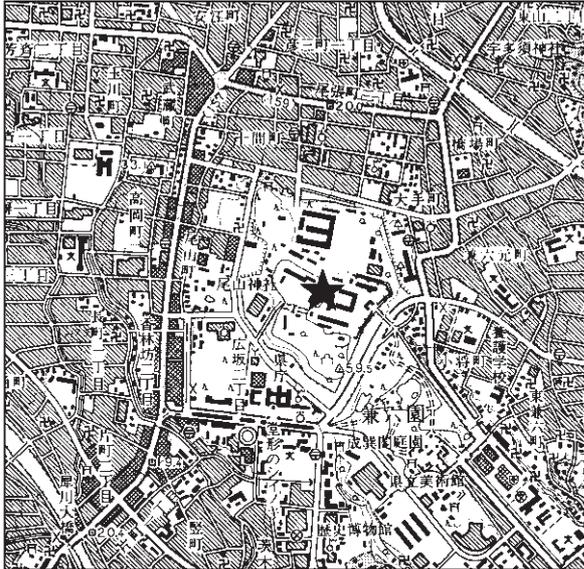
所在地 金沢市丸の内地内

調査期間 平成10年7月21日～平成11年7月2日

調査面積 1,200㎡

調査担当 滝川重徳 端 猛 熊谷葉月 土田友信 湯川善一

(調査第4課)



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/2,000)

金沢城跡は加賀一向一揆の政庁尾山御坊(金沢御堂)を前身とし、天正11年(1583)の前田氏入城以後、同氏による加賀・能登領国支配の拠点となった近世城郭である。平成9年度以降、県による城址公園整備事業に係る埋蔵文化財調査が本格化しており、本調査は平成13年度完成予定の菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓復元工事に係る石垣台の部分的解体に伴うものである。

二ノ丸東縁に連なる菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓は、二ノ丸御殿警護の要となる城内有数の重要施設であったが、明治14年(1881)前田氏退去後城内を管轄した陸軍(歩兵第七連隊)の失火により御殿もろとも焼失した。一方建物の土台を為す石垣台は、南北延長約100m、上面幅約8～11m、内堀底からの高さ約11m、二ノ丸側からの高さ約2.7mを測る。内堀側の面は割石積み(打ち込みハギ)により、その他の面では切石積み(切り込みハギ)の技術を駆使し、石垣石の石材は、間詰めを除けば全て戸室石で構成されている。

調査の結果より、石垣台構築以前の状況、石垣台構築時期(当初)とその特徴、石垣台の改修時期とその特徴、石垣台上面の建物構造等が明らかになりつつある。

石垣台構築前後の状況については、最も孕みの著しかった五十間長屋中央付近内堀側(東側)で確認した。標高50.8mを測る石垣台上端(天端)から、それぞれ約8m・約9m下部のレベルで、

石垣構築以前の遺構面が2面認められる。

このうち下部遺構面では、壁土採取のため掘削されたと思われる土坑が南北に連なって検出され、土坑内から陶磁器・木製品・金属製品他の遺物がまとまって出土した。これらには生活用品の他、屋根材とおぼしき板材も多数含まれる。また金銀細工を施した小柄等優品も若干含まれており、比較的身分の高い、武士階級の居住が推測されよう。

陶磁器の時期組成は、元和7年(1621)頃を最新とする兼六園(江戸町推定地)第3遺構面出土遺物と類似する。文献・絵図の検討によると、慶長～元和頃(1595～1624)には城内に重臣の屋敷が多く存在していたとされており、本遺構面も元和期以前の重臣屋敷の一面に相当すると考えるのが妥当であろう。また上部遺構面は目立った遺構がなく、遺物も稀少であるが、広葉樹の切り株の存在が目さ

れる。若干の盛土造成が為されつつ、引き続き武家屋敷として利用されていたと考えておきたい。

石垣台の根切り（掘り方）は、上記遺構面を深さ約3m程ほぼ垂直に掘削するもので、内堀掘削と一体的に施工されたものであろう。なお根切り最下部には、松材と思われる丸太を粗加工した胴木（一本のみ）が確認された。

石垣石は背後に川原石を充填しつつ積み上げられているが、上部遺構面以上では、裏込めの様相は川原石・盛土が交互に層状を為すものとなっており、積み上げ作業は石垣台背後の造成と一体化しているものと思われる。即ち石垣台は、西側に広がる現・二ノ丸平坦面と同時に形成された可能性が強い。現・二ノ丸の造成については、寛永8年(1631)の大火を契機に施工されたとする史料があり、上記遺構面の年代観からも、石垣台構築をこの頃に比定する見方が支持されよう。

しかしながら構築当初の石垣は、後述する改修により、五十間長屋・続櫓入隅付近（内堀側＝東側）・五十間長屋中央部内堀側・五十間長屋折曲部二ノ丸側（西側）を除くと、根石から一～二段が残るに過ぎない。割石積み（内堀側）の特徴としては、刻印を持つ石を多く用い、横目地は通るものの、これを崩す部分も目立つ。また隙間が多く、小型の戸室石材を詰めることで処理している。切石積み（二ノ丸側）部分は、正面方形の石垣石を主体とし、整然とした布積みがなされている。

石垣台は、構築後数度に亘る大規模な改修を受けている。文献には、寛文7年(1667)に菱櫓、宝暦13年(1763)に五十間長屋、天明8年(1788)・文化5年(1808)に続櫓の各石垣台改修に関わる記載があり、今回の調査で得た考古学的事実とほぼ照合している。天明期については調査では確認できなかったが、これは文化期改修時にその痕跡が払拭されたためと考えられよう。

寛文期改修は、石垣台最北端、菱櫓付近を範囲とする。内堀側の石積みは控えの長い割石を用い、整然と横目地が通るもので、石垣石間の隙間は小さい。また刻印は「一」「二」「三」といった数字を



楔・鋸検出状況（菱櫓）



石垣構築以前遺構面



胴木検出状況

小さく記すものが多い。二ノ丸側の切石積みは、明治以後に積み直しされており、不明な点が多いが、寛永期（構築当初）と大きな相違はないようである。なお出隅部においては、石垣石間の隙間に背後から鋸・楔を差し込み安定させる技法が認められる。裏込めは全て川原石で構成されている。

宝暦期改修は、五十間長屋直線部を範囲とするもので、内堀側の石積みはやや控えが短い割石を用いる。積みは寛文期に近いが横目地の通る単位が短く、刻印の残る石材は比較的少ない。二ノ丸

側の切石積みは、正面多角形・長方形を呈する材を多用し、亀甲崩し風の積み手となる。また全ての石の正面に縁取り状の調整を施している。なお内堀側・二ノ丸側とも、石垣石の背後に控えの補強として、大型の川原石や石垣石旧材を据える割合が高い。裏込めは、二ノ丸面とほぼ同じレベルまでは川原石主体、これより上、石垣台天端までの約2.5m分は、石垣面のすぐ背後のみ川原石で支持し、残りは土で充填するという工程を3～4段階繰り返し石垣台を立ち上げる方法を探っている。

なお宝暦期改修石垣に伴う特筆すべき遺物として、五十間長屋北東角上端近くより出土した戸室石製の文字刻石2点がある。ともに一辺16cmを測る立方体の切石で、一つは表面に「宝暦十三癸未年 鋤始 六月廿五日」、裏面に「鋤始」と刻んでいる。今一つも「鋤始」「鋤始」の両文字が表裏逆転する他は、文言・字体とも全く同一である。

文化期改修は、続櫓一帯を範囲とする。内堀側の割石積みは寛文期のものに類似するが、石材はこぶりである。二ノ丸側・鶴ノ丸側（南・東面）の切石積みは、基本的に正面方形の材を用いる。正面に縁取りを有する点は宝暦期に類するが、前代までに比べ、隣接する石垣石同士の密着部分大きい。積み手は整然とした布積みを呈し、鍵の手状に組み合わせる部分も見られる。石垣石を上下に積んだ際に生じる背後の隙間には、銚・黒色川原石（小烏石）剥片を詰め安定を図っている。宝暦期と同じく石垣石背後に補強の石材を据える割合が高い。裏込めについては、下部は栗石主体、上部は栗石・土を交互に積み上げ天端に至っている。なお石垣台下部中央には寛永期の盛土が残っており、盛土法面に沿って川原石主体の石積み（高さ約1.8m）が巡っている。文化期改修時に下部構造の安定を図るべく設けられたものと推定される。

石垣台上面で検出された建物基礎は二時期に大別できる。古段階の礎石は菱櫓～五十間長屋折曲部で確認できたもので、天端から約1.8m～2m下方において大小5基検出された。これらはいずれも石垣石・天端石（曇石）を転用したものである。宝暦13年（1763）に改修を受けた五十間長屋直線部では、同レベルで建物基礎は認められない。文献には宝暦9年（1759）の大火により、石垣台上の建物が焼失したことが見えるので、上記の礎石はこの近世前期の建物に伴うものと考えられる。

新段階の礎石は、菱櫓～橋爪門続櫓にかけての全域で、表土直下から検出されている。いずれも天端石・石垣石等の転用材である。このうち続櫓の礎石は文化6年（1809）、菱櫓・五十間長屋の礎石は天明7～8年（1787～1788）ないし文化6年（1809）のいずれかの建物再建に伴うものである。

以上調査成果を素描したが、アウトラインがようやく見えてきたというのが、現在の実感である。石垣石の個別観察記録等、膨大なデータをどう消化してゆくのか、問題は山積しているが、より確かな金沢城の姿を提示できるよう期したい。（滝川）



宝暦期改修時盛土（五十間長屋）



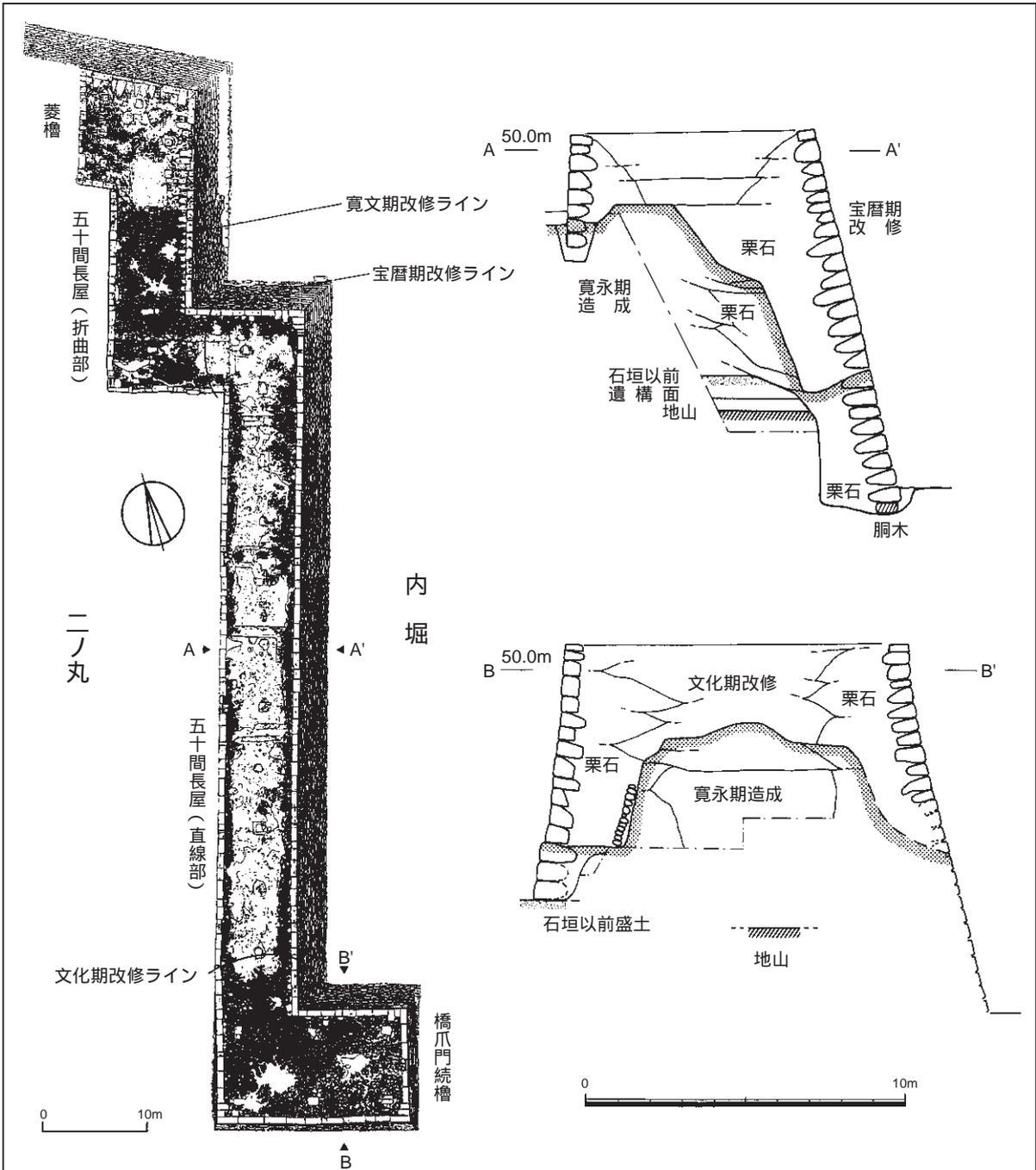
文化期改修時石積遺構（橋爪門続櫓）



文字刻石出土状況



石垣台全景（北から）



菱櫓～橋爪門続櫓平面図 (S=1/600)・断面略図 (S=1/200)

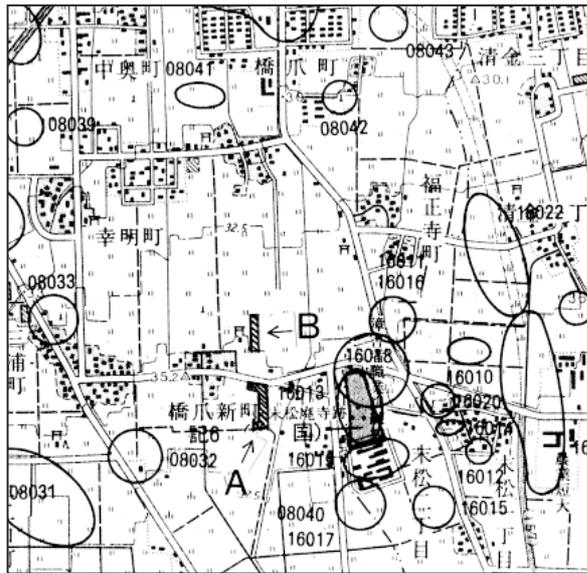
12 橋爪新A遺跡 橋爪新B遺跡

所在地 松任市橋爪新町地内

調査期間 平成11年5月6日～平成11年6月11日

調査面積 A遺跡260㎡ B遺跡100㎡

調査担当 大西 顕 藤井秀明（調査第2課）



遺跡位置図 (S=1/25,000)

橋爪新A遺跡は、手取川扇状地の扇中央部に立地している。地山面の標高は35～36mで緩やかに北側に傾斜している。遺跡から約300m東に国指定史跡末松廃寺が存在している。また、松任市と野々市町の境でもある。

遺跡は、ほ場整備事業に係る分布調査によって新たに発見されたものである。発掘調査は、排水路工事部分について実施した。基盤層（地山）は広い範囲で礫層となっており調査は難航したものになった。しかし、礫層地域でも包含層をきれいに除去すると、暗褐色土のピットの存在が多数確認された。古代の柱穴は比較的深く、石を掘り起こしながら建物を建てた昔人の苦勞が偲ばれるのであった。

[1～8区] 地山は、シルト質で包含層も良好に残存していた。遺構は時期不明の溝が数条確認されている。遺物量は少ない。

[9～13区] 地山は、礫である。それでも総柱のSB01が検出されている。覆土は黒みの乏しい暗灰褐色土で方形掘方である。柱穴からの遺物は極めて少なく時期は不明である。また調査区外にのびるため全体規模も不明であるが、覆土の状況から、古代でも古い時期の建物の可能性がある。

[14～15区] 幅約15mの鞍部が存在する。方向は東西方向に近い。覆土から7世紀後半から8世紀前半の須恵器杯がまとまって出土しており、末松廃寺との関係が考えられる。

[16～17区] 鞍部を境として、これより南側は包含層が厚く残存しており、遺物量も急に増してくる。地山はシルト質で遺構密度も高い。SD08は、くの字に屈曲する溝で、弥生後期後半の高坏が地山付近から出土している。この内側には柱穴状のピットが多く確認されていることから、これらは周溝をもつ平地式建物を構成している可能性がある。

[18～19区] 地山は礫層であるが包含層の遺物含有量はさらに増しており、遺跡の中心部的様相を示す。SB03・SB04の2棟（建て替え）の掘立柱建物が確認されている。SB03 - P27掘方からは内黒土師器椀が、SB04 - P24柱部分からは土師器長胴甕片がまとまって出土している。いずれも9世紀後半～10世紀前半のものである。調査区外にのびるため全体規模は不明である。なお、この付近は「イチマイダ」という小字名がある。

このように橋爪新A遺跡は鞍部より南側で遺物・遺構密度とも高い。時期は、弥生・飛鳥・平安のものを含む。遺跡の中心となる時期は9世紀後半から10世紀前半である。今後の整理作業を通じて、廃寺周辺で展開された扇状地の開発について検討したい。

橋爪新B遺跡は、A遺跡と同時期の分布調査によって、橋爪新脩塚八幡神社周辺で新たに発見された遺跡で、発掘調査も排水路工事箇所について実施している。地山面の標高は34m前後である。地山は黄灰色シルトで、礫層はさらに下部に存在していると推定される。調査区北部に東西方向に近い鞍

部がある。遺構は、東西方向の溝やピット（覆土は暗灰褐色土のものが多い）があるが密度は小さい。遺物は須恵器・土師器が少量出土しているのみで、遺構の時期の特定は難しい。調査区域は、集落（古代？）縁辺部であると推定される。（大西）

橋爪新A遺跡主要遺構略図
(S=1/250)



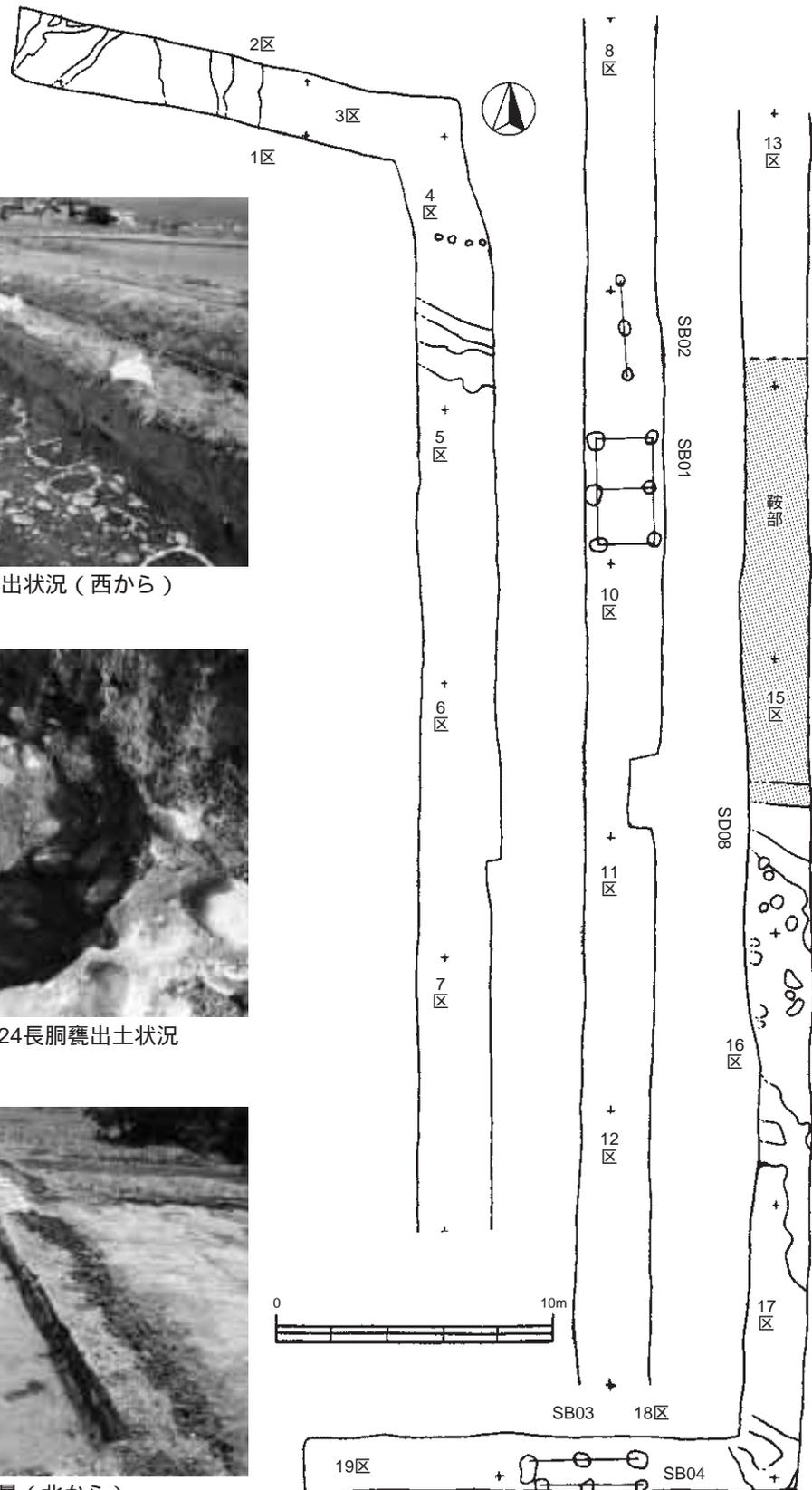
橋爪新A遺跡 18区検出状況（西から）



橋爪新A遺跡 SB04-P24長胴甕出土状況



橋爪新B遺跡全景（北から）



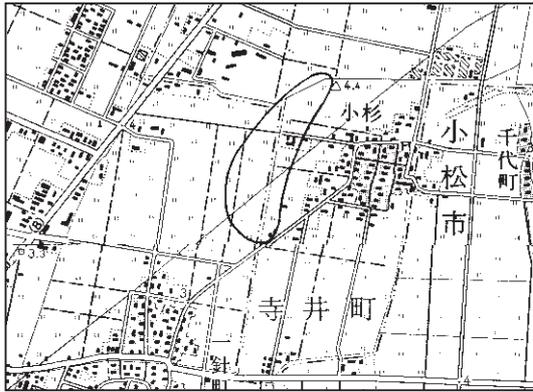
13 ^{おおながの}大長野A遺跡（第4次調査）

所在地 小松市一針町地内

調査期間 平成11年4月28日～平成11年12月8日

調査面積 5,000㎡

調査担当 本田秀生 布尾幸恵（調査第1課）



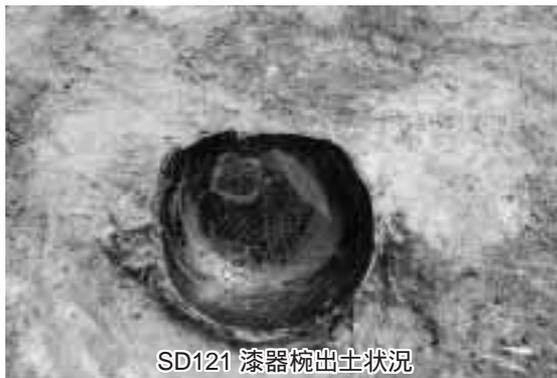
遺跡位置図（S=1/25,000）

当遺跡は、能美郡寺井町大長野・小杉から、小松市一針町地内にかけて所在する。地形的には、北を八丁川、南を梯川に挟まれた鍋谷川右岸に位置し、現況は水田地帯となっている。発掘調査は一般国道8号小松バイパス改築工事に伴うもので、平成11年度は第4次調査となる。遺跡は、弥生・中世が主体であり、以下、前半期における概要を調査区毎に述べる。

今年度調査を開始した11区では、第3次調査部分から続く溝跡やピット群が確認された。

10区においては、主に中世が主体であったが、11区では弥生時代の遺構が増加する。遺構は主に溝とピットであり、平地式住居の周溝と思われる遺構も検出された。溝からは、土器の他、分銅形土製品・磨製石剣などが出土している。中世の遺物として特筆されるものに、木を薄く剥いたもので作られた編物様のものがある。井戸からは漆器も出土した。

12区では、弥生時代のピット・土坑群・溝跡・河道、中世前半のピット・溝跡が調査されている。弥生時代の土坑は、土器が多数投棄されているものも多く、その他貯蔵穴と思われる土坑も数基存在する。また、河道では、土器とともに、木製高杯・足付盤・剣形木製品など、多数の木製品が出土した。中世では、11区から続く、柵列と考えられるピット列と溝が数条検出されている。遺物は概して少量であり、遺構密度も少ない。柵列は調査区外東西に延びている。柵列より北側部分に中世の遺構は確認されていないため、この柵列が10区で確認された居住区を区画するものと考えられる。（布尾）



SD121 漆器椀出土状況



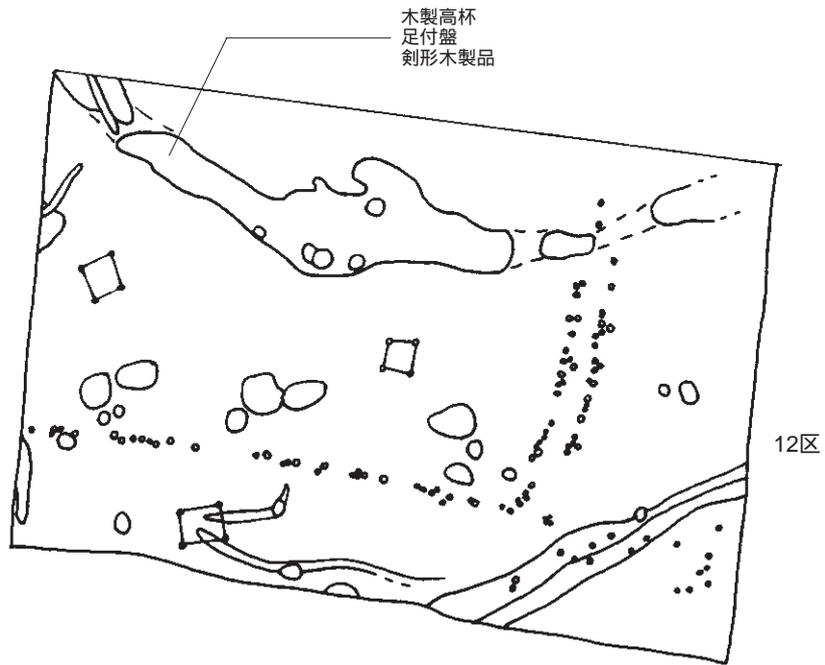
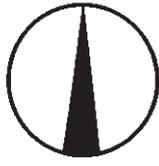
SD147 磨製石剣出土状況



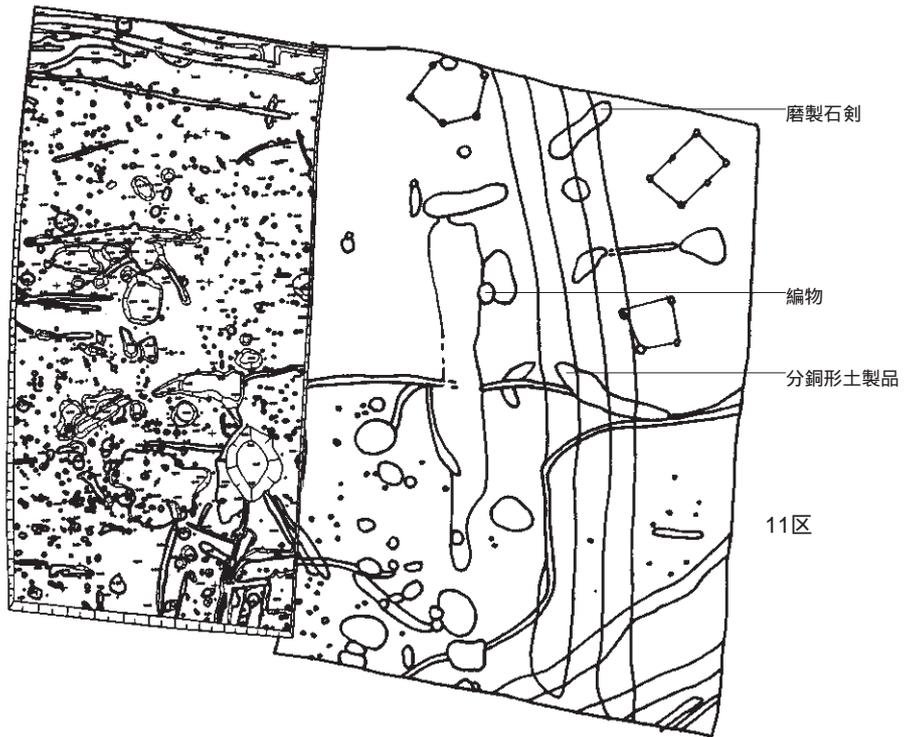
SD167 足付盤出土状況



SD167 土器出土状況



平成10年度調査
10区



大長野A遺跡 11・12区平面図 (S=1/500)

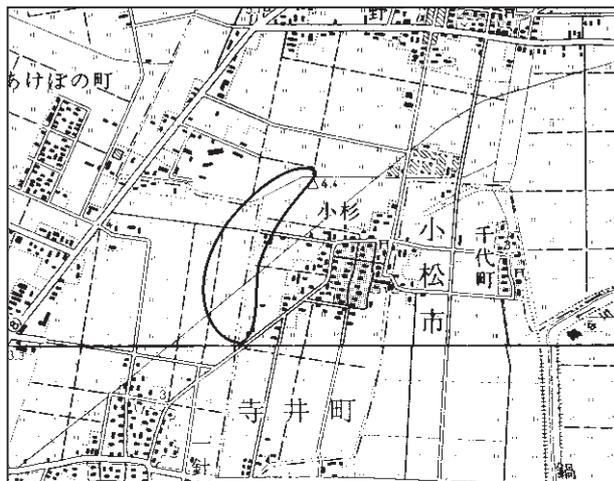
14 ^{おおながの}大長野A遺跡

所在地 小松市一針町地内

調査機関 平成11年4月26日～平成11年6月23日

調査面積 500m²

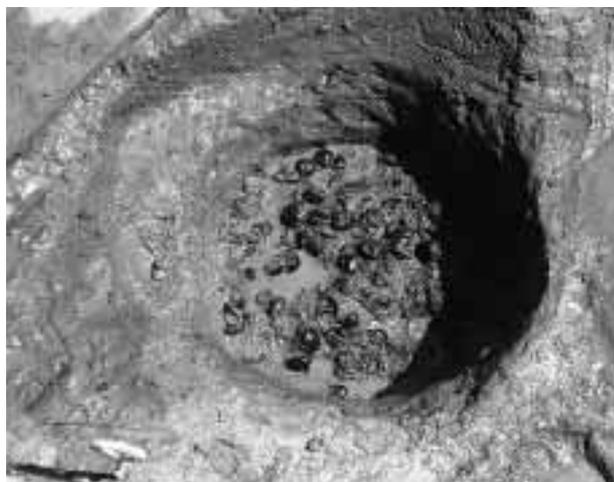
調査担当 立原秀明 浅香直子（調査第2課）



遺跡位置図 (S=1/25,000)



水場遺構 (北から)



SK150 クリの出土状況 (西から)

調査第2課が担当した大長野A遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴うものである。調査地点は、調査第1課が担当した一般国道8号小松バイパス改築工事に伴う同遺跡の第3次調査区の一部と第4次調査区に隣接している。

検出した遺構は、第3・4次調査区と同様に弥生時代と中世のものが多かった。特に弥生時代の遺構としては、調査区南側の低地部で検出した遺構が注目される。

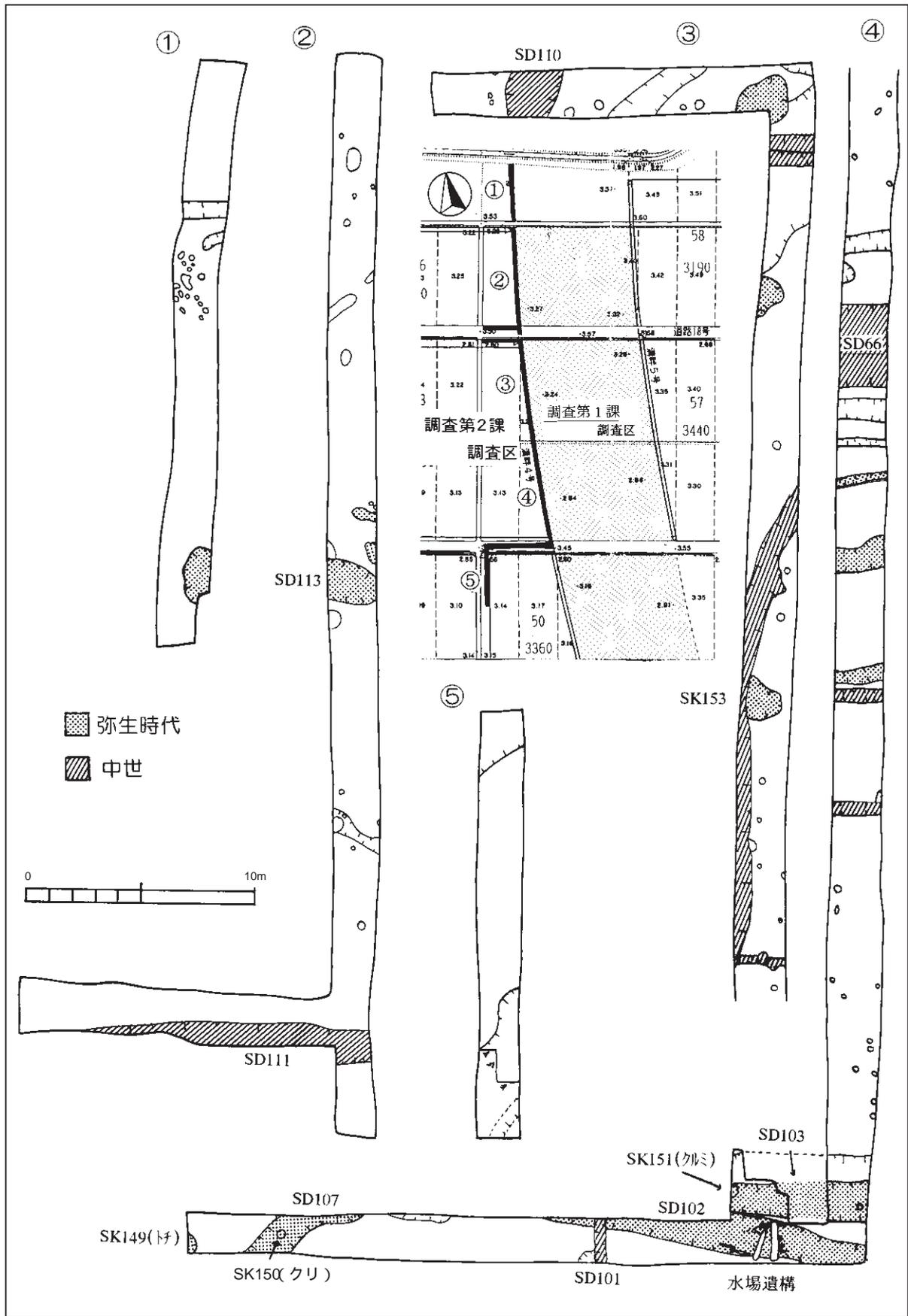
この遺構は、ほぼ東西に走る幅約2m深さ約20cmの皿状の断面を呈するSD102の中程に位置している。中心に長さ約3mの2本の自然木を流水方向に対してやや斜めにV字状に横たえて設置しており、V字状の木の間は深さ30～40cmほどの土坑状の落ち込みになっている。さらに木と落ち込みを取り囲むように杭が打ちこまれている。

SD102と落ち込み部分からは自然遺物として、トチ・クルミ・ドングリやツバキなどの種子類を多く出土している。なかでも落ち込み部分からは、小さいかけらとなったトチの皮が多く確認できた。堅果類の皮むきなどが行なわれていた可能性があると考えている。その他の遺物には、木包丁や、列状に穴のあけられた用途不明の板材などが出土している。遺構の時期は、溝から出土した土器から弥生時代中期頃のものである。

また若干の時期差があると思われるが、SD102のまわりでは同方向に走るSD103やトチの実、クルミ、クリを出土した土坑なども検出している。

遺構の性格については、堰を利用した水場を想定しているが詳細は今後の検討課題としたい。

(立原)



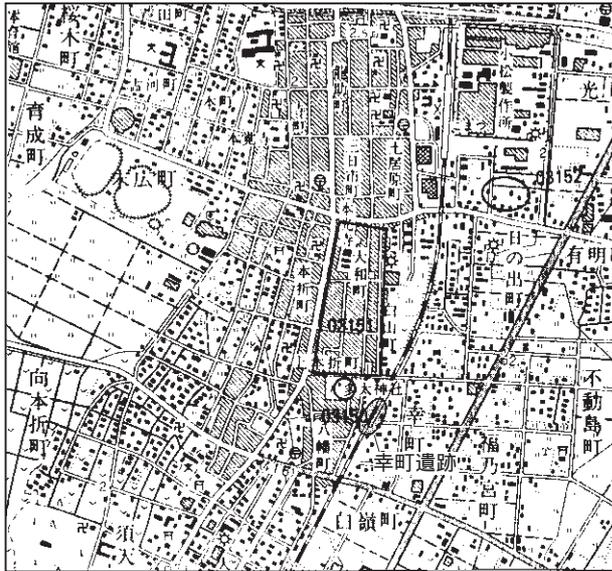
調査区全体略図 (S=1/250)

15 幸町遺跡

所在地 小松市八幡町・上本折町地内 調査期間 平成11年5月21日～同年6月30日

調査面積 1,000m²

調査担当 浜崎悟司 安中哲徳 加藤克郎(調査第3課)



遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は、北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に伴い、今年度初めて調査に着手された中・近世の遺跡で、JR小松駅より直線距離で南方約1kmに位置する。小松市の北側を流れる梯川の開析により形成された沖積平野上に立地し、南方約2kmには加賀三湖の一つである木場潟が広がっており、西方約1.5kmには国営干拓事業により現在では農地へと変貌を遂げた今江潟が満々と水を湛えていた。また本遺跡の約250m西方には旧北陸道が縦貫して、これらのことから水陸交通に恵まれた環境に位置していたものと考えられる。

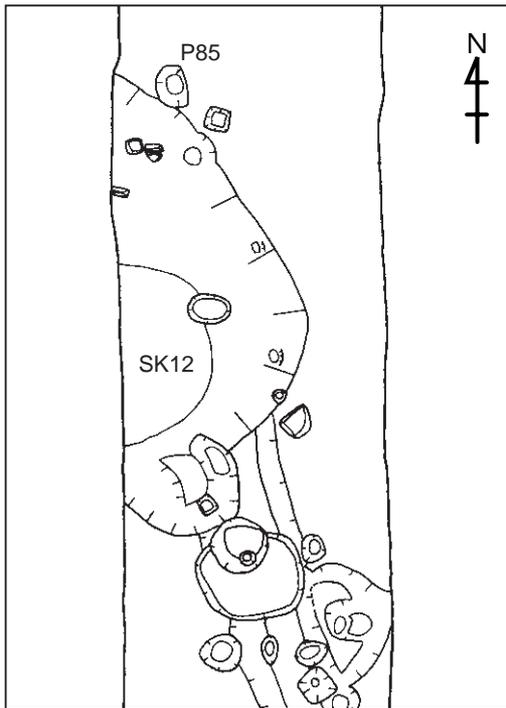
今回発掘調査をした地区は、明治30(1897)年福井・小松間の鉄道開通以来線路が敷設されて

いた場所である。調査時点では立体高架事業のためにすぐ東隣して仮線が敷設されていたので、現行鉄道の安全確保のため掘削範囲は線路から約6m距離を置いて設定された。調査区は小松駅寄りのN区と、約100m南に隔てたS区とに大きく分かれる。以下それぞれの調査区の特色について述べる。

N区においては全体的に遺構密度は高くない。調査区の南東方向から北西方向に貫流する幅約3.5mの近世の河川跡(SD06)を検出しているほかは、溝5条、ピット5基、土坑6基を確認している。これらの内SD06からは漆器椀2点、箸数点などとともに17世紀前半の唐津焼の皿、17世紀半ばの伊万里焼の碗などが出土している。その埋没時期については不明確であるが17世紀後半には埋没したものと考えられる。またその他の遺構からも総じて17世紀代の遺物が出土している。河川埋没後の土地利用については判明していないが、明治30(1897)年には当地に鉄道が敷設されている。N区は前田利常の小松在住時代と重なるが、同時期の小松城下の資料は余り知られていないので、その点からも重要である。

S区は、比較的遺構密度は高い。多数のピットや土坑を検出している。その上、大量の鉄滓(パンケース16箱分)、鞆羽口片約20点、砥石5点が出土していることから、本遺跡には鍛冶関連施設が存在していたと考えられる。それらの内、SK12は径約5m、深さ約0.6mの規模である。残念ながら調査区の西端に位置していたため遺構全体を調査することはできなかった。この土坑やその周辺からは鉄滓、鞆羽口など鍛冶関連遺物が特に多く出土しているため鍛冶関連施設であることは確かである。その性格については今後の研究課題である。そしてこの土坑に北隣するピット(P85)からは政和通宝(篆書・楷書各1枚)、紹聖通宝(行書)1枚、腐食して銭文不明のもの2枚が出土し、また遺構検出段階でこのピットの地点から永楽通宝2枚、景祐通宝(篆書)・治平通宝(楷書)・元符通宝(行書)・皇宋通宝(隸書)が各1枚出土している。これらの渡来銭は出土状況から人為的なものとみて大過なく、鍛冶関連施設の地鎮に関わる埋納の可能性が考えられる。鍛冶関連施設が営まれた時代については、同時に出土した瀬戸焼、越前焼、加賀焼、土師皿などの時期区分から15世紀前半～中葉にかけてであるとかがえられ、この時期を本遺跡の盛期と考えたい。

さて本遺跡の約100m北西には遅くとも室町時代中期にはその存在が確認される多太神社が鎮座している。旧北陸道から多太神社に向かうと本遺跡の所在地は神社の后背地に当たる。当社には源平篠原合戦で名高い斎藤別当実盛所用の兜と伝えられるものが所蔵され、その実盛の亡霊を結縁・済度するために、歴代の遊行上人が北陸順錫の際には必ず詣でるほど、多太神社と時衆とはゆかりが深い。その時衆と職人集団とも深いつながりがあることから、鍛冶関連施設が営まれていた本遺跡と多太神社との位置関係および時衆と鍛冶職人とのつながりなどを有機的に捉える必要がある。（加藤）



S区 SK12付近遺構略図（S=1/80）



N区 遺構掘削作業（北から）



S区 SK12完掘状況（北東から）



N区 SD06 椀出土状況（東から）



S区 P23 韃羽口出土状況（西から）



S区 S3-5区完掘状況（北東から）

16 九谷^{くたに}A遺跡（第4次調査区）

所在地 江沼郡山中町九谷町地内

調査期間 平成11年4月20日～平成11年7月1日

調査面積 200m²

調査担当 垣内光次郎 土屋宣雄 湊屋玲美(調査第3課)

〔位置と環境〕 この九谷A遺跡は、石川県と福井県の県境にある大日山（標高1,368）から流れを發する大聖寺川の溪谷に位置する集落遺跡で、中世から近世の遺構が、標高210m前後の河岸段丘上に広がり、四方が標高約500～600mの山並みに取り囲まれている。この大聖寺川は加賀地方の主要河川で、山中温泉で知られる江沼郡山中町から加賀市大聖寺の市街地を経て、県境の加賀市塩屋町で日本海へと注いでいる。



遺跡位置図（S=1/300,000）

九谷町は山中温泉の中心部から大聖寺川の溪谷を12km程さかのぼった場所で、かつては戸数17戸の山村であったが、九谷ダム建設事業による移転で廃村となった。遺跡はこの九谷町地内の集落跡に大きく広がる。大聖寺川の対岸約

100mの地点には、江戸前期と幕末に磁器を生産した九谷古窯跡群（国指定史跡）が所在する。

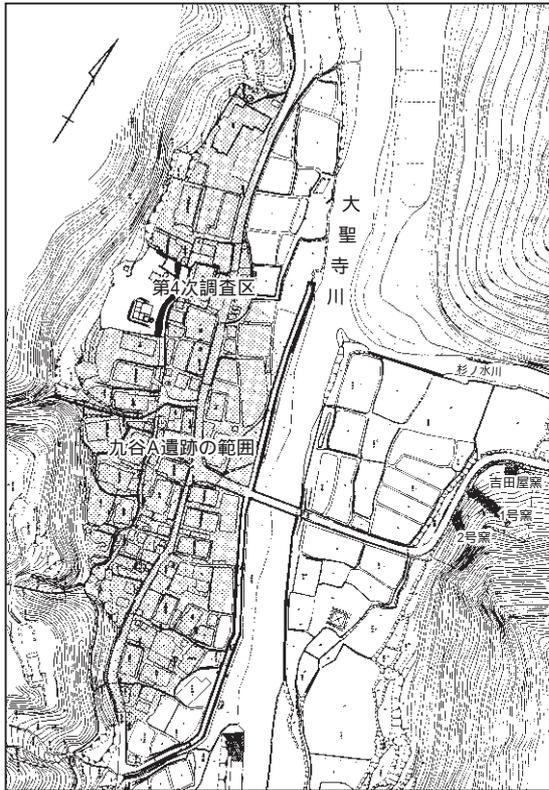
〔規模と性格〕 本遺跡は第2図で示したように、旧九谷町の家並みと重なる範囲に広がる。その面積は約18,000m²を測る。山間の集落遺跡としては、きわめて大型である。これは集落の設営に適した平坦地が少なく、同じ場所が長期間にわたり利用された結果と判断されるが、九谷で中世から近世にかけて展開した村人の生産活動なども反映していると考えている。とくに中世の活動は木地師などに代表される木工生産、近世の活動は九谷古窯で知られている磁器生産によるものである可能性が、これまでの調査により濃厚となっている。

〔調査の目的〕 今回の発掘調査は、本遺跡の第6次調査にあたる。その当初の作業として、平成9年に石川県立埋蔵文化財センターが本調査を実施した第4次調査区の補足調査を行なった。この調査の目的は、平成9年の調査で新たに検出した江戸前期の焼土集中地点の構造と造成時期を明らかにすることで、第4次調査区の上層で確認していた江戸前期の屋敷跡の性格を解明することであった。

〔調査の成果〕 第4次調査区の西側で検出した焼土集中地点は、江戸前期に造成された屋敷地の後方とみられる場所に位置する遺構である。その構造は火山礫凝灰岩の岩盤を開削した場所に、礫層や粘土層を重ねた平坦地を造成し、河原石の礎石を方形の枠組に配置したもので、礎石群の北半は厚い焼土層で覆われている状況が見られた。

この焼土集中地点の平坦地は、幅13.5m、奥行7.5mを測り、平面形が山側へ向いた台形を呈して、その北側に位置する礎石群は、大きな河原石を2.1m方形の枠組に配置している。四辺のうち北・西の二辺では、礎石間に3個の石を詰めているが、南・東の二辺ではそれが無く、特異な構造をみせる遺構である。また礎石群の北半を覆う焼土は、ここで行なわれた加熱作業で生じた堆積層であるが、その下の礎石群には熱を受けた痕跡がみられない。そしてこの焼土集中地点の礎石群の造成時期は、出土した土器、陶磁器の年代から、江戸前期でも17世紀中頃に比定できると考えている。

この補足調査の結果、第4次調査区の上層で確認した江戸前期の屋敷跡（南北48m、東西35m以上）

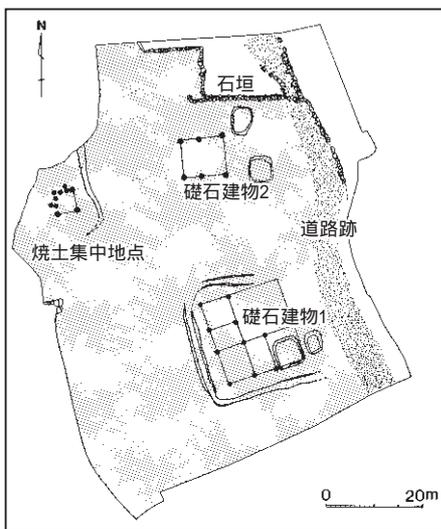


第4次調査区位置図 (S=1/4,000)



写真1 燧石集中地点の燧石群 (東から)

この場所は凝灰岩の岩盤を割り、戦国時代の石垣を埋めることで整地を行い、その上面に礫を敷き詰めて燧石の河原石を据えている。



屋敷跡の概略図



写真2 燧石の配置状況 (北から)

は、燧石建物1を中心とする敷地の南部、簡易な燧石建物2や土坑群が位置する北部、加熱を目的とした施設を配置した西の燧石集中地点など、三つのブロックに分かれることが知られ、敷地の西半からは、3点の色絵磁器が出土している。このためこの屋敷で確認した遺構は、造成時期や規模、施設の配置状況などから、「古九谷」の磁器生産に関連した施設であった可能性をもつ遺構と考えられる。さらに集落遺跡の一角で、磁器生産に関連したとみられる施設が確認されたことは、九谷の地で一貫した磁器生産が行なわれていた可能性がより高まった。

なおこの補足調査と平行して、第4次調査区から広がる造成地の範囲を確定する調査を実施したところ、戦国から江戸前期の造成地が、遺跡の西側で面積約7,000㎡の広がりで見つめられた。(垣内)

整理作業の現場から(1999年度上半期)

整理課

1班 正木班は、今年度後半梅田B遺跡に取り組んでいます。現場研修も同じ遺跡だったので、遺物には何かしら親しみを覚えます。古墳時代の遺跡との事ですが、近世の焼き物や近代?と思われるものも少しまじっています。殆どが土師器で、木器は木板や柱、杭等が主です。遺構トレースも入ります。スイスイとこなしていくベテラン3人(正木、戸潤、明田)に対し、技だけ新人は七転八倒、出来るだけ軽いお荷物で済むよう奮戦の毎日です。(戌亥久美子)

2班 我が班は4月からずっと四柳白山下遺跡を整理しています。記名、分類、接合は昨年度中に終了しているので、ひたすら実測、トレースです。須恵器中心の遺物整理で、貴重な資料として残せる遺物が沢山ありそうです。この仕事が終わってからは何と今年度中に6つの遺跡が予定されています。明るい東向きの窓から医王の山並をながめて、心と身体をいやしながら熟女5人ガンバッています。(小屋玲子)

3班 ひたすらパンケースに詰められた出土品を選別・接合し続ける事数ヶ月。季節も桜の頃から太陽が主役の夏になりました。土器を目にし触れるのも初めてだったはずの数名の班員達もすっかり目が肥えて、小さなかけらの集まりを大きな形ある土器へと成長させてくれます。もう秋は目前。実測という実りの日をようやく迎えようとしています。これからまだ続く彼女等の未知への挑戦と共に泣き笑いつつそれぞれの収穫を語り合える日を信じて・・・。(本谷祥恵)

4班 7月、柴山出村遺跡の現場体験から始まりました。容赦ない夏の太陽の下、ペンを持つ手にシャベルを、エプロンの代わりに作業着を身につけ、土器が眠る頑強な大地と格闘しました。整理は弓波遺跡に入り、木器実測は猫橋遺跡で大型のものを体験したためか、思いのほかスムーズに仕上がりました。土器にはミガキが施されたものが多数出土しており、外観の美しさとはうらはらに実測者の目を悩ませています。(藤崎敬子)

5班 我が黒田班は、8月から山口桂が加わり再出発しました。年度通しての三引遺跡ほか1件。夏場、今回の1番の難所であった大津くろだの森遺跡と三引遺跡の石器実測をなんとか無事乗り越え、現在は三引遺跡下層分の分類・接合をしています。不慣れな縄文土器ですが、少しずつ復元されていく様子は、接合への意欲を今までになく駆り立たせます。班員全員で力を合わせ、担当の方の意向に添えるよう努力していきたいと思います。(河崎真帆)

6班 私達松田班が南黒丸遺跡の整理に携わってから五ヶ月近くが経ちました。その間に、土器の記名・分類・接合、木器・石器の実測、多量の銅銭の拓本をとり終えました。今は木器のトレースにとりかかっています。今回、南黒丸では、土器の実測はなく、たくさんの珠洲焼きとは、選別台でお別れしました。しかし、8分の1の確率で、またお目にかかって実測する機会もあると思うので、その時は頑張りたいと思っています。(朝倉佳子)

7班 我が班は、引き続き松山C遺跡の整理を行っている。墨書土器等、土器の実測は終了し、現在は、木、石、金属器の実測にとりかかっている。石器は子持勾玉、紡錘車等、金属器は刀、古銭、木器は溝に関連した杭、土止め板材を実測する。木器に関しては4mに近い大型のものもあり、実測、トレース、そして収蔵に頭を悩まされるのは確実であろう。しかし、墨書土器をはじめ、須恵器の羽釜、円面硯等、遺跡の性格を窺える遺物も出土しており、興味深い遺跡である。(横山そのみ)

8班 4月下旬より三社町遺跡を整理しています。現在、陶磁器類を実測中ですが、あれこれ目移りしながら茶碗などを分類接合していた頃がなつかしいと思えるほど実測が続いています。複雑で難

しい模様もたくさんあり、手間取るときもありますが、埋文スコープを使用することにより効率良く実測することができます。刷毛目唐津の茶碗などのトレースを考えると不安にもなりますが、作業期間の半分を終え、後半に向けてより一層がんばっています。(角間律子)

洗浄班 洗浄班は夏に向かう頃から仕事量が増え、7月から2名(村田、寺西)を迎え4人で作業しています。近岡遺跡180箱、戸水B遺跡32箱を6月～10月まで洗浄しています。近岡遺跡は破片が大きく、出土した場所も河が多かったのが洗やすい遺跡でしたが、同時に2つの遺跡の洗浄、乾燥、袋づめをしたので、混ざらないように注意しながら作業を進めました。秋から冬にかけて、柴山出村、甘田タイ、大長野A、倉見オウラント、真脇製塩、八日市地方と続きます。(末富しげ子)

復元班 最新設備を備えた、修復作業室で、作業を始めて、はや1年半が過ぎようとしている。四柳白山下遺跡出土の長胴甕、横瓶等、特徴ある須恵器から始まり、完形にほぼ近い土器が出土している藤江C遺跡まで、他を含むと8つの遺跡の修復作業を行ってきた。土器が不完全な場合は、実測した図を見て、修復したり、頸部だけの土器、底部だけの土器もある。古代人が創り出した貴重な土器を、一つ一つの破片を見て、イメージを頭の中に浮かべ、地道に黙々と続けている。(小間博文)

6・7月の現場研修から



土坑を掘る 柴山出村遺跡にて



壁断面を実測する 三引遺跡にて

H11上半期 整理作業

	遺跡名	担当者	4月	5月	6月	7月	8月	9月
1班	八幡遺跡	浜崎						
	梅田B遺跡	柿田						
2班	四柳白山下遺跡	川畑						
3班	藤江C遺跡	大西・浅香						
4班	末松タイカ遺跡	立原・安						
	猫橋遺跡	本田・藤井						
	弓波遺跡	土屋						
5班	三引遺跡ほか	安中・三谷・渡屋						
	大津くろだの森遺跡	久田・白田						
6班	相川新遺跡	三浦						
	南黒丸他遺跡	和田						
7班	松山C遺跡	湯川・林						
8班	三社町遺跡	柿田・浅香						
	金沢城跡	栃木・滝川						

1999(平成11)年度上半期の整理作業

弥生時代中期後半土器の併行関係と暦年代観

河合 忍

はじめに

近年、弥生時代中期後半の暦年代をめぐる議論が盛んである。その発端は、1995年大阪府池上曽根遺跡において巨大な東西棟持ち柱建物が発見され、この大型建物の柱根の年輪年代測定を行った結果、紀元前52年と断定された（秋山1996・光谷1996）ことに始まる。柱穴掘り方から検出された土器は河内 - 3様式（寺澤・森井1989）中期後半に属するものと比定されており（秋山1996）、中期後半の暦年代が紀元前1世紀代を中心とすると考えられている。これは、近畿地方のこれまでの暦年代と比べると50～100年さかのぼったこととなるのであり、大きな話題をよんだ。一方、北部九州では、大陸製青銅器から実年代を求めており、後期の始まりを西暦紀元前後とおく説（橋口1979、柳田1983）が提出されていたため、弥生時代後期の始まりは九州と近畿では大きくズレが生じていたが、今回の発見により、両地域における暦年代の大きなズレはないと考えられるようになってきた。

北陸においては、古墳時代初頭・布留0式併行期の暦年代データが提出されている（光谷1995）が、弥生時代の暦年代については論究されることが少なかった¹⁾。幸い、弥生時代中期後半土器の併行関係を窺うことのできる資料は、近年、増加傾向にあるため、間接的にはあるが、暦年代を類推することができるようになってきた。

本稿では、北陸における弥生時代の暦年代を与えることを目標とし、まず、中期後半における土器の併行関係を整理したい。それを基礎として、近年の暦年代をめぐる議論を視野に入れつつ、北陸の弥生時代中期後半に大まかな暦年代を与える作業を行い、今後の研究に備えたいと思う。

北陸における弥生時代中期後半の土器編年（第1表）

近年の研究動向をみると、凹線文の採用を基準として、中期前半（畿内第 様式併行）と中期後半（同第 様式併行）とを分けることが主流となりつつある（深澤1986、溝口1987、寺澤・森岡編1989・1990ほか）。これは凹線文の採用と普及が第 様式の様式構造に大きな変革をもたらしたとの考えによるものである（寺澤・森井1989、森岡1990）。北陸（加賀）においても、凹線文の採用（凹線文系土器²⁾の受容）は様式構造に大きな変革をもたらしたと判断できることから、凹線文の採用を基準として、中期前半と中期後半とを分けている（河合1996・2000）。

北陸の中期後半（第 様式）の土器編年は、大きく3時期〔磯部式 - 専光寺式 - 戸水B式、筆者の - 1 ~ - 3様式（河合1996）〕に区分されており（増山1988・1992、楠1989・1992・1996）、それぞれ西日本で指摘されている凹線文系土器の出現期・盛行期・衰退期（寺澤・森岡編1989・1990）と対応すると考えることができる（河合2000）。また、凹線文系土器は時期を経るごとに徐々に全体における量比を増す傾向にある（河合1996）。本稿では、凹線文系土器が衰退期の様相を示すが、在地系土器を数的に凌駕する戸水B式（北陸 - 3様式）の段階に注目し、西日本各地における土器の併行関係をまずは追求してみることとしたい。

第1表 編年対照表

北陸(加賀)			摂津	北丹波
増山(1992)	楠(1996)	河合(1996)	森田(1990)	田代(1992)
磯部式	西念・南新保 1-1	IV-1	IV-1	IV-1
専光寺式	西念・南新保 1-2	IV-2	IV-2 IV-3	IV-2
戸水B式	西念・南新保 1-3	IV-3	IV-4	IV-3



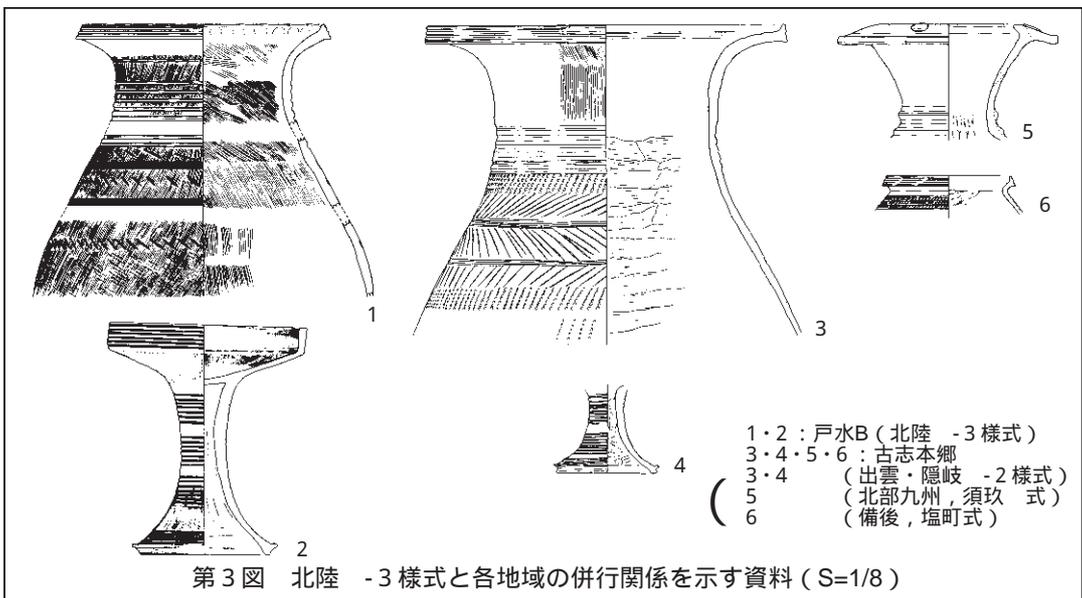
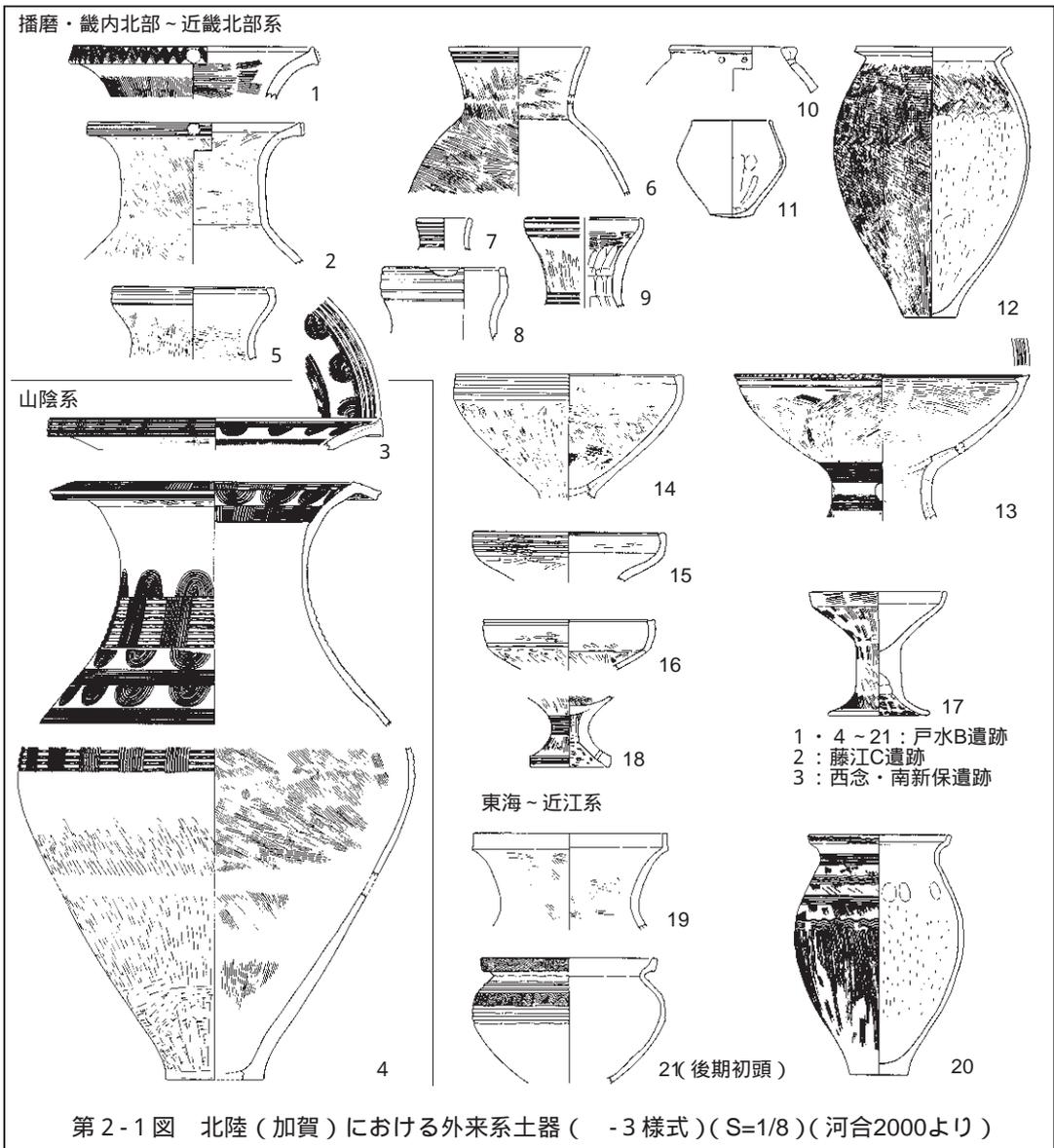
弥生時代中期後半土器の併行関係
戸水B式土器と各地域の土器との併行関係を考えていくために、まずは戸水B式に属する金沢市戸水B遺跡、同藤江C遺跡、同西念・南新保遺跡出土土器の外来系土器の分析から始めたい。

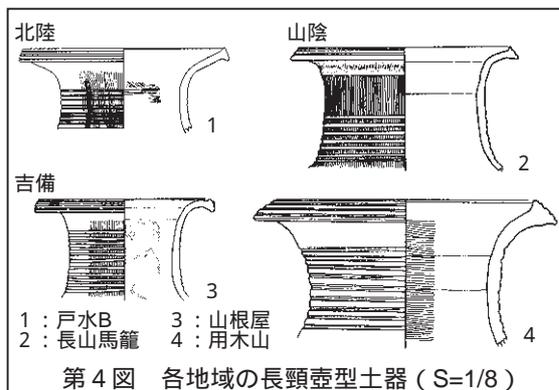
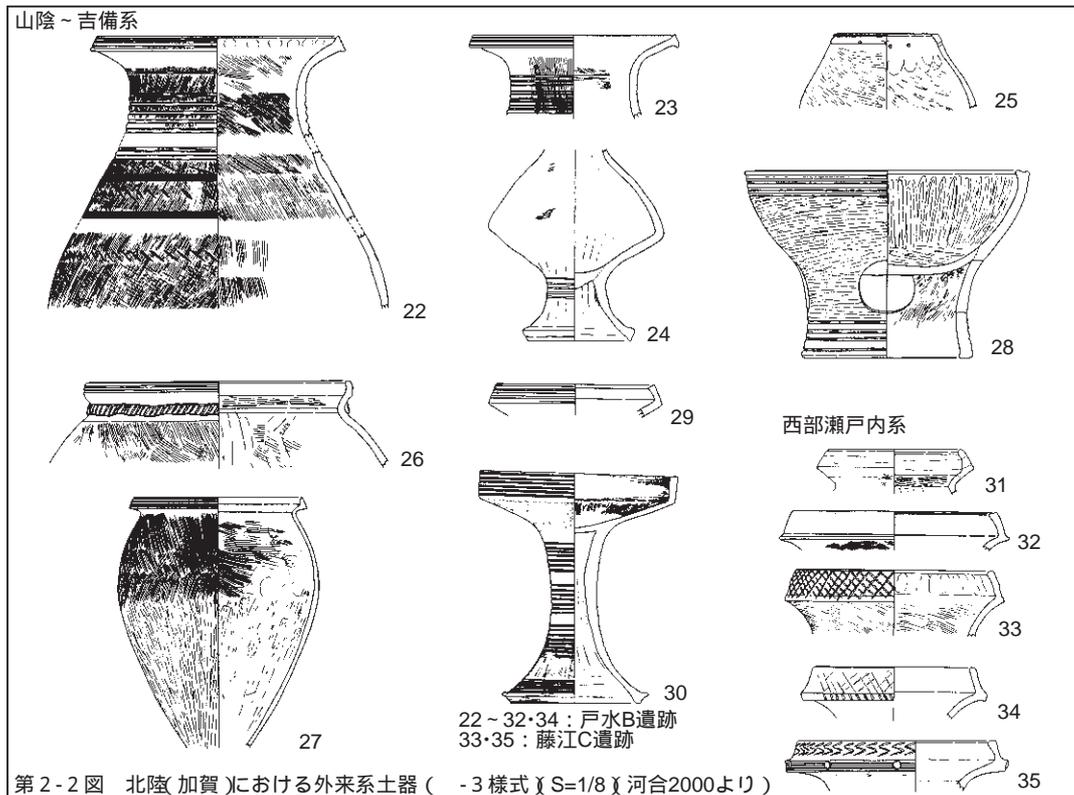
第2図はこれらの土器をまとめたものである。外来系土器は、近畿北部(丹波・丹後)～畿内北部(摂津・山城)・播磨、近江～東海、山陰・吉備・西部瀬戸内の大きく3つの系譜に分けることができる。

前節でも指摘した通り、当該期は凹線文系土器の相対的な量比は増えるのであるが、畿内北部や近畿北部などでみられる凹線文の衰退現象が看取されるのであり(第2-1図)そこから判断すれば、『弥生土器の様式と編年』(寺澤・森岡編1990)における摂津 - 4様式、山城 - 3様式、または田代弘氏が北丹波の

由良川水系の土器を分析して設定した(北丹波) - 3様式(田代1992)とほぼ併行すると考えておきたい(第1表)。

また、当該期は山陰・吉備・西部瀬戸内などの遠隔地に系譜をもつ土器が比較的多く出現する時期である。第2-2図にその一部の土器について集成を行ってある。器種は広口壺形土器(以下「形土器」を省略)・長頸壺・無頸壺・甕・台付鉢・高杯など多様であり、活発な交流の存在を物語る。このうち、併行関係を考えていく上で、重要な情報をもつと考えるものを第3図と第4図に図示した。

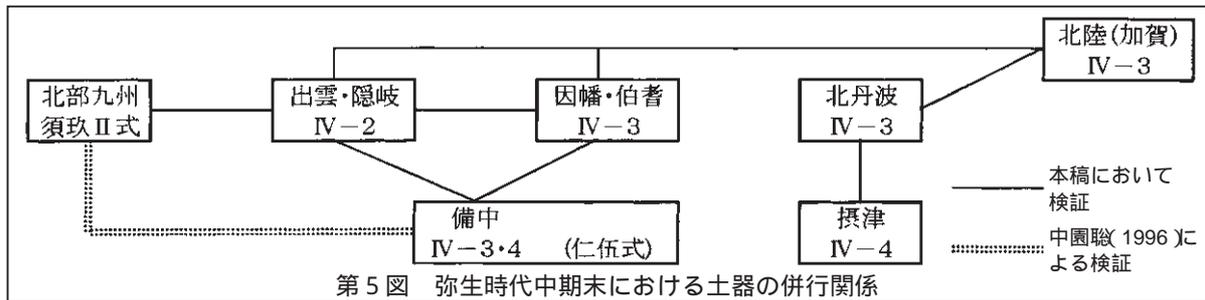




第3図には、戸水B遺跡出土の山陰に系譜をもつと考えている広口壺(1)・高杯(2)とそれと関連をもつと考えられる資料である島根県出雲市古志本郷遺跡出土土器(松山1998)を図示した。第3図3は山陰地方に比較的多く存在する加飾広口壺であり、報告者によれば、『弥生土器の様式と編年』(正岡・松本編1992)における出雲・隠岐 - 2様式に属する資料であるとされている。これは戸水B遺跡出土の加飾広口壺(1)と形態・法量や文様構成等の

面で関連した資料と考えられる。第3図3と同じ大溝から出土した高杯(4)も戸水B遺跡出土の高杯(2)と関連した資料として挙げるができる。これらから戸水B式(-3様式)と出雲・隠岐 - 2様式が一部併行するものと考えておきたい。第3図3・4が出土した大溝からは、このほかに北部九州に系譜がたどれる鋤形口縁をもつ須玖式の壺(5)と備後に系譜がたどれる塩町式の甗(6)が出土しており、間接的にはあるが戸水B式(-3様式)と須玖式・塩町式が一部併行することを示す資料と考えておきたい³⁾。

第4図には、戸水B遺跡出土の吉備に系譜をもつと考えている長頸壺(1)とそれと関連をもつと考えられる資料を図示した。第4図1は頸部外面にタテハケを施し、その後10条以上のヘラ描沈線文を施している。これと同じ制作技法を用いるものは、中期後半では備中北部 - 2様式以降に出現すると指摘されており(高畑1992)第4図3がその一例である。第4図1と近い形態を有するものは山陰(伯耆・出雲)・吉備に広くみられるが、その中でも第4図1は制作技法や形態から判断して新しい要素をもつと判断できる資料であり、『弥生土器の様式と編年』における因幡・伯耆 - 3様式または備中 - 3・4様式(仁伍式)に属する資料と考えておきたい。



以上の成果をまとめたものが、第5図である。これから判断して、西日本の中期末がだいたい併行するものと考えられる。このことは、弥生時代後期が西日本各地でそれほど時間差をもつことなく、ほぼ同時に始まったとの判断を導くことになるが、それは弥生時代後期土器の併行関係を追求した諸先学の研究成果（豊岡1985、中園1996、杉本1996、小山田1996、平井典1997）からすでに指摘されていることでもあり、これらの内容とも矛盾するものではない。

北陸弥生時代中期後半の暦年代観

前章では、弥生時代中期後半土器の併行関係を考えてみた。本章では、これを基礎として、諸先学の暦年代観を参考にしつつ、北陸の弥生時代中期後半の暦年代について考えることとしたい。

当該期の暦年代を探る試みは、近年活発に行われており、畿内・中部瀬戸内の弥生時代中期と後期との境を紀元1世紀第1四半世紀～第2四半世紀に位置付ける考え方（秋山1996、平井勝1996、杉本1996、森岡1998、都出1998）と紀元1世紀第3四半世紀以降に位置付ける考え方（豊岡1985、寺澤1985・1998・1999）が存在している（第2表）。前者は理化学的測定年代・年輪年代を重視し、貨泉が畿内・東部瀬戸内の弥生時代後期初頭の土器に伴う事実（平井泰1990）を考慮して、その貨泉の初鑄年に限りなく近付けて、弥生時代後期初頭の年代を捉えようとする考え方である。後者は貨泉が王莽代のみならず、後漢初期に下る資料を多数含んでいる点と、北部九州の後期前葉の遺構から検出された舶載鏡について、複数時期の鏡式が含まれており、流入から副葬に至るまでの時間の経過を考慮した考え方である。

筆者は、前者の考え方が現状では無理がない考え方であると評価している。それは、北部九州の弥生時代後期前半の中国鏡の混じりは、鏡の初鑄年代に関する限りにおいて、井原窪溝や桜馬場出土の方格規矩四神鏡や三津永田104号甕棺の獣帯鏡が、ほぼ同時期に製作された鏡であることが明らかにされていること（岡村1990・1996）、土器から見て、北部九州と中部瀬戸内・畿内の弥生時代後期の始まりがほぼ併行すること、年輪年代学の成果との整合性、などからそのように判断している。

この説を採用すれば、前章での検討の結果から、北陸における弥生時代後期の始まりも北部九州や東部瀬戸内・畿内とそれほどの時間差がない蓋然性が高いと考えられるので、北陸における弥生時代中期と後期との境の暦年代は、紀元1世紀第1四半世紀～第2四半世紀に相当すると考えられ、そこから戸水B式（北陸 - 3様式）の暦年代は、森岡秀人氏の暦年代観（森岡1998）も参考にすれば、紀元前1世紀第4四半世紀～紀元1世紀第1四半世紀に比定されるものと考えている。

おわりに

本稿では、弥生時代中期後半における土器の併行関係を整理し、それを基礎として、大まかにではあるが、北陸の弥生時代中期後半に暦年代を与える作業を行ってきた。大まかな検討であるので、今

第2表 弥生時代暦年代対比表（近畿・北部九州）

暦年代		近 畿 編 年			北 九 州 編 年			
		森岡1998	都出1998	寺澤1998	寺澤1998	柳田1983	橋口1979	
紀 元 前	100	-1 様式	第2 様式	第 様式	城ノ越式 1	3	K C式	
		-2 様式	古 第3 様式	1 第 様式	2			須玖式 4
		-3 様式	新	2	3			
		-4 様式	第4 様式	1 第 様式	4	5	K b式	
紀 元 後	0	-1 様式	古 第5 様式	3	1	1	K a式	
		-2 様式		4				2
		-3 様式	中	0 第 様式	1	3	K c式	
				2	2	3	K a式	

後検証してゆく必要性を感じているものの、この種の研究を行っていく上で、一定点を築くことができたのではないかと考えている。今後は、弥生時代を通して暦年代を与える作業を、北陸でも行っていく必要があると感じている。

註

- 1) 筆者の知り得た範囲では、栃木英道氏が弥生時代後期後半（法仏式）と同終末（月影式）との境を紀元190年とする見解を示していること（栃木1995）を知るのみである。
- 2) 北陸では、西日本に系譜をもつ凹線文を施した土器に加えて、これを施していない土器であっても、中期後半（第 様式）の時期に凹線文を施した土器とともに受容した外来系土器（九州、西部瀬戸内、近江、東海を除く）については「凹線文系土器」という用語を用いている。
- 3) 中園聡氏は、九州と瀬戸内の土器の併行関係を整理しており、北部九州の中期後半（須玖 式）と瀬戸内の中期後半（第 様式）が併行する可能性が十分にあるとの指摘をしている（中園1996）。

附記

2000年2月26日・27日に開催された北陸弥生文化研究会の席上では、赤澤徳明・石黒立人・伊庭 功・宇野隆夫・岡分政子・小竹森直子・近藤 広・佐々木 勝・篠宮 正・深澤芳樹の各氏から土器の系譜・時期についてのご教示を受け、校正の段階で、若干の手直しを加えている。記して感謝したい。

参考文献

秋山浩三1996「B.C.52年の弥生土器 - 池上曾根遺跡の大型建物・井戸出土資料と年輪年代 - 」
『大阪文化財研究』11 大阪府文化財調査研究センター

岡村秀典1990「中国鏡による弥生時代実年代論」『考古学ジャーナル』325 ニュー・サイエンス社

岡村秀典1996「中国鏡からみた弥生・古墳時代の年代」『第40回埋蔵文化財研究集会 考古学と実年代』

河合 忍1996「北陸弥生土器様式の変革過程」『石川考古学研究会々誌』39 石川考古学研究会

- 河合 忍2000『弥生時代中期後半における土器交流システムの変革とその背景』
『石川考古学研究会々誌』43 石川考古学研究会
- 楠 正勝1989『金沢市西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
楠 正勝1992『金沢市西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
楠 正勝1996『金沢市西念・南新保遺跡』 金沢市教育委員会
- 小山田宏一1996『近畿地方暦年代の再整理』『第40回埋蔵文化財研究集会 考古学と実年代』
- 杉本厚典1996『東部瀬戸内と北部九州の弥生時代後期初頭の土器編年の平行関係』『香川考古』5 香川考古学研究会
- 高畑知功1992『備中地域』『弥生土器の様式と編年 - 山陰・山陽編 - 』木耳社
- 田代 弘1992『由良川流域の弥生時代中期土器について』『京都府遺跡調査報告書』17
京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 都出比呂志1998『総論 - 弥生から古墳へ - 』『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 寺澤 薫1985『弥生時代舶載製品の東方流入』『考古学と移住・移動』同志社大学
- 寺澤 薫・森井貞雄1989『河内地域』『弥生土器の様式と編年 - 近畿編 - 』木耳社
寺澤 薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年 - 近畿編 - 』木耳社
寺澤 薫・森岡秀人編1990『弥生土器の様式と編年 - 近畿編 - 』木耳社
寺澤 薫1998『集落から都市へ』『古代国家はこうして生まれた』角川書店
寺澤 薫1999『紀元前五二年の土器はなにか - 古年輪年代の解釈をめぐる功罪 - 』
『考古学に学ぶ 遺構と遺物』同志社大学
- 栃木英道1995『考察』『谷内・杉谷遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター
- 豊岡卓之1985『畿内』第 様式暦年代の試み』『古代学研究』108・109 古代学研究会
- 中園 聡1996『弥生時代中期土器様式の併行関係 - 須玖 式期の九州・瀬戸内 - 』『史淵』133 九州大学文学部
- 中屋克彦ほか1992『金沢市戸水B遺跡 - 第4・5次調査 - 』石川県立埋蔵文化財センター
中屋克彦ほか1994『金沢市戸水B遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
中屋克彦1997『金沢市藤江C遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 橋口達也1979『甕棺の編年的研究』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 (中巻)福岡県教育委員会
- 平井典子1997『弥生時代後期における中部瀬戸内と北部九州の交流』『古代吉備』19 古代吉備研究会
- 平井 勝1996『理化学的年代測定からみた暦年代 - 中・四国地方 - 』
『第40回埋蔵文化財研究集会 考古学と実年代』
- 平井泰男1990『岡山市高塚遺跡出土の『貨泉』』『古代文化』42-7 古代学協会
- 深澤芳樹1986『弥生時代の近畿』『岩波講座 日本考古学』5 岩波書店
- 正岡睦夫・松本岩雄編1992『弥生土器の様式と編年 - 山陰・山陽編 - 』木耳社
- 増山 仁1988『金沢市磯部運動公園遺跡』金沢市教育委員会
増山 仁1992『金沢市専光寺養魚場遺跡』金沢市教育委員会
- 松山智弘1998『古志本郷遺跡第6次発掘調査報告書』出雲市教育委員会
- 溝口孝司1987『土器における属性伝播の研究 - 凹線文の発生と伝播 - 』
『東アジアの考古と歴史 岡崎敬先生退官記念論集』中 同朋舎出版
- 光谷拓実1995『二口かみあれた遺跡出土木製品の年輪年代』『二口かみあれた遺跡』石川県志雄町教育委員会
- 光谷拓実1996『年輪年代法』『弥生の環濠都市と巨大神殿』池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会
- 森岡秀人1990『各地域の併行関係・解説』『弥生土器の様式と編年 - 近畿編 - 』木耳社
- 森岡秀人ほか1998『弥生時代の暦年代をどう考えるか』『弥生時代の考古学』学生社
- 森田克行1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年 - 近畿編 - 』木耳社
- 柳田康雄1983『伊都国の考古学 - 対外交渉のはじまり - 』
『九州歴史資料館開館10周年記念 太宰府古文化論叢』吉川弘文館
- 湯尻修平1975『金沢市戸水B遺跡調査報告』石川県教育委員会

よっさき すば 羽咋市吉崎・次場遺跡出土の土製鑄型外枠について

林 大智

はじめに

平成11(1999)年10月、弥生時代の拠点集落である羽咋市吉崎・次場遺跡から、銅鐸の土製鑄型外枠が出土していたことについて記者発表が行われた。従来、石川県は銅鐸文化圏外の地域として捉えられてきたため、この事実は県内外の研究者に、大きな驚きをもたらしたことと思われる。しかし、この土製鑄型外枠自身は、昭和54(1979)年および昭和59(1984)年の発掘調査によってすでに出土していたものであり、報告書にもその実測図が掲載されている⁽¹⁾。「石川で青銅器(銅鐸)の鑄型が出るわけがない。」という研究者の思いこみと、発見当時、他に土製鑄型外枠として認識できる資料が極めて少なかったことが、この資料を長い間倉庫の片隅に追いやる原因となった。ただ一部の研究者のみは、当時からこの資料が土製鑄型外枠である可能性を示唆していた。

平成8(1996)年、奈良県唐古・鍵遺跡の第61次発掘調査によって、多数の土製鑄型外枠が出土し、各々の鑄型外枠から製作された青銅器の器種を推定することが可能になった⁽²⁾。また、滋賀県や兵庫県からも、類似する資料が徐々に増加している⁽³⁾。そこで、これらの資料を参考にして、吉崎・次場遺跡出土資料を再検討したところ、形態、製作技法、胎土ともに良く似ていることが明らかになった。

そのため、唐古・鍵遺跡の発掘調査を担当した藤田三郎氏や、銅鐸研究などで著名な春成秀爾氏にこの資料を鑑定してもらった結果、銅鐸の土製鑄型外枠である可能性が高いという回答をいただいた。

この資料報告では、吉崎・次場遺跡から出土した土製鑄型外枠について、その形態的特徴を中心に概説を行う。また、「県内でも青銅器製作が行われていた。」という視点にたち、県内の資料を俯瞰したときに、他にも青銅器生産に関わる資料が認められることが明らかとなった。そのため、それらの資料についても概説を行い、極めて少ない資料であるが、県内における弥生時代の青銅器生産の様相について仮説を提示したいと思う。

吉崎・次場遺跡出土の土製鑄型外枠について

吉崎・次場遺跡は、羽咋市吉崎町、次場町、鶴多町にまたがって所在し、標高2m前後の自然堤防上に立地する。遺跡は古邑知瀉の南岸に接しており、古代交通の要所として捉えられる。

これまで通算17次におよぶ発掘調査の結果、口能登地域の拠点集落として認識されている。

この遺跡では、6点の土製鑄型外枠片を確認した。第2図1～5は、昭和59年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施した、第10次発掘調査で出土したもので、同図6は昭和54年度に羽咋市教育委員会が実施した、第5次発掘調査で出土したものである。

5点の土製鑄型外枠が出土したW地区は、遺跡の北縁部にあたり、集落の立地する微高地の端部から、古邑知瀉縁辺部低湿地への移行地帯



第1図 吉崎・次場遺跡位置図 (S=1/25,000)

に位置する調査区である。発掘調査は幅8m、延長107m、面積856㎡の範囲で実施されている。土製鋳型外枠は、地表下約1mに認められる青灰色砂層中に形成された、厚さ10cm前後の遺物包含層から出土している。包含層中には、弥生時代中期～平安時代に至る遺物が混在している⁽⁴⁾。

第2図1は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。不明土製品として報告書に掲載されているものである。残存長13.9cm、残存幅10.0cm、最大厚2.2cmを測る。側面には挟り込みによって把手が作り出されている。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は縦方向に粗いヘラケズリを行う。器面の剥離・磨耗が著しい。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。胎土は石英・長石風化礫・チャート・雲母などを多量に含む。他の出土資料も同様の胎土を用いている。側面には鋳造に関連すると思われる付着物が認められる(第2図トーン箇所)。

2は、W地区 - 3グリッドの包含層から出土した。残存長8.6cm、最大幅13.1cm、最大厚2.6cmを測る。外面は器面の剥離が著しい。側面には挟り込みの把手が作り出されている。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。両側面が遺存していることから、鋳型外枠は組み合わせ式のものと同様と推測できる。

3は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。残存長12.1cm、残存幅9.2cm、最大厚3.1cmを測る。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は著しく剥離しているが、縦方向の粗いヘラケズリが確認できる。側面は縦方向のヘラケズリを行う。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

4は、W地区 - 4グリッドの包含層から出土した。残存長8.5cm、残存幅7.5cm、最大厚2.5cmを測る。外面は器面の剥離が著しい。側面には挟り込みの把手が認められる。内面は左下がりの斜め方向の粗いヘラケズリが行われている。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

5は、W地区 - 6・7グリッド東半分の包含層から出土した。残存長6.6cm、残存幅7.2cm、最大厚3.4cmを測る。外面はヘラケズリの後、丁寧なナデ調整を行う。内面は縦方向の粗いヘラケズリを行う。側面は縦方向のヘラケズリを行う。断面形態には緩やかな湾曲が認められる。

6は、16土坑上面の包含層から出土した。残存長10.0cm、残存幅9.0cm、最大厚3.5cmを測る。底面は平坦で、上面は中央が盛り上がる形態を呈する。底面はヘラケズリの後、ナデ調整を行う。上面は刷毛目調整の後、無数の指頭圧痕を施す。これは真土^{まね}のつきを良くするためのものと考えられる。

吉崎・次場遺跡出土の土製鋳型外枠は、身部に認められる緩やかな湾曲、挟り込みの把手の存在、内面の粗いヘラケズリ、法量などから、大型の銅鐸を製作するための鋳型外枠である可能性が高い。すべての資料が、各時期に属する大量の土器が混在した包含層からの出土であるため、明確な時期の把握は困難である。類似資料の帰属時期などから弥生時代中期末～後期前半頃に属する可能性が高い。

県内出土の青銅器鋳造関連資料

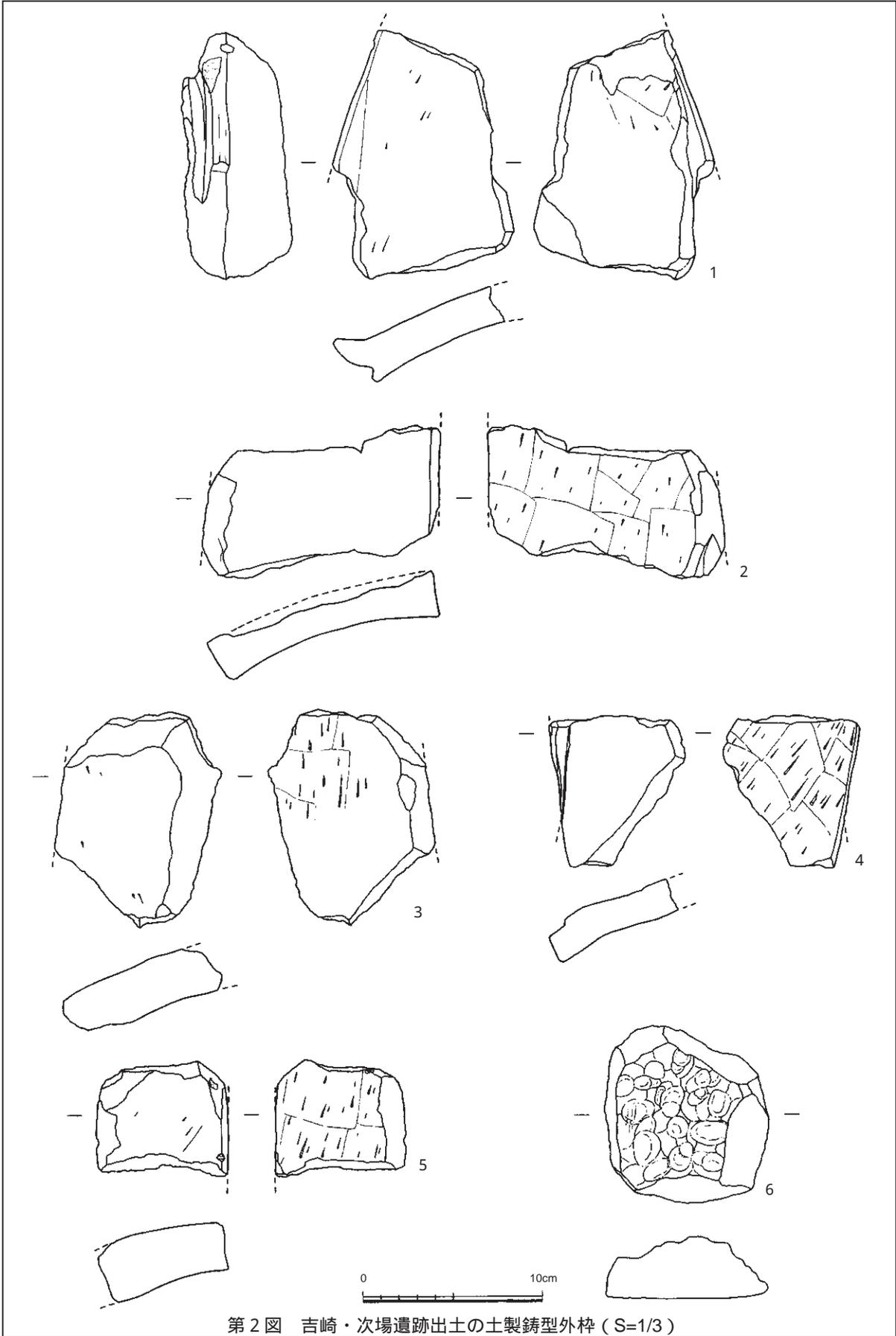
県内における弥生時代の青銅器生産に関連する資料は、吉崎・次場遺跡出土資料を除いて、2遺跡3例確認できた(第3図、第1表参照)。以下で各資料について概説を行う。

〔金沢市大友西遺跡出土の連鑄式銅鐸⁽⁵⁾〕

平基有茎式の二連式銅鐸である。大溝から出土しており、時期は弥生時代後期後半～終末期(法仏～月影式)に比定できる。表面には緑青の付着が認められるが、地金の残りは比較的良い。鐸身部中央には鑄状の隆起帯をもつ。断面からは鑄ズレが生じていることが確認できる。上下端に切断された痕跡が残ることから、製作時には、四連以上のものであったことがわかる。

〔金沢市大友西遺跡出土の取瓶^{とりべ}?〕

有段高杯の杯部両面に鉢滓状のものが付着したものである。布堀建物跡(SB11)の柱穴から出土している。小片のため詳細な時期については不明であるが、後期後半以降に属するものと考えられる。



器面には、強い被熱により無数の気泡が生じており、重さも非常に軽くなっている。取瓶として使用されたものである可能性が高い。同様の特徴を持つ土器片は、周辺の包含層からも出土している。

〔宇ノ気町鉢伏・茶白山遺跡出土の銅塊⁽⁶⁾〕

第1号竪穴住居跡（新）の床面に認められる焼土周辺から出土している。時期は弥生時代終末期に比定できる。銅塊は大人の親指大の大きさで、重さは24.047gを測る。表面には緑青の付着が認められる。竪穴住居内で鑄造作業が行われた可能性が高い。

これらの鑄造関連資料は、弥生時代後期後半～終末期の北加賀地域に集中する傾向が認められる。生産された製品は、大友西遺跡出土の連鑄式銅鏃から、銅鏃などの青銅利器である可能性が高い。

県内で出土した弥生時代の青銅器および関連資料について

県内で出土した弥生時代の青銅器は、16遺跡33例確認できる⁽⁷⁾。金沢市藤江B遺跡からは銅剣が出土している。身上部4分の1ほどの破片で、鋒は欠失している。有樋式中細形銅剣と考えられ、脊にはやや不明瞭ながら鑄が認められる。この遺跡からは小銅鐸も出土している。銅鏃は8遺跡20例確認できる⁽⁸⁾。銅鏡は9遺跡10例確認できる⁽⁹⁾。舶載鏡は吉崎・次場遺跡と金沢市無量寺B遺跡から出土している。ともに破片を再利用した懸垂鏡である。前者は岡村秀典氏の漢鏡編年4期（前1世紀後葉～後1世紀初め）、後者は同編年の6期（2世紀前半）に位置づけられる⁽¹⁰⁾。その他の資料はすべて小型仿製鏡である。時期は弥生時代終末期～古墳時代前期に集中している。

まとめると、県内から出土した青銅器の分布は、北加賀地域と羽咋市域の2地域に集中することが明らかであり、特に金沢市域に著しい集中が認められる（第3図参照）。時期は、弥生時代中期後半から出土が認められ、後期後半～終末期に出土量が増加する。

青銅器関連資料としては、銅鐸形土製品と銅剣形磨製石剣があげられる。前者は2遺跡2例⁽¹¹⁾、後者は1遺跡1例⁽¹²⁾確認できる。地域の拠点集落のみに認められ、時期は弥生時代中期に限られる。

県内における弥生時代の青銅器生産の様相について

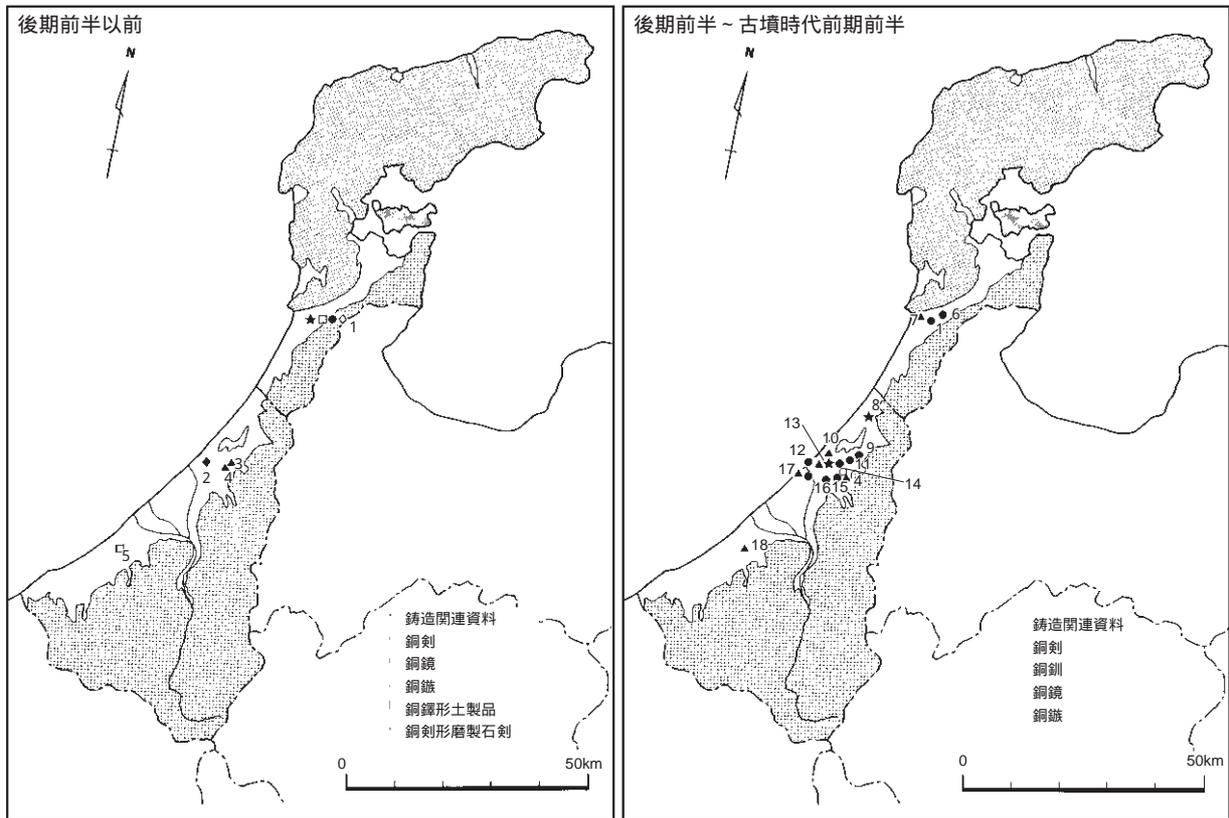
以上の資料をもとにして、県内における弥生時代の青銅器生産の様相について仮説を提示したい。

県内における青銅器生産は、吉崎・次場遺跡から出土した土製鑄型外枠の存在から、後期前半までに開始されていた可能性が高い。生産された製品は、銅鐸など集落内祭祀に用いられたものと考えられる。地理的な分布については、鑄造関連資料、舶載青銅器、青銅器関連資料は、地域の拠点集落に集中して出土するが、その他の青銅器製品は金沢市域に集中して出土する。

後期後半～終末期には鑄造関連資料の増加が認められる。小地域の中核集落と考えられる大友西遺跡⁽¹³⁾や、高地性集落と考えられる鉢伏・茶白山遺跡など、多様な集落から鑄造関連資料が出土している。生産された製品は青銅利器などが推定できる⁽¹⁴⁾。青銅器製品についても、量の多寡はあるが、さまざまな集落から出土しており、拠点集落に集中するという状況は認められない。地域的な分布については、金沢市域および羽咋市域に集中して出土する。後期前半以前とは異なり、生産遺跡の周辺に製品出土遺跡が分布しており、製品が生産遺跡から周辺遺跡に流通していたことを推定できる。

以上のように、県内における青銅器生産の様相は、その開始期である中期後半～後期初頭（段階）と、青銅祭器から青銅利器への転換が行われる後期後半（段階）の2時期に画期が認められる。

これらの画期は、集落遺跡の消長や、鉄製品とその製作技術における画期とほぼ一致する⁽¹⁵⁾。すなわち、青銅器や鉄製品とその製作技術における画期は、連動して生じており、この地域の社会構造変化に大きな影響を与えていた可能性が高い。しかしながら、鑄造関連資料および青銅器が集中して出



第3図 鑄造関連資料および青銅器出土遺跡分布図

第1表 鑄造関連資料および青銅器出土遺跡一覧表

番号	名称	遺跡名	所在地	出土遺跡	時期	備考
1	土製鑄型外枠	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	W地区包含層	後期前半	
13	連鑄式銅鏡 トリベ	大友西遺跡	金沢市戸水町・大友町	SD03(大溝) SB11(布堀建物)ピット2ほか	後期後半～終末期	
8	銅塊	鉢伏・茶白山遺跡	宇ノ気町鉢伏	第1号竪穴住居跡(新)	後期後半～終末期	有段高杯転用
2	銅剣	藤江B遺跡	金沢市藤江北	河道1	終末期	床面に焼土
14	銅釧	南新保C遺跡	金沢市南新保町	2号埴周溝	中期末～後期前半	中細形
2	小銅鐻	藤江B遺跡	金沢市藤江北	1号大溝	後期後半?	有銅銅釧か?
6	銅鏡	四柳白山下遺跡	羽咋市四柳町	F地区第 面包含層	後期?	
1	銅鏡	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	V-8号土坑上面	終末期～古墳時代前期初頭	破面研磨
9	銅鏡	塚崎遺跡	金沢市塚崎町	包含層	後期前半?	懸垂鏡、四亀文鏡
11	銅鏡	田中A遺跡	金沢市田中町	第6号竪穴住居跡	後期後半～終末期?	内行花文鏡
12	銅鏡	無量寺B遺跡	金沢市無量寺町	包含層	終末期	
13	銅鏡	大友西遺跡	金沢市大友町	B区1号溝	古墳時代前期前半	背面朱付着、重圈文鏡
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	溝	古墳時代前期初頭	懸垂鏡、双頭龍文鏡
15	銅鏡	古府クルビ遺跡	金沢市古府町	P区SD22	後期後半～終末期?	
16	銅鏡	下安原遺跡	金沢市下安原町	包含層	古墳時代前期初頭	重圈文鏡
3	銅鏡	磯部運動公園遺跡	金沢市磯部町	溝B上層	古墳時代前期	破面研磨、内行花文鏡か?
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	2号溝	古墳時代前期	珠文鏡
7	銅鏡	寺家遺跡	羽咋市柳田町	K区1号方形周溝墓	中期後半	
10	銅鏡	近岡遺跡	金沢市近岡町	包含層	中期後半?	
12	銅鏡	無量寺B遺跡	金沢市量寺町	P7(ピット)	後期?	
4	銅鏡	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	C3号溝	終末期～古墳時代前期初頭	
17	銅鏡	下安原海岸遺跡	金沢市下安原町	B区落ち込み状遺構	後期後半～終末期	
18	銅鏡	漆町遺跡	小松市漆町・白江町	K区1号住居跡	後期後半	
1	銅鐻形土製品	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	A区包含層	後期後半	
5	銅鐻形土製品	八日市地方遺跡	小松市日の出町	SD07	終末期	
1	銅剣形磨製石剣	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	A区包含層	終末期	S45年石考研調査
				C区包含層	終末期	S45年石考研調査
					終末期	S46年県教委調査
					終末期	S46年県教委調査
				A-1、B-2区包含層	終末期	S47年県教委調査
				G-24区包含層	終末期	S48年県教委調査
				B-2区第4層	終末期	S62年県埋文センター調査
1	銅鐻形土製品	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	包含層	後期	
5	銅鐻形土製品	八日市地方遺跡	小松市日の出町	包含層	後期	
1	銅剣形磨製石剣	吉崎・次場遺跡	羽咋市吉崎町・次場町・鶴多町	I区4号溝	後期	
				包含層	後期	片面を欠損
				V-12号土坑脇	後期	第1次調査
					後期	有樋式

土する地域は、各時期を通じてほとんど変化が認められない。このことは、画期が技術系譜や素材伝達網などの変化によって生じるにも関わらず、地域内では既存の伝達網を用いていたためと考えられる⁽¹⁶⁾。

地域的には金沢市域の特異性があげられる。この地域は、段階において拠点集落以外の集落に青銅器製品が伝達されることや、段階に小型仿製鏡が多く認められるなど、他地域と青銅器伝達形態に相違が認められる。段階において小地域の中核的集落が2.5～3km間隔に点在していること⁽¹⁷⁾などから、この地域を拠点地域⁽¹⁸⁾として位置づけ得るものと考えられる。

附記

本稿をまとめるにあたり、土製鑄型外枠の認定については、藤田三郎、春成秀爾、吉田 広氏の御教示を得ました。鑄造関連資料の見学には、今井淳一、出越茂和、前田幸恵氏の御厚意を得ました。また、佐々木勝氏からは有益な助言を得ました。文末ながら記して御礼を申し上げます。

失礼ながら、文章中の敬称は省略させていただきました。

註

- (1) 福島正実ほか1988『吉崎・次場遺跡』第2分冊 石川県立埋蔵文化財センター、p160.第126図117。
- (2) 藤田三郎・豆谷和之ほか1997『唐古・鍵遺跡 第61次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要16 田原本町教育委員会。
- (3) 土製鑄型外枠の類例は、滋賀県野洲町下々塚遺跡、同県守山市服部遺跡、奈良県橿原市一町遺跡、兵庫県神戸市玉津田中遺跡で認められる〔三好孝一1993「近畿地方における青銅器生産の諸問題」『古文化談叢』第30集(中)九州古文化研究会〕。
- (4) 福島正実1987『吉崎・次場遺跡』第1分冊 石川県立埋蔵文化財センター、p24・37～56。
- (5) 前田幸恵1996「第1節 鏡類 b銅鏡」『武器・武具・馬具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会、p25。
- (6) 米沢義光ほか1987『宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡』宇ノ気町教育委員会、p13・26・104。
- (7) 一部古墳時代前期初頭の資料も含んでいる。
- (8) 採集資料は集成から除いている。採集資料としては、高松町二ツ屋遺跡(1点)、内灘町大根布砂丘遺跡(1点)、同町西荒屋砂丘遺跡(1点)、金沢市粟ヶ崎地内(1点)、同市金石北遺跡(1点)、同市下安原海岸遺跡(1点)、小松市漆町遺跡(2点)があげられる〔前掲註(5)〕。
- (9) 楠 正勝1997「第1節 銅鏡」『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- (10) 岡村秀典1986「B.中国の鏡」『弥生文化の研究』6 道具と技術 雄山閣出版。
- (11) 安 英樹1997「第3節 銅鐸形土製品」『祭祀具』石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会。
- (12) 前掲註(1) p167。前掲註(4) p108.第138図369。
- (13) 楠 正勝1997『西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会、p449。
- (14) 分布からは小型仿製鏡も製作されていた可能性を推測できる。
- (15) 林 大智1999「吉崎・次場遺跡出土の板状鉄斧について」『石川県埋蔵文化財情報』第2号 財団法人 石川県埋蔵文化財センター。
- (16) 終末(庄内併行)期における既存伝達網の存続は、外来系土器の様相からも確認できる。
〔安 英樹1999「北陸における土器交流拠点」『庄内式土器研究』 庄内式土器研究会〕。
- (17) 前掲註(13) p449。
- (18) 酒井龍一1997「第5章 拠点集落と弥生社会」『弥生の世界』歴史発掘6 講談社。

石川県における古墳時代研究の動向について(1998～99年)

安中哲徳

はじめに 隣県の富山県ではここ数年、日本海側最大の前方後方墳である柳田布尾山古墳の発見・発掘調査をはじめとして、勅使塚古墳、六治古塚四隅突出型墳丘墓の発掘調査や、富山考古学会などによる各地の古墳墳丘測量調査、富山考古学会創立50周年記念シンポジウム『富山平野の出現期古墳』が行われるなど、弥生時代～古墳時代にかけての墓制や土器編年の研究などが盛んに行われている。

それに比べ、石川県の古墳時代をめぐる研究会活動は近年低調であり、現在古墳文化を学ぶ会や村落遺跡研究会も活動停止状態にあるなど、県内では目立った研究会活動は行われていない。

研究会活動 全国規模の研究会では、1998年には埋蔵文化財研究集会『中期古墳の展開と変革』における北陸各地域の中期古墳の動向をまとめた伊藤雅文⁴⁾による報告や、東日本埋蔵文化財研究会『古墳時代の豪族居館を巡る諸問題』における浜崎悟司²⁸⁾による集成報告がある。1999年には埋蔵文化財研究集会『渡来文化の受容と展開』において北陸の古墳の動向を検討し、南加賀地域を中心に中期から後期への動態を論じた樫田誠¹⁾による報告や、庄内式土器研究会『庄内併行期の土器交流拠点』における安英樹³⁴⁾による報告では、外来系土器の検討から土器交流のモデルが提示された。

講演会 1998年2月に行われた『第8回埋蔵文化財保存協会研究会』は土器の胎土観察をテーマとし、奥田尚⁸⁾と米田敏幸³⁹⁾による研究報告ではこれまでの両氏の研究成果から定説の再検討が促されており、発表後の座談会ではこれからは布留系甕を加賀甕と呼ぼうとする提案もされている。5月に行われた『雨の宮古墳シンポジウム』では中屋克彦²⁰⁾、中司照世¹⁸⁾の基調報告、橋本澄夫²³⁾による記念講演や、和田晴吾、河村好光、福永神哉、佐藤晃一³⁶⁾らを変えた討論から、鹿西町雨の宮1号墳の性格や位置づけ、今後の活用方法などが話し合われた。また、10月に行われた『石川考古学研究会設立50周年記念講演会』では、近藤義郎¹⁶⁾により最古の前方後円墳を追求した氏の最新の研究成果が公表されている。1999年1月に行われた石川考古学研究会新年例会新春シンポジウム『オンドルのある村 - 小松市額見町遺跡と古代の北陸 - 』では、樫田¹⁰⁾³⁷⁾により三湖台は中央の権力と能美を含む勢力、渡来系の集団によって利用された墓域であるとした報告が行われている。

論文・報告書等 個別の研究では、現在土器の編年研究は一定程度の到達点に達しており、雨の宮古墳関連以外ではあまりまとまったテーマは見られず、個別に既出資料の再確認・再検討と新出資料の位置づけを行っているものが目立つ。1998年には小松市金比羅山古墳の横口式石槨の検討を行った伊藤²⁾による「北陸における終末期古墳の研究」や、県内の前期古墳出土土器の集成と築造時期の位置づけを行った唐川明史¹²⁾による中島町「上町マンダラ2号墳出土土器の編年について」、浜崎²⁷⁾による小松市八幡遺跡における同時存在する建物群の抽出を追求した「2～4世紀の集落の構成について」と、山川史子³⁷⁾による「火化木芯粘土室墳について」での八幡2号墳木芯粘土室の検討がある。また『北陸の考古学』では弥生～古墳時代にかけての木棺墓の型式と変遷の検討を行った前田清彦³¹⁾による「北陸の木棺墓とその展開」、これまで月影期(弥生時代終末)とされてきた七ツ塚1号B墓の築造時期が漆7・8群(古墳時代前期)であるとした木田清⁴⁾による「金沢市七ツ塚1号B墓築造時期の再検討」、4～5世紀にかけての土器使用実態の観察から機能論の追求を行った向井裕知³³⁾による「加賀における5世紀の土器様相」などがある。安井重幸³⁵⁾・中屋²²⁾・橋本²⁴⁾らにより『史跡雨の宮古墳群整備事業報告書』が刊行され、調査成果と被葬者像について検討が行われている。他にも中屋²¹⁾による「石川県雨の宮1号墳の発掘調査」、橋本²⁵⁾による「石川県雨の宮古墳群と小田中親王塚古墳」もある。古屋紀之³⁰⁾は「墳墓における土器配置の系譜と意義 - 東日本の古墳時代の開始 - 」に

において、東日本の古墳成立を明らかにする目的から墳墓出土二重口縁壺の編年及び土器配置の類型化を行い、北陸の古墳についても検討しており注目できる。秋山進午は¹⁾「夔鳳鏡について」の中で七尾市国分尼塚古墳報告書考察の一部として、中国・朝鮮・日本出土の夔鳳鏡を集成し分類を行っている。今井淳一⁶⁾は「古墳時代後期における邑知潟周辺の動向」の中で邑知潟周辺における生産地に対する消費地での食膳具消費状況を分析し、羽咋市新保ゼンボン古墳群の位置づけを行っている。1999年には『金沢市史』資料編¹⁹考古が刊行され、伊藤雅文・出越茂和⁵⁾により古墳時代の市内主要遺跡の集成と解説が行われている。さらに伊藤³⁾は「金沢市域を中心とする古墳時代首長の動向について」において市内の古墳の動向をまとめており、出越¹⁷⁾は「金沢平野における南北地域差」の中で、金沢平野出土の外来系土器の検討を行っている。また、北陸の古墳時代の対外交流について検討を行った中司¹⁹⁾による「石川県下の古墳と対外交渉」や須曾蝦夷穴古墳の被葬者像について検討を行った橋本²⁶⁾による「石川県須曾蝦夷穴古墳」がある。麻柄一志³²⁾は「焼かれた村 - 北陸地方の火災住居について - 」で北陸の火災住居の集成を行っている。今井⁷⁾は「古墳時代前期における邑知潟周辺の動向 - 太田ニシカワダ遺跡のまとめにかえて - 」の中で邑知潟周辺の平地建物の変遷と検討を行っている。また羽咋市太田ニシカワダ遺跡出土の古墳時代前期の土師器群に、祭祀用と考えられる黒色漆塗土器が80点以上含まれていたことも確認されている。林大智²⁹⁾による「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」では、弥生～古墳時代後期にかけての鉄製農具の変遷と画期及び手工業生産との関わりからその社会的・政治的背景について考察し、手工業生産の導入展開が流通の新たなネットワークを作り出し、地方の政治秩序の再構築を引き起こしたことを明らかにしており興味深い。

発掘調査 古墳の調査では、1998年には小松市教委¹⁵⁾により小松市矢田借屋古墳群の調査が行われ、6世紀前半とみられる9号墳の木芯粘土室墳から須恵器や土師器、ガラス小玉、管玉、鉄製の鹿角装刀子、鉄鏃、鉄滓が、周溝からは土師質と須恵質の円筒埴輪が見つかった。1997年から河村¹³⁾や金沢大学考古学研究会を中心とした川田古墳群発掘調査団による鳥屋町川田古墳群の発掘調査が始められ、1999年の川田ソウ山1号墳の発掘調査では墳形や墳丘規模が確認されている。1999年には県埋文センターにより小松市ブッシュウジヤマ古墳群の調査が行われ、6世紀中頃と思われる2号墳の木芯粘土室墳からは、須恵器や鉄剣、刀子、鉄鏃などが見つかり、入り口も確認されている。羽咋市教委により行われた羽咋市ヤッキヤマ古墳の調査では、5世紀前半とみられる輝石安山岩の板石を使用した箱形石棺から人骨、鉄製の鹿角装剣、刀子、鉄鏃が見つかった。古墳の発掘調査量は増加しており、今後調査成果の評価・位置づけが期待される。集落の調査では、1998年に県埋文センターにより羽咋市四柳ミッコ遺跡の調査が行われ、5世紀後半の鉄鍛冶工房跡が確認されている。99年に高松町教委により行われた弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての大集落である高松町八カド遺跡⁹⁾の発掘調査では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡などが100棟以上確認され、金沢大学考古学教室や県内各有志達による協力も多数得られている。その他、県内の発掘調査の動向については、「石川考古学の動向(1998～99年)」『石川考古学研究会々誌』第43号2000に詳しいのでそちらを参照されたい。

史跡整備 1994年から着手されていた鹿西町雨の宮古墳群の整備事業³⁵⁾が完了し、1998年5月には鹿西町主催による上記のシンポジウム³⁶⁾が開催され、7月からは全6回の古墳教養講座も行われた。能登島町では1998年8月蝦夷穴歴史センターが完成し、同古墳や町内から出土した遺物が展示されている。鳥屋町でも川田古墳群の整備事業が進む一方、寺井町秋常山古墳群では1999年1月の国指定史跡化を受け、史跡公園化へ向けた整備計画の検討が本格化している。

展示会 1998年8月の石川県埋蔵文化財センターオープン記念特別展『北陸と出雲の古代文化交流展』では、北陸と出雲の子持壺や双龍環頭大刀の比較が行われている。1999年4～6月の小松市立博物館

『こまつ・発掘・発見！最前線 - 地中の都市・もうひとつの小松 - 』では保存処理が終了した小松市八里向山F遺跡7号墳出土の鉄製横矧板鋸留式短甲が展示され、7～8月に県七尾美術館で行われた『能登の古墳文化 - 七尾鹿島地域の遺跡を中心に - 』では、七尾市国分尼塚1・2号墳や鹿西町雨の宮1号墳、羽咋市滝3号墳・柴垣円山1号墳をはじめ多数の古墳出土遺物の展示が行われた。

おわりに 古墳研究を志す若手の一人としては、これまで何もしてこなかった自分の怠慢さに頭を抱えるばかりである。自分に課せられた課題は山ほどあり、何から手をつけていいか正直迷うところではあるが、まずは地道に基礎資料を集めていきたいと思う。また、同僚の富田和氣夫らと未測量の前方後円墳である押水町竹生野天皇山1号墳の測量を計画しており、多くの人に参加していただきたい。

なお、失礼ながら文章中における敬称は省略させてもらった。また、なるべく多くの研究を紹介したつもりであるが、浅学により漏れてしまった内容・文献も多数あると思われる。今からでも御教授願えれば幸いである。紙幅の都合上、今回は各研究についての批評は行っておらず今後の課題である。

石川県古墳時代関連文献一覧（1998～99年）

- 1) 秋山進午 1998 「夔鳳鏡について」『考古学雑誌』84巻第1号
- 2) 伊藤雅文 1998 「北陸における終末期古墳の研究」『網干善教先生古稀記念考古学論集』
- 3) 伊藤雅文 1998 「金沢市域を中心とする古墳時代首長の動向について」『市史かなざわ』第5号
- 4) 伊藤雅文 1998 「北陸の古墳時代中期首長墓について」『中期古墳の展開と変革 - 5世紀における政治的・社会的変化の具体相(1) - 』埋蔵文化財研究会
- 5) 伊藤雅文・出越茂和 1999 「古墳時代」『金沢市史』資料編19 考古
- 6) 今井淳一 1998 「古墳時代後期における邑知湯周辺の動向」『新保ゼンボン古墳群』羽咋市教育委員会
- 7) 今井淳一 1999 「古墳時代前期における邑知湯周辺の動向 - 太田ニシカワダ遺跡のまとめにかえて - 』『太田ニシカワダ遺跡』羽咋市教育委員会
- 8) 奥田 尚 1998 「砂礫観察から見た土器胎土分析の現況」『庄内式土器研究』庄内式土器研究会
- 9) 折戸靖幸 1999 「高松八カド遺跡発掘調査概要報告」『石川考古』第255号石川考古学研究会
- 10) 榎田 誠 1999 「古墳時代の江沼 - 三湖台古墳群成立の背景 - 』石川考古学研究会新年例会新春シンポジウム『オンドルのある村 - 小松市額見町遺跡と古代の北陸 - 』発表要旨
- 11) 榎田 誠 1999 「北陸における古墳時代中期の様相 - 南加賀地域の事例を中心として - 』『渡来文化の受容と展開 - 5世紀における政治的・社会的変化の具体相(2) - 』埋蔵文化財研究会
- 12) 唐川明史 1998 「上町マンダラ2号墳出土土器の編年について」『上町マンダラ2号墳発掘調査報告書』中島町教育委員会
- 13) 河村好光 1999 「鳥屋町川田ソウ山1号墳の墳丘調査」『石川考古』第254号石川考古学研究会
- 14) 木田 清 1998 「金沢市七ツ塚1号B墓築造時期の再検討」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 15) 小松市教育委員会 1999 「矢田借屋9・10・11号墳の調査」『小松市埋蔵文化財だより』第9号
- 16) 近藤義郎 1998 「前方後円墳の誕生」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 17) 出越茂和 1999 「金沢平野における南北地域差」『戸水遺跡群 戸水ホコダ遺跡』金沢市埋蔵文化財センター
- 18) 中司照世 1998 「雨の宮と古墳時代前期の北陸」『雨の宮古墳公園完成記念 古墳シンポジウム』
- 19) 中司照世 1999 「石川県下の古墳と対外交渉」『金沢市史会報』Vol. 8
- 20) 中屋克彦 1998 「雨の宮1号墳の発掘調査」『雨の宮古墳公園完成記念 古墳シンポジウム』
- 21) 中屋克彦 1998 「石川県雨の宮1号墳の発掘調査」『古代』第105号早稲田大学考古学会
- 22) 中屋克彦 1998 「考古学的調査の概要」『史跡雨の宮古墳群整備事業報告書』鹿西町教育委員会
- 23) 橋本澄夫 1998 「雨の宮1号墳の被葬者像を探る」『雨の宮古墳公園完成記念 古墳シンポジウム』
- 24) 橋本澄夫 1998 「雨の宮1号墳の被葬者像(まとめにかえて)」『史跡雨の宮古墳群整備事業報告書』鹿西町教育委員会
- 25) 橋本澄夫 1998 「石川県雨の宮古墳群と小田中親王塚古墳」『季刊考古学』第65号
- 26) 橋本澄夫 1999 「石川県須首蝦夷穴古墳」『季刊考古学』第68号
- 27) 浜崎悟司 1998 「2～4世紀の集落の構成について」『八幡遺跡』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 28) 浜崎悟司 1998 「石川県」『古墳時代の豪族居館を巡る諸問題』東日本埋蔵文化財研究会
- 29) 林 大智 1999 「石川県における農具の鉄器化と手工業生産の導入について」『農具』石川県考古資料調査・集成事業報告書石川考古学研究会
- 30) 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義 - 東日本の古墳時代の開始 - 』『駿台史学』第104号
- 31) 前田清彦 1998 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 32) 麻柄一志 1999 「焼かれた村 - 北陸地方の火災住居について - 』『考古学に学ぶ - 遺構と遺物 - 』同志社大学考古学シリーズ
- 33) 向井裕知 1998 「加賀における5世紀の土器様相」『北陸の考古学』石川考古学研究会
- 34) 安 英樹 1998 「北陸に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究』庄内併行期の土器交流拠点』庄内式土器研究会
- 35) 安井重幸ほか 1998 『史跡雨の宮古墳群整備事業報告書』鹿西町教育委員会
- 36) 安井重幸ほか 1998 『雨の宮古墳公園完成記念 古墳シンポジウム』鹿西町・古墳シンポジウム実行委員会
- 37) 安中哲徳 1999 「榎田報告「古墳時代の江沼 - 三湖台古墳群成立の背景 - 』『石川考古』第252号石川考古学研究会
- 38) 山川史子 1998 「火化木芯粘土室墳について」『八幡遺跡』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 39) 米田敏幸 1998 「胎土観察と庄内式土器の研究」『庄内式土器研究』庄内式土器研究会

能登地域における11・12世紀代のロクロ土師器について(粗描)

柿田祐司

1. はじめに

11・12世紀という時代は土器研究の盛んな古代・中世にあって、その狭間であるためかそれほど研究が進んでいるとは言えない。それは中世の研究者にとっては、京都系土師器の受容以後についての関心が高く、古代の研究者にとっては須恵器の研究が主体であったからであろう。

加賀地域では田嶋明人・出越茂和や藤田邦雄らの研究、能登地域では小嶋芳孝や四柳嘉章など研究が知られる。ここでは、最近資料の充実してきた能登の11・12世紀代の資料を紹介し、ロクロ土師器変遷を加賀地域の資料と対比しながら述べてみたい。

2. 資料

1) 寺家遺跡SK01 (羽咋市)

内黒器種は、無台椀・有台椀ともに見られる。またミガキも行われている。柱状高台の皿も見られるが、後代のものに比べればまだ深みであり、椀形をしている。報告書では11世紀第3四半期頃に位置づけられている。ここでは後述の資料の内容から若干古く、11世紀第1四半期から第2四半期にかかる時期と推定しておきたい。

2) 貝田遺跡 (羽咋郡富来町)

遺構一括出土のものはないが、出土地点毎にまとまった廃棄が見られる。特に古・新としたものは、ある特定の時期をあらわすものではないが、ある時間幅の中で土器の組成を良くあらわしている資料と考えている。3区資料は時期・組成を良くあらわす資料と考えている。

古 小型の無台椀が見られることを除けば、寺家遺跡SK01と組成は比較的似ている。個別に見れば無台椀は浅くなり、内黒有台椀はミガキを行わないタイプになる。この資料を11世紀中葉頃と推定したい。

新 有台の器種がなくなる段階。無台椀も厚手でバラエティーが少なくなり、直線的に立ち上がるようになる。柱状高台皿は台部が外に開くタイプとなる。この資料を12世紀初頭～前半頃と推定したい。

3区資料 小皿は貝田遺跡の中ではもっとも口径が小さくなり、形態にもバラエティーがなくなる。また非ロクロ成形の皿が見られる。口縁部二段ナデで端部を面取りするものと、一段ナデのものがある。貝田遺跡で見られた、口径12cm代の器種が見られなくなる。共伴遺物には珠洲焼の期の古相とみられるものや白磁碗類等がある。この資料を12世紀後半代に位置づけておく。

3) 矢駄アカメ遺跡 (羽咋市志賀町)

土師器集中地点 口縁部二段ナデの非ロクロ成形の皿が主体となっている。口径15cm前後のもの、口径9cm前後のものがみられる。ロクロ成形は少なく、有台の器



第1図 遺跡の位置

種は見られない。また、体部が内湾する小皿は見られない。ロクロ成形のものが少ないのは組成に偏りが見られるためと考えられる。非ロクロ成形の皿は、藤田により検討が行われており[藤田1997]、平安京左京内膳町出土資料との対比から11世紀末頃に位置づけられている。

1号土坑 ロクロ成形のものが主体である。柱状高台皿の台部を比較すると、土師器集地点のものより外に開き後出的なものである。非ロクロ成形の口縁部二段ナデのものもあるが、後出する口縁部を面取りしたものが含まれている。やや混じりのある資料と捉えられるが、二段ナデのものも曖昧なものとなっており、土師器集中地点よりも後出するものと考えられる。12世紀前半～中葉頃に位置づけておきたい。

おわりに

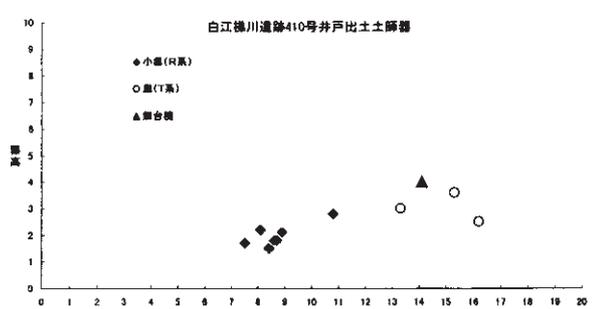
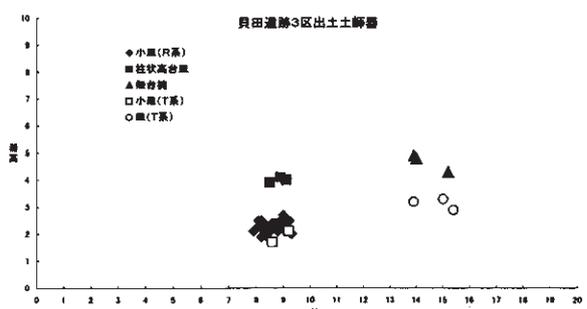
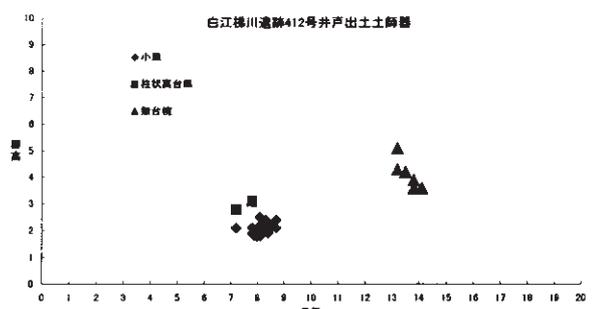
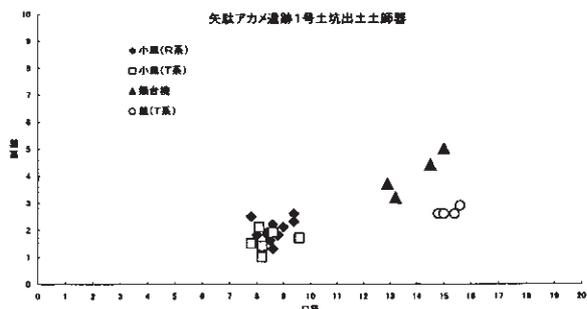
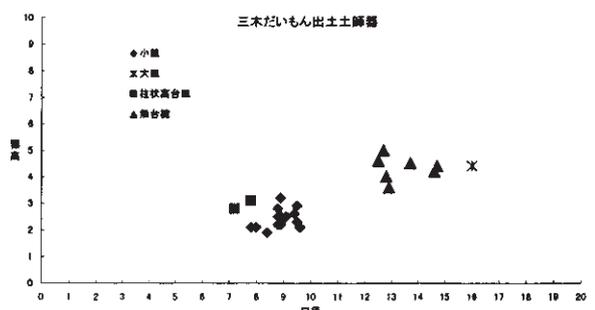
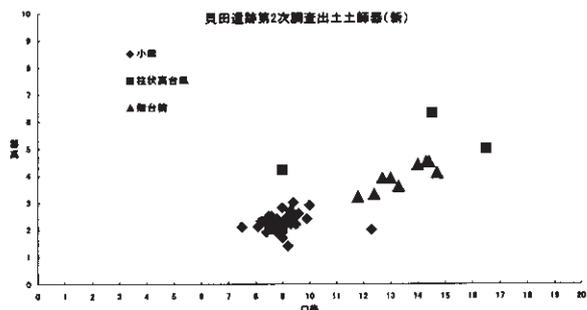
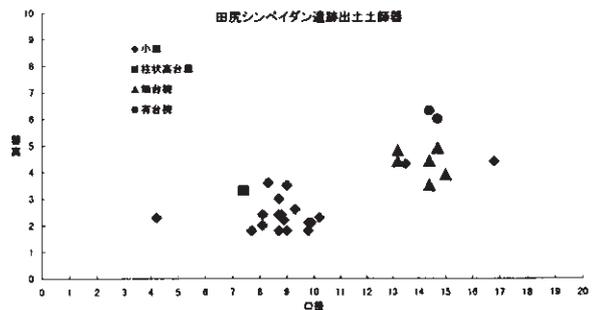
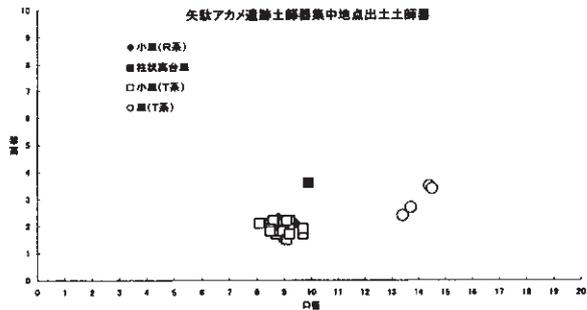
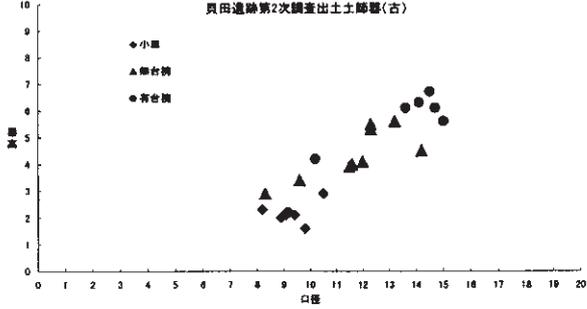
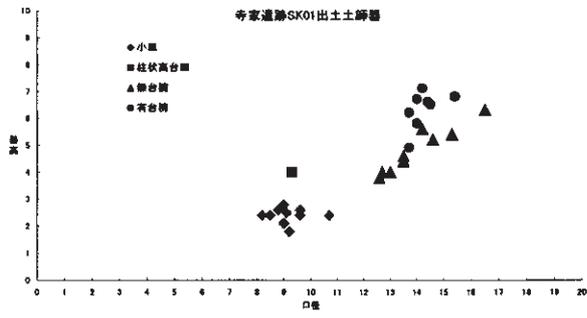
上記資料のロクロ土師器について第3図のように変遷図を作成した。年代観についてはまだまだ検討する必要があると考えているが、その順列についてはほぼこれで良いものと考えている。年代観の定点としたのは、矢駄アカメ遺跡土師器集中地点から出土した京都系土師器皿の年代観と、貝田遺跡第3区出土の珠洲焼である。それ以外には出土遺物からの年代的根拠は薄い。内黒器種(有台椀)の消滅や各器種のバラエティーのある形態の淘汰を考慮して当てはめている。第2図は口径と器高の相関図である。加賀地域との対比をすると、田尻シンペイダン遺跡の資料は貝田遺跡の古と似るが、やや後出するものと考えている。地域が違うため単純に比較することは難しいが、口径12cm代の器種に注目してそう考えている。それはこの口径の器種が徐々に見られなくなっていくという流れが今回提示した能登の資料には見られ、示さなかったが田尻シンペイダンより古いとされる加賀の資料中にも口径12cm代の器種がみられる。加賀・能登が同じ組成の変化をたどるとすれば、田尻シンペイダン遺跡は貝田遺跡の新と矢駄アカメ遺跡1号土坑の間くらいに位置づけられるが、年代観は11世紀末葉頃に位置づけられており違いが生じる。また、12世紀前半とされる三木だいまん遺跡資料も同様と考えられる。12世紀中葉に位置づけられる白江梯川遺跡412号井戸は矢駄アカメ1号土坑よりもやや新しく、非ロクロ土師器が出現し12世紀後半に位置づけられる410号井戸は、貝田遺跡3区と同じかやや古いものと考えている。

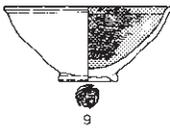
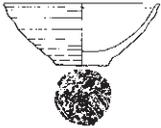
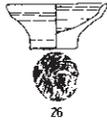
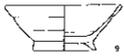
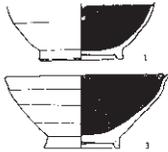
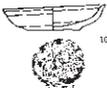
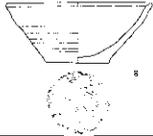
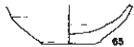
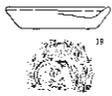
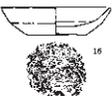
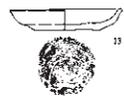
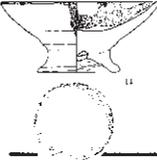
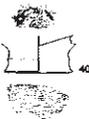
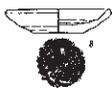
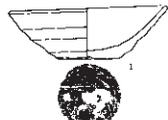
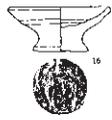
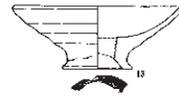
詳細な検討及びその前後の10世紀・13世紀のこと、また能登でもその他の地域については次の機会を得てのべることとし、今回を入り口として能登の土師器について今後も検討していくこととしたい。

[引用・参考文献]

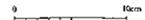
- 石川県立埋蔵文化財センター 1979 『田尻シンペイダン遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1988 『寺家遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『富来町貝田遺跡・貝田C遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター 1998 『矢駄アカメ・イケダ遺跡』
小嶋芳孝 1988 「土器に見る画期と年代観」『寺家遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人 1997 「加賀地域での10・11世紀の土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』
北陸古代土器研究会
出越茂和 1997 「北陸古代後半における椀・皿食器(後)」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
藤田邦雄 1992 「加賀における様相 土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
1997 「中世北陸の京都系土師器皿 その受容と展開」『第16回中世土器研究会報告資料』中世土器研究会
四柳嘉章 1997 「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』
北陸中世土器研究会編 桂書房

第2図 口径と器高の相関図



	黒色土器無台椀・有台椀	皿	無台椀	柱状高台皿						
寺家遺跡SKO1	 1	 9	 20	 15	 29	 32	 33	 26		
貝田遺跡(古)	 9	 1	 1	 10	 21	 8	 25	 3		
矢駄アカメ遺跡 土師器集申地点		 86		 85		 89				
貝田遺跡(新)	 19	 16	 13	 1	 13	 7	 6	 21	 16	 11
矢駄アカメ遺跡1号土坑	 36	 29		 30	 35	 24	 23	 40		
貝田遺跡(3区)		 8	 3		 2	 1	 16	 13		

第3図 能登における11・12世紀代のロクロ土師器



九泉

柿田祐司・滝川重徳

1. 北陸の古代墓

前回の九泉¹では、石川県の古代墓について確認されている埋葬形態について述べ、墓として認識されているものは少ないとした。また、検出事例は少ないものの土坑墓が主体であったのではないかと推定した。現時点において、これらについて若干修正しなければならない部分も見えてきている。それらについては、今後検討する機会を得ることとし、今回は北陸の古代墓の検出状況と、石川県の古代墓についてやや話しは飛躍するが、その位置づけを考えてみたい。

まず最近の発掘事例について見てみよう。平成9・10年に新潟県柿崎町で調査された新保遺跡において、柿崎古墓²が検出されている。木炭榑木棺墓といわれるもので、長さ約3.4m、幅2.4m、深さ0.6mの墓壇の中央に長さ約1.6m、幅0.4mの木棺が納められている。木榑と木棺の間には木炭が多量に詰められている。また、木榑の四隅には須恵器壺2点、灰釉陶器瓶1点、灰釉陶器壺1点が配置されている。時期は9世紀後半とされ、全国的に見てもその類例は少ないとされている。また、桁行9間(20.2m)梁間2間(5.6m)の東西両面に1間(2.6m)の二面庇もつ掘立柱建物跡を中心とした建物群が検出されている。一括廃棄された多量の土器類も検出され、かなり格の高い遺跡であることが窺える。柿崎古墓はその建物群の北西に位置している。古墓周辺には遺構はほとんど見られず、建物群が古墓を意識していることは明らかである。このような状況から、柿崎古墓は「強い政治性を感じさせる新保遺跡と不可分の関係のある人物を被葬者としている」と考えられている。さらに古墓の形態は畿内地域との強い関連性をもつとされている³。

新潟県では9世紀中葉から10世紀初頭に墳墓の検出事例が集中している。これはこの時期に墳墓が増加したのではなく、副葬品や明確な施設を持つことから考えられている。9世紀中葉以降は手工業生産・土器様相・集落構造等が大きく変化する時期で、墳墓の検出例の増加もこの一連の動きの中にあるものと評価されている⁴。柿崎古墓もこの流れの中にあるものと評価されよう。

石川県加賀地域では9世紀代以降に墳墓の検出事例が特に増加するというわけではない。むしろ8世紀代の検出例が多い状況にある。手工業・土器・集落の変化とは一致せず、新潟県の状況とは異なるように見える。葬送には死者を悼むという行為のほかに、地位や動産・不動産からなる財産の相続と関連している⁵と考えられることから、加賀地域では9世紀代にむしろ埋葬行為に対する引き締めが強くなると考えられよう。これは加賀立国によって再び在地勢力に対する支配体制が強まった結果と考えたい。能登地域においては、8・9世紀代に古墳の追葬事例が見られ、時期的な偏りはそれほどないと考えられる。また、9世紀代には追葬以外の埋葬形態が確認でききようになる。それほど支配体制が強固なものではなく、埋葬形態を規制するまでには至っていない結果として捉えられようか。

富山と福井はともに例が少なく不明な点が多いが、富山は新潟の様相に近く、福井は加賀地域の様相に近いのではないかと推定しておきたい。

1 財団法人石川県埋蔵文化財センター 1999 「九泉」『石川県埋蔵文化財情報』創刊号

2 石川智紀 「新保遺跡」『発掘調査報告会'99』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

3 小林義孝 1999 「古代の個人墓と集団墓地」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

4 春日真実 1995 「新潟県の奈良・平安時代の墓制について」『東日本における奈良・平安時代の墓制 - 墓制をめぐる諸問題 -』第 分冊 第 5 回東日本埋蔵文化財研究会

5 宇野隆夫 1991 「埋葬」『律令社会の考古学的研究』桂書房

2. 野田山墓地覚書

野田山墓地は、前々号でも少し触れた通り、金沢城下町の「都市墓」的な存在である。これまでに何度も探訪する機会を得、予備調査めいたことも行った。今回は、野田山が従来どう注目されてきたかを紹介し、私達自身の視点についても、探訪時の所見を交えながら説明したいと思う。

野田山墓地を旧跡として意識したものとして、森田平次著『金沢古蹟志』(1891年)をまず挙げねばならないが、その扱いはむしろ藩政末期の随筆類に近い。この頃は野田山はまだ、いわば「古蹟」化しきっていなかったのだろう。大正期になると、加越能史談会による野田山墓地の踏査が活発化する。遅くともこの時期には野田山の郷土史的価値が認識されていたことがわかる。これらの成果は、和田文次郎氏による『金沢墓誌』(加越能史談会、1919年)に結実した。本書は金沢市中の寺院、及び野田山に葬られた名士の事績を記したもので、墓石・碑文自体の提示はないが、序文からは、そこに至るまでに綿密な踏査を行っている様子を窺うことができる。

金沢墓誌公刊の後も、野田山研究はおそらく有志に引き継がれたと思われるが、しばらくその活動ははっきりしなくなる。半世紀以上たった昭和45年(1970年)、加能郷土史学会会誌上(第3号)における近弥二郎氏の報告「野田山墓碑の探訪」によると、この前後にも野田山探訪の盛り上がりがあったことが知れるが、その後会誌には直接野田山に関わる論考は発表されていない。

一方、昭和58年(1983年)には、北国新聞に133回にわたり「レポート野田山から」が連載された。紙上連載という制約はあるが、野田山踏査の伝統を包摂しつつ、マスコミの特性を生かし、多方面から野田山を照射したことは、高く評価される。

平成に入ってから、郷土史家による野田山踏査の流れを見出すことができる。八木士郎氏による「加賀藩前田家墳墓史」(1991年)「加賀藩八家墳墓史」(1993年)「野田山異碑傑誌録」(1995年)は、私家版であるが公表された労作である。

現在までの野田山研究の大勢をまとめると、郷土の文化遺産という認識のもとに、墓碑の探訪を通し先人を顕彰しようとする立場が主であり、その成果は決して小さいものではないにせよ、墓地総体を対象にした論考は、北国新聞社の紙上レポートを除いてほとんど公表されていないと言える。

こうした現状から、埋蔵文化財あるいは考古学的な関心のもとに野田山墓地を位置付けるという試みは、研究の進展に一定の有効性をもつと考える。

野田山を歩くと、石塔の林立のみならず、盛り上げられた塚(墳丘)に驚嘆することもしばしばである。子細にみれば墳丘の形状は、方形を基調としつつ、単独のもの、土手状に連続したものの、墳頂部の広いもの狭いもの等多様である。また墳丘が立地する家ごとの区画は、斜面を大規模に削平し、周囲に溝・土手を巡らせる場合も多い。近代に入ってからの変更を指摘する声もあるが、全くの無から生じたとは考えにくい。この辺の可否も含め、これら普請行為に注意を払うべきであろう。

墓石も形状・材質とも多様である。現段階では、凝灰岩製宝篋印塔(笏谷石)・五輪塔(非笏谷石)、戸室石製五輪塔が中心となる近世初・前期から、凝灰岩(非笏谷石)製の笠付塔婆形・位牌形墓碑が加わり次第に増加する近世中・後期に大別できるが、その細別を始め、家単位での墓石形状の変化、使い分け等追求すべき課題は山積している。またその配置や向きなど、墓地内における空間位置を把握し、個々の墳墓間の関係性を念頭に置く必要がある。これらの認識に立った上で、墓碑銘文の検討を行えば、より興行きある内容が読み取れるものと期待できよう。

以上は考古学の研究者が対象に示す、ごく一般的な関心を敷衍したに過ぎないが、これはつまるところ、野田山墓地を遺跡として捉えようということである。その意味で、金沢城下町遺跡の調査・研究と同じ枠組みで取り組めるものと理解している。

[発掘余話] 金沢城跡五十間長屋出土の 鋤始 刻石

その3 ~おそるべしジンザ~

北野博司

18 朱書き石の発見

石垣解体調査は師走に入り時雨の中も急ピッチで作業が進められた。解体する石材は、取り外しの現場で一石一石、詰め石や合場の状態など積みの特徴を記録し、写真撮影を行う。石の加工痕跡は、二ノ丸広場の仮置き場で記録を取るが、一度置いてしまうと裏面が観察できなくなるため、危険をともしながら釣り上げたわずかの静止時間が勝負のときである（土田友信「金沢城跡石垣調査と刻印」『石川県埋蔵文化財情報』第2号）。

「石積み技術」を復元する唯一の実物資料である「石材の諸関係」は、一旦解体すると永久に失われてしまう。足場の悪い栗石の上で、これを見逃すまいとする緊張感と、作業をすばやく進めようとする「石工(敬意を込めてそう呼ばせていただく)」との対決を繰り返すなかで、夕方には一日の疲れがいいようもなく足下から襲ってくるのであった。これだけの緊張感が続くとさすがに夢にみる調査員がでてきた。事件はそんな疲労感がたまってきたころに起こるものである。

夜、写真を整理していて、調査員が叫んだ「なんや、これ!!」。みんながまわりに集まった。直方体状のかつら石(天端石)の裏側に赤色の文字が見える。「三十」なんか。最後の文字は読めない。早速翌日、業者に頼んで石を裏返してもらおうと、やや鈍い赤で「三十七」と書いてある。写真で見えるような文字を現場で見落としていたのだ。朱書き石は、工事の際の石工達の符丁であるという。当時の工事形態を知る上で貴重な資料となる。翌日からさらに集中力を高める必要が出てきた。

現場は正月休みがあけると大雪に見舞われていた。冬場も石垣解体調査を継続するという事で五十間長屋から橋爪門統櫓を覆う大きな素屋根をかける工事を始めた矢先であった。幸い覆い屋が完成する1月25日まではこの緊張感から開放されることとなったが、その間は二ノ丸広場で雪をかき分けての石の加工痕観察が待っていた。

春はまだ遠い。

19 「鋤始」石はジンザの仕業か？

宝暦年中にジンザが城内で盛大な鋤初めを行ったという記録を糸口として、犯人探しが始まった。ジンザのプロフィールを簡単に紹介しよう。

もとは御扶持人石切で絵図が得意であった。宝暦五年(1755)「御絵図書」となり、宝暦九年大火の「御焼失絵図」を調えた。宝暦十一年に穴生に出世し、その後、明和・安永年間(~1780)まで活躍している。天明年間に五十歳余りで亡くなった。家族構成や家柄等は次号以降に触れていく。

さて、五十間長屋石垣が修理された宝暦十三年(1763)当時、世襲穴生の後藤家、奥家とも世代交代の時期で担当となるべき当主がいなかったことは前号で紹介したが、他にもジンザが関わった状況証拠がある。

正木甚左衛門は当時、石引きの画期的道具である「地車」の発明者として知られており(ただし、彦三郎によれば真の考案者はジンザでなく御手木小頭関口喜太夫ら4人だという)、宝暦十二年(1762)四月に初めてこれを使って、貯用石のあった中山町から城内へ石引きをした。

より直接的な関連を示す記事として、大火後の五十間長屋台の石垣普請の際、正木甚左衛門が工夫して石垣の上にあった塀を引き除け、積み直しが完成してから元の通り引き据えたという。発明者ジ

ンザの本領発揮である。

さらにおもしろい話がある。城内の石垣の善悪について寸評を加える後藤彦三郎は、金沢城で二番目に見事として、二ノ丸の菱櫓下～楽屋多門下石垣をあげている。実はこの石垣、寛文六年に崩れ、寛文八年(1668)に後藤家三代権兵衛(彦三郎は六代目)が修築した部分である。この菱櫓東北隅と宝暦年間に積み直しをした五十間長屋東北隅とは対になるもので、本来勾配(矩方・規合)が合致すべきところをおもしろくないこと(第4図)になってしまった。これは穴生が「石法」を知らないからであるという。図で重ね合わせると僅かなことのように思えるが、現場で見るとそのちがいは歴然としている。菱櫓下を手本にして複雑な勾配理論を完成させた彦三郎がこれを許せなかったのもうなづけるような気がする。この「石法を知らない」の批判文句は別の箇所ではジンザに対して向けられている。

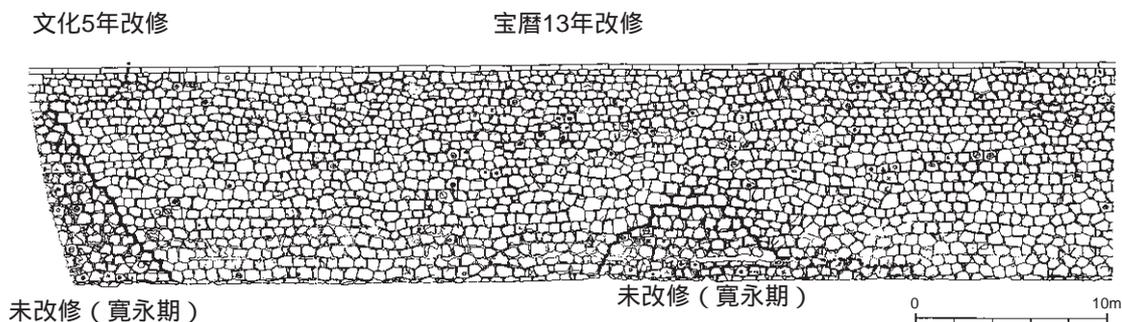
20 石垣は語る - ジンザ積み -

これだけ状況証拠がそろった。刑事ドラマならさしずめここで物証を探しあて、立件へと進むのであろうが、なんせ250年前の出来事、ジンザが関わった物証はそう簡単に出てこない。

考古学は「モノ」を観察、記録し、そのデータを考古学独自の方法論や関連分野の学問方法を援用して、歴史を復元していく。しかし、資料の性格上個人名がわかることはまずない。文献史料等を援用して考古学的事実(観察した記録)をいかに説得力のある仮説に組み立てるかが勝負である。

さて、五十間長屋石垣の特徴を整理しておこう。内堀側は割石を積んだ「打ち込みハギ」、二の丸側は方形、多角形に加工した切石を積んだ「切り込みハギ」という方法で積まれている。これは菱櫓から橋爪門続櫓が寛永期に創建されてから、江戸時代を通して変わらない。この間、場所を変えながら4回の修復工事⁽¹⁾が行われたことが今回の調査で明らかとなった。宝暦十三年の2回目の修理は、五十間長屋の直線部分全体の範囲にわたる(前号参照)。今回の解体調査の成果のひとつは、同じ「打ち込みハギ」「切り込みハギ」でも各段階によって石積み技法や石の加工技法が異なることが明らかとなった点である。その要因には時代性と穴生の個性の両面があろう。細かい話は別にして仮称「ジンザ積み」の特徴をいくつかあげておきたい。

解体当初、このあたりの石垣は石材の控えが2尺前後と短いことや石垣の悪い積み方として知られる「谷積み」が目立つこと、現場でその都度石に再加工しながら積んでいることなどから、我々の技術的評価は低かった。しかし、5～6段はずしてからはやや様相が変わってきた。石材は3尺前後となり、とびとびに6尺の大石をはさんでいく⁽²⁾のである。下段に行くほど石材は大きめとなり布積みも揃ってきた。「半鶴半伐合積」と呼ばれるごとく割石の周囲をうまく切り合わせながら積んでいる。石垣石の後ろにはその安定のために丹念に大きな川原石(捨て石)を配している。続櫓との修築の境目、斜めの線に沿って6尺大石を連続的に並べているのもこの部分が一番弱点であるのを知ってのこ



第1図 五十間長屋 内堀側石垣立面図

とであろう。上部の石材が小型で再加工が多いのは、計画天端高に合わせるための調整だったのである。

切り込みハギでは斜めに切り合わせる「乱伐合積」(亀甲崩し積)を用い、切石の周囲を幅1~2cmで縁取りするような調整を行っている。これは切石製作上の過程で生じる技法痕跡であるが、デザインとしてそれを残した。宝暦以降一般化していく技法である。寛文年間の後藤権兵衛や文化年間の彦三郎が切石積みのすき間に盛んに用いたクサビやカスガイをジンザは使わなかった。錆びる金物を使う事への抵抗があったのかもしれない。かわって、彦三郎の専売特許のようにみていた「小からす石(黒くて硬い川原石をうすく割った詰め石)」をジンザはすでに使用している。

五十間長屋の調査が始まってすぐ、石垣台の内部が土で充填されているのが分かった。本来栗石であるはずなのに。本誌創刊号の「宝暦十三年定銀御達始且御押之留」にあるように、起工(欽始石にある6月25日)直後の8月に御年寄衆から工事費を半分に減らすように御達しがあった。きっとジンザが手抜き工事をしたのではなかったかと冷やかな見方をしていたのである。しかし、逆に言えばそれでも十分であったのだ。加賀藩の厳しい財政状況を知り、持ち前の工夫、創造力を最大限に発揮して復興事業をやり遂げたのである。

見通しは見事に裏切られた。おそるべしジンザ!!

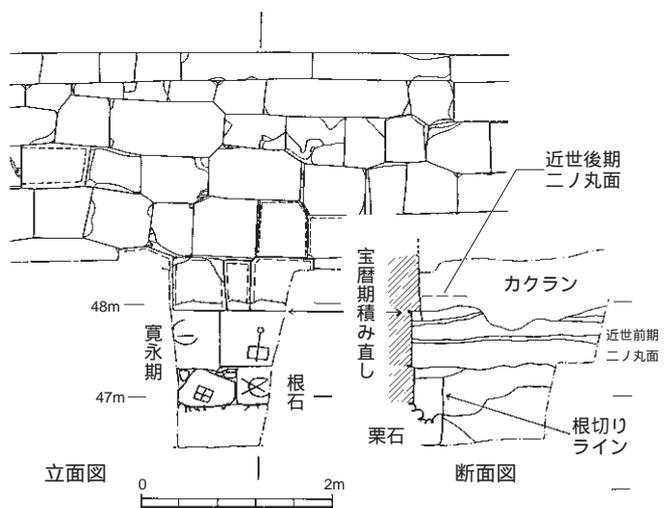
ここでは触れないが、当然「ヒコザ⁽⁹⁾積み」「ゴンベ工積み」もあるのである。石積み技法は担当穴生の個性もあるが、それとて時代性とは無関係ではあり得なかった。これらの関係を読み解くのが今後の課題であろう。

21 試掘での早とちり

実はジンザにもう一つ謝っておかなければならないことがある。五十間長屋台の二ノ丸側の根石を確認するために試掘をした際、天端石から5石目まで掘ったところ、そこで石垣石が途切れており、その下は礫混じりの土があるのみであった。通常、根石の下には加重に耐え石垣が安定するよう栗石を敷くなどするのではないが、高さ2m足らずの石垣とはいえ、こんな基礎構造の手抜きはないと思った。実際、寛永期ないしは寛文期とみられる菱櫓よりの根石のまわりはしっかりと栗石が詰め込まれている。

その後、解体調査の進行にともない基礎地盤の支持力を試験するためにこの付近で本格的な根石調査をする機会があった。試掘時の記憶が頭にあったせい、この時も5石目の下に土があるのを確認して根石と判断した。ジンザが宝暦の改修の時に法面安定のために二ノ丸側を大きく崩して施工したためと解釈した。穴生の掟では、折れるなどしないかぎり根石はできるだけ動かさないものである。掟破りのジンザか。

そして、この根石をはずす日が来た。「ハサミ」と呼ばれる道具で石を釣り上げ、周囲の目が根石の下の地盤に集まった。一同は「あっ!」と言ったきり言葉を失った。なんと下にはしっかりともう一段石垣石が



第2図 五十間長屋二ノ丸側根石確認調査

顔を覗かせている。5段目が10cmほど前へずれていたのである（第2図）。結局、石はさらにもう一段あり、「根切り溝」の中にしっかり栗石を詰め根石を置いていることが分かった。この部分は創建の寛永期のもので、ジンザも根石はさわらずに修築工事をしたことが判明したのである。

石が前へ飛び出していたのは、後世の孕みではなく、ジンザが修築した時には、五十間長屋台西辺の石積みラインが宝暦以前の不同沈下等によって凸凹が生じていたのである。ジンザはこれを一直線に直したため、あるところでは後ろへ引き、あるところでは前へ出して積むことになったのである。不幸にも試掘が、石が前へ飛び出した箇所にあたったことが判断ミスのはじまりであった。

22 人間ジンザ

ジンザの人柄を窺わせるいくつかのエピソードを紹介しておきたい。

（1）戸室石心得違い事件

ジンザは、「山から掘り出した石はそのまま積むと表面が軟らかくてよくない。風雨にさらして置いて石は硬くなるのだ」という。彦三郎は「それは心得違いで、そんなことを言っていたら新石はすべて役に立たないと言っているようなものだ」と非難する。

能登半島の海岸部には古墳時代の横穴式石室墳がある。砂岩質の岩層が海に転落したものを石室用材としているが、一定期間海にあったことを示す穿孔貝が付着した石材を優先的に用いている。崖に見える石は表面が軟らかくて使わないのである。これは岩石種と風化度の問題であろうが、両者の言っていることは両方ともあたっていると思う。ジンザの言っていることの方が職人的かもしれない。

（2）辰巳櫓台塀引きすえ事件

ジンザは宝暦十三年に五十間長屋台修築で石垣上にあった塀を一旦引き、石垣完成後、見事元に戻した。この技を発揮する時がまた巡ってきた。時は安永元年(1772)、本丸東南の辰巳櫓の石垣台修理にあたり、ジンザが例によって塀を引き除けた。すばやく石垣を完成させ、塀を引きすえる時が来た。ところが今度はうまくいかなかった。設計と寸法が違ってしまうと、塀を乗せようとしたが長短ができて引きすえられなくなった。さあどうするか。こんな場合、本来は石垣方が再度積み直すところであるが、この時は作事方の棟梁が出てきて塀を直すことで事なきを得た。この櫓台修理は甚だ不出来で、いわゆる剣先石垣になってしまった。櫓台の場合は特に縄張りをしっかりと、勾配等の設計図も作ってやるべきなのに、ジンザにはそんな気配もなかった。現場担当の御扶持人石切浅野四郎兵衛はこの一件を苦に病死してしまった。

石垣の上の塀を引くのは職制上、本来は作事方の仕事であった。宝暦十三年の普請を契機にどうも石垣方に移っていったようである。また、工事現場で仮設する作業用の「棧橋」「足代」「仮小屋」「仮垣」も本来は作事方の担当であったが、宝暦大火後、石垣方に移っていった。ジンザの積極性が作事所の仕事を取るようになったのか、別の力関係で石垣方がやらざるを得なくなったのかどちらが実態だろうか。安永六年、普請奉行が御年寄にあてた文書の中で、安永元年の辰巳櫓の際は「格別の趣をもって穴生の担当とした」とあるので、前者の可能性が強い。なお、安永六年の辰巳櫓下石垣普請の際には作事所が材木入用の間にいと簡単に引き除けたとあるので、一気に石垣方に転換したわけでもなさそうである。

（3）辰巳用水御居間先事件

明和年間(1764～1771)辰巳用水を二ノ丸御殿の御居間先にあげる工事が甚左衛門に仰せつれられた。ジンザは工夫してやったが巧くいかなかった。結局、作事所に引き渡すことになり、残らず取り壊し、作り直して水上がりがよくなった。この水上げは非常に距離が長く、作事所がやっても難しか

ったという。御扶持人石切等はひどいことであったとぼやいていた。彦三郎は言う。「他の役所の仕事でも仰せ渡されれば是非もなく勤めるべきであるが、こちらから進んで申し出るのはよくない。」

ジンザが出しゃばったのか、コネを使ったのかは分からないが、他の役所の仕事までやるような活躍ぶりを窺わせている。

(4) 新坂柵門事件

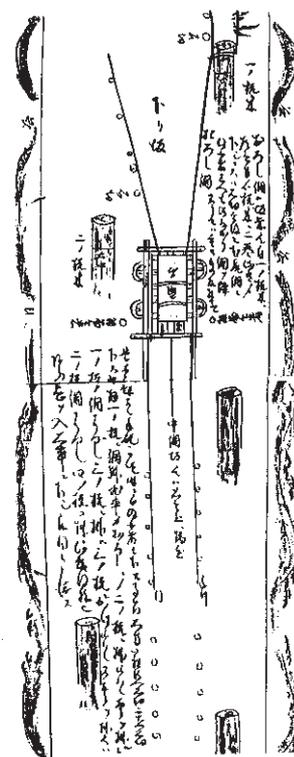
ジンザが指揮した安永年間の石引きは地車に5石(数トン)も乗せていた。人足は余りのつらさに日雇賃も取らずに帰るものもいたくらいである。その上、夜10時を過ぎても翌朝に繰り越さず、石川橋の先にあった新坂柵門を入ろうとしたが、奉行衆に差し止められた。また、炎天下の石引きでも根気強く引き、夜8時までやって翌朝一番にその場所に現れる。ジンザの仕事熱心さ、強引さがうかがえる。石垣御用に身骨を損じたジンザの仕事ぶりである。

(5) 大地車ひっくり返し事件

安永八年(1779) 戸室山から本丸シノギ角用の大角石(6トン弱ぐらい)を引くのにジンザは大型地車を使ったが、車運びが悪く城内まで10日もかかってしまった。途中、浅野川にかかる田上橋の牛坂(野坂)付近へ来たところ、町中より手伝いの人がたくさん出て余りの大人数で引いたため田んぼの中へ角石ごとひっくり返してしまった。小地車は便利な道具であるが、大地車は慣れないと使うのが難しいのに、と彦三郎は言う。ようやく城にたどり着いた日、ジンザは祝いにみんなを家へ招待したが誰一人来なかった。

彦三郎にとっては痛快なできごとであった。時に彦三郎和陸24歳。前年、後藤家に婿養子として入り、石垣普請並びに戸室山石切出等見習になったばかり。養父用助に晴れがましい仕事がない中、彦三郎はどんな思いでジンザの活躍ぶりを見聞きしていたのであろうか。

さらに彦三郎は言う。甚左衛門は石垣を築くことは知らないが、ほかのことは「きつい者」で、36貫(135kg)の力がある。世に名を知らない者はいない。御扶持人石切からのたたきあげであるジンザが屈強の体格の持ち主であったことを窺わせている。炎天下や夜中までの石引き、形式にとられない仕事ぶり、彦三郎がジンザを称して語った言葉の数々「発明者」「巧者」「普者」「器量の者」「元氣者」「根気強い」「只者でない」「夫図り(人夫の見積)が非道」「虚を実に仕成す」「先ず奉行と取組」。彦三郎が残してくれた記録を通して、人間 - 正木甚左衛門が浮かび上がってくる。考古学はモノを通して歴史を復元する学問であるが、こんな人間味のある味付けがあるとまた歴史は楽しい。



第3図 坂道での地車のおろし方
(『戸室石引道』より転載)

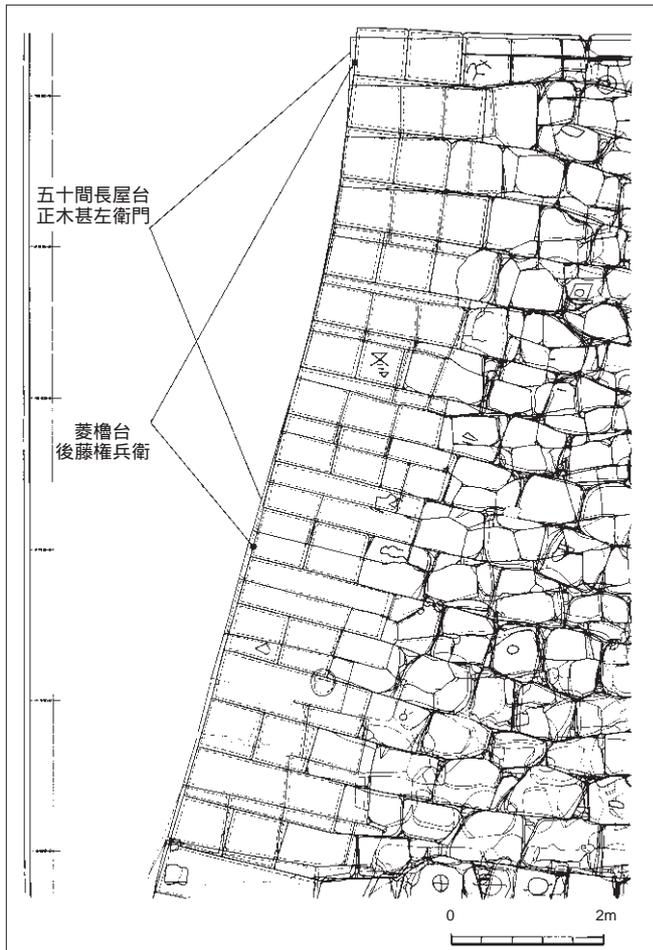
23 中締め

ジンザについて語るとどこまでも筆が走る。不思議な魅力を持った人物である。彼が生きた江戸中期がどんな時代かとても興味が湧いてくる。一世を風靡した正木甚左衛門は、天明五年(1785) 息子吉左衛門の不始末による正木家改易とともにやがて人の脳裏から忘却のかなたへと去っていく。人呼んでジンザ。時代を駆け抜けた忘れ得ぬ加賀藩穴生のひとりである。

本号を含めて3回、金沢城跡の発掘調査現場の様子を伝えてきた。「事件は現場で起きているんだ!!」の名セリフを引くまでもなく現場は実に生き生きとしている。その様を「情報」として発信するのを目的に「ふざけたことを」の誹りを覚悟で連載させてもらった。金沢城跡二ノ丸五十間長屋の障はまた年が明けたばかりである。1年余りも時差ができてしまったが、これから起こる事件はますます奇々怪々、乞うお楽しみに。

注

- (1) 創建寛永八年(1631)頃、寛文八年(1668)菱櫓修築、宝暦十三年(1763)五十間長屋修築、天明八年(1788)続櫓修築、文化五年(1808)続櫓修築。このうち、天明八年の修築以外は現地での範囲等が確認できた。(本書30~33頁参照)
 - (2) 平成8年に文化財課富田和気夫氏がこのことを最初に指摘した。石垣は解体しなくても観察できる情報が多い。本丸下蓮池堀の石垣にも長手の大石をとびとびに配する技法が確認できる。
 - (3) 文化五年の橋爪門続櫓修築は後藤彦三郎と嫡男小十郎(徹丞)の父子が担当した。
- お詫び 前号56頁で新丸に普請会所があったとしたのは間違いで、古くは蓮池の続きにあり、後に大手の黒梅屋橋の橋爪西方に移転した。お詫びして訂正する。



第4図 菱櫓台と五十間長屋台石垣角部の勾配合成図



写真1 朱書きが発見されたかつら石の裏面



写真2 ジンザの石積み技法を調べる

クサビ・カスガイの金属学的調査

(株)九州テクノリサーチ
営業技術部・TACセンター

概要

金沢城跡二ノ丸菱櫓石垣の修築に際して、使用された17世紀代のクサビ・カスガイの調査を行って、次の点が明らかになった。

1 両鉄製品は、日本古来のたたら製鉄で製造された鉄素材を原料とした鍛造品であった。製鉄原料は、鉄中の非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混り物）からみて砂鉄が推定された。

2 クサビ原料の鉄の製造は、江戸時代の完成された、たたら製鉄の産物であり、鉄中の化学成分に砂鉄特有成分のチタン（Ti）やバナジウム（V）を微量含有すると共に、非金属介在物に砂鉄由来のルチル（Rutile: TiO_2 ）やペロブスカイト（Perovskite: CaTiO_3 :融点1,971℃）系など高温操業での晶出物が検出される。

一方、炭素含有量は偏析をもち、0.7% C前後の共析組成の層状領域（硬度250Hv前後）、0.2～0.3% Cのベイナイト（Bainite: フェライトと炭化物の混合物）組織領域（硬度160Hv前後）、更には0.005% Cのフェライト（Ferrite: 鉄や純鉄の金相学上の呼称）組織単相領域（硬度100Hv前後）が、境界不鮮明に鍛接されている。

なお、鍛造仕上げは雑であり、内部に不完全鍛接部などの欠陥部をもつが、これからの亀裂などが生じた痕跡はなく、使用上材質的に強度的な要求はあまりなかったと思われる。

3 カスガイは、廃鉄器の再利用であって、鉄中の非金属介在物は、酸化第1鉄（Wüstite: FeO ）と珪酸塩夾雑物（Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）が晶出し、ヴスタイト中にチタン（Ti）を僅かに固溶し、炭素量は鍛冶加工中に脱炭されて0.005% Cフェライト単相（硬度100Hv前後）の極低碳素鋼となる。なお、爪先の外表面に一部パーライト（Pearlite: フェライトとセメントライトが交互に重なり合って構成された層状組織）組織領域がみられたが、意識的な爪の強度の確保でなくて、廃鉄器（古鉄）の炭素偏析に起因するのであろう。また、胴部に比較して屈曲部や爪先は細粒のフェライトからなるのは鍛造加工度が大きいことを示す、フェライト単相の極低碳素鋼は低強度であるが、爪部に塑性変形の様子はなく、該品もさして強度を要求されない使い方がなされている。

1. いきさつ

金沢城跡は、石川県金沢市丸の内に所在する安土桃山時代から江戸時代にかけての城跡である。今回、石川県が江戸時代後期の建物復元を決定し、これに伴って石垣の解体修理が行われている。この際に、菱櫓の隅角部の算木積み等にクサビと、カスガイが使用されているのが発見された。この両鉄器の材質調査を行い、復元素材の指針を得るための金属学的調査の運びとなった。

2. 調査方法

(1) 供試材

Table. 1 に示す。クサビ、カスガイは各1点ずつである。

(2) 調査項目

肉眼観察

マクロ組織

クサビは長軸方向断面の全長、カスガイは片爪側を基部側からL字状に切出し、等倍で側面研磨面を撮影している。顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって観察できる利点があり、鍛打時の鍛接線やキズ、また腐食後は炭素量の偏析などが明瞭に現われる。

顕微鏡組織

マクロ観察と同一面をエメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後に被研面をダイヤモンドの3 μ mと1 μ mで仕上げ、光学顕微鏡観察を行った。なお組織を現わすための腐食液はナイトル(5%硝酸液)を使っている。

ビッカース断面硬度

金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

CMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査

EPMA(Electron Probe Micro Analyzer)にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名、X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試験面(顕微鏡試料、ただし真空室に入れるので小切りとする)に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析のできない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

化学組成分析

炭素(C)、硫黄(S): 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。他はICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法: 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

(1) クサビ

肉眼観察: 平面が方形に近く、断面がV字形で先端が細まる鉄矢である。一端が広く開いた小口は、鍛接キズが2~3mmの窪みでもって溝状に認められる。全面赤褐色の鉄錆に覆われるが鉄の遺存度は極めて良好であった。マクロ組織や検鏡は、長軸方向断面を研磨している。

マクロ組織: Photo. 2の上段に示す。炭素含有量が0.7%前後の共析鋼組成を有する鉄塊から、0.005%の極低碳素鋼組成の鉄塊を集めて熔融鍛接し、規則性をもつ折返し曲げ鍛接線を残す加工は施されていない。また、内部には不完全鍛接箇所を幾つも残し、強度重視の仕上げは認められなかった。

顕微鏡組織: Photo. 2に示す。クサビ断面は0.7%程度の炭素を含有する共析組成を有する層状領域(Hv250前後; 硬度分布図参照)と、ほぼ0.005%炭素を含有するフェライト組織単相からなる領域(Hv100前後)と、0.2%~0.3%程度の炭素を含有するベイナイト組織領域(Hv160前後)からなり、これらの組織体は境界部が不鮮明に隣接している。

このような組織の特徴から、同クサビは炭素含有量の異なる素材を合わせ鍛えしたものである。

これらの組織体は、炭素含有量の高い領域が一方の表面に位置する傾向があるものの、他方の表面は炭素が低い相からなり、必ずしも戦略的に用途に応じた合わせ鍛えしたとは思われない。

0.2%~0.3%程度の炭素を含有する領域がベイニティックな組織を形成していることから、同クサビは鍛造による成形後放冷されたものと思われる。

石垣組石支え用のクサビとしては、石組み間にクサビを打ち込んだ際に、パーライト組織側での強度維持と、フェライト組織側での石組み間隙適合性が期待できる。しかし、供試クサビ表面は厚いスケール層で覆われており鮮明ではないが、表面観察からは塑性変形を受けた形跡は見られず、強度はさほど要求されないものと思われる。また、クサビ断面内には「不完全鍛接」状の欠陥が観察されるが、この部分から亀裂が生成した様子は見られないことから、クサビとしての強度的な要求は高くないものと思われる。

ビッカース断面硬度：Fig. 1 に硬度測定結果を示す。硬度値は、炭素含有量と相関をもち、0.7%共析組成では250Hv前後で、0.2~0.3%ベイナイト組織域では160Hv前後、更に0.005%極低炭素域では100Hv前後と漸次軟化してゆく。組織に見合った傾向である。

CMA調査：鉄中の非金属介在物の調査について、2視野行った。まず、Photo. 3のCOMP（反射電子像）にみられる3種類の鉱物相の高速定性分析結果がFig. 2である。A-Rankで検出される元素は、鉄（Fe）と砂鉄特有元素のチタン（Ti）、ジルコニウム（Zr）、ガラス質成分（Si + Al + Ca + Mg + Na + K）、燐（P）、酸素（O）などである。この高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果がPhoto. 3である。特性X線像は、分析元素の存在を白色輝点の集中度で知ることができる。COMPの中の11の番号のついた淡茶褐色長方形結晶は、白色輝点がチタン（Ti）に強く、アルミニウム（Al）に弱く集中する。また、定量分析値は、63.9%TiO₂ - 10.6%Al₂O₃組成が得られて、当介在物の鉱物組成はアルミニウム・チタナイト（Aluminum Titanate (Al₂O₃・TiO₂)) もしくはルチル（Rutile: TiO₂）系が同定される。これには、砂鉄特有元素のジルコニウムも1.3%ZrO₂で固溶される。

次にCOMPの13の番号のついた淡灰白色粒状結晶は、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）に白色輝点が集中し、定量分析値は、45.5%TiO₂ - 26.4%CaO - 10.2%Al₂O₃組成であり、鉱物組成はペロブスカイト（Perovskite: CaO・TiO₂）とアルミニウム・チタナイトの混合組成が同定される。ペロブスカイトは、1,971 の溶融点をもつ高温析出物であり、たたら操業温度の高温化を裏付けることになる。過去の調査でもあまり類例のなかった介在物の発見である。また、カルシウムは、鉄と滓の分離を促進する媒溶剤であり、貝殻や石灰石などに含有される成分で、炉壁粘土由来の傾向ではなからう。たたら操業での媒溶剤の添加は不鮮明であるが、今回検出の鉱物組成の同定は、一考を要する問題となった。

COMPの15の番号は、暗黒色ガラス質スラグ部分で、ガラス質成分に白色輝点が集中し、かつ、チタン（Ti）も固溶されて、45.2%TiO₂ - 22.6%Al₂O₃ - 16.4%SiO₂ - 3.0%CaO - 7.9%MgO - 3.0%K₂O - 1.1%Na₂O組成が得られた。鉄中の非金属介在物は量的には多くはないが、存在するものの中のチタン（Ti）濃度は頗る高いものであった。

残るもう1視野の介在物の分析結果がFig. 3とPhoto. 4である。こちらでも高チタン（Ti）濃度の介在物が検出されて、鉱物組成の一部に差異がある。COMPの7の番号のつく不定形介在物は、結晶外縁部に白色酸化層をもち、白色輝点がチタン（Ti）に強く、マグネシウム（Mg）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）に弱く集中する。定量分析値は、82.3%TiO₂ - 8.6%Al₂O₃ - 3.6%FeO組成で、ルチル（TiO₂）が同定される。また、COMPの8の番号は、暗黒色ガラス質スラグ部分で、47.1%SiO₂ - 21.2%Al₂O₃ - 10.6%CaO - 2.4%MgO - 6.9%K₂O - 1.2%Na₂O組成となった。鉱物相はガラス質であるが強い主要鉱物相を挙げると、ゲーレナイト（Gehlenite: Ca₂Al₂SiO₇）あたりが同定されよう。

また、COMPの10の番号は、淡灰白色粒状結晶で、白色輝点が鉄（Fe）、カルシウム（Ca）、珪素

(Si)、アルミニウム (Al) などに集中し、定量分析値は30.0%TiO₂ - 22.3%CaO - 21.1%SiO₂ - 11.1%Al₂O₃組成が得られた。鉱物組織は、ペロブスカイト (CaO・TiO₂) とムライト (Mullite: 3Al₂O₃・2SiO₂) の混合組成あたりに同定される。いずれにしても、チタン (Ti) とカルシウム (Ca) 濃度の高い介在物であった。

化学組成分析：Table. 2 に示す。炭素 (C) 含有量が0.17%と低値で現われているのは、或る局部の平均的な数字であって、顕微鏡組織の観察から、0.7～0.005%の範囲の中での集約値といえる。鉄中の不純物は少なく、珪素 (Si) 0.01%、マンガン (Mn) 0.01%以下、燐 (P) は若干含まれるものの0.034%、硫黄 (S) 0.002%、銅 (Cu) 0.011%であった。砂鉄特有成分のチタン (Ti) 0.013%、バナジウム (V) 0.006%は僅かにあって、非金属介在物由来の含有量である。随伴微量元素のニッケル (Ni) 0.005%、クロム (Cr) 0.003%、ジルコニウム (Zr) 0.001%以下、砒素 (As) 0.004%であった。高純度の鉄であり、砂鉄原料鉄の傾向は窺えた。

(2) カスガイ

肉眼観察：基部断面が2.1×1.5cmで全長23.3cmを測り、両端を直角に曲げ、その尖端をとがらせた大型のカスガイである。全面が赤錆に覆われるが金属鉄の残存は良好である。

マクロ組織：Photo. 5 の最上段に示す。カスガイは、棒状素材を用いて断面を方形に近い長方形に鍛造し、両端をとがらせて直角に曲げているが、この時に折返し曲げた鍛接線が応力を受けて数条以上が口を開いている。これも一種の鍛接不良であろう。

顕微鏡組織：カスガイは、ほぼ0.005%の炭素を含有するフェライト単相 (Hv100；硬度分布図参照) であり、極めて炭素の低い鋼によって成形されている。

爪先の外表面の一部にパーライト組織領域 (Hv215) が不自然に存在しているが、意識的に爪の強度を確保するために浸炭などの熱処理を施したとは思われない。

胴部と比較して、屈曲部および爪先部は細粒のフェライトからなり、鍛造加工量が大きいことを示している。

強度的には、カスガイとして機能するとは思われないほど低強度であるが、爪部分が塑性変形した様子は見られないことから、さして強度を要求されない使い方がなされていたものと思われる。

ピッカース断面硬度：Fig. 4 に示す。カスガイの基地は、フェライト単相で、炭素固溶量が非常に少なく (0.005%C) 軟質で硬度値は100Hv前後である。ただし、爪先側の外表面にパーライト組織領域があり、ここだけは215Hvと硬質である。この硬質部は意識的に強度向上のための浸炭を施したものでなく、異材鍛接による組織変動による異常値と考えられる。

CMA調査：非金属介在物が単発粒状で散在する個所と、酸化第1鉄 (FeO) と珪酸塩夾雑物 (2FeO・SiO₂) の共晶の個所があるので両者の調査を行っている。Photo. 6 のCOMP (反射電子像) に示す粒状介在物の高速定性分析結果をFig. 4 に示す。A-Rankで検出された元素は、鉄 (Fe) と、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、燐 (P)、硫黄 (S)、酸素 (O) である。

Photo. 6 のCOMPに3、5、6と番号をつけた白色相部分は、鉄 (Fe) にのみ白色輝点が集中し、定量分析値が89.7～100%組成となるので、鉱物組成はヴスタイト (FeO) が同定される。また、COMPの4の番号は、黒色基地に淡灰色微細粒の晶出する個所で、白色輝点は鉄 (Fe)、珪素 (Si)、燐 (P) に集中し、定量分析値は、68.7%FeO - 19.2%SiO₂ - 9.1%P₂O₅組成が得られた。鉱物組成は、ファイヤライト (2FeO・SiO₂) と磷化鉄 (Iron Phosphat: Fe₂O₃・FePO₄ or Fe₂O₃・P₂O₅) の混合組成が想定される。

次にPhoto. 7 のCOMPにみられる白色粒状ヴスタイトと、淡灰色繊維状結晶のファイヤライトの高

速定性分析結果をFig. 5 に示す。A-Rankでの検出元素は、鉄 (Fe) とガラス質成分 (Si + Al + Ca + Mg + K + Na)、燐 (P)、硫黄 (S)、酸素 (O) などである。また、B-Rankに砂鉄特有元素のチタン (Ti) が認められた。

COMPに1の番号をつけた淡灰色繊維状結晶は、白色輝点が鉄 (Fe) と珪素 (Si)、酸素 (O) に集中し、定量分析値は55.2%FeO - 31.1%SiO₂組成が得られてファイヤライト (2FeO · SiO₂) が同定される。更に、COMPの2の番号は、鉄 (Fe) と酸素 (O) に白色輝点が集中し、鉱物組成にヴスタイト (FeO) が判定された。このヴスタイト粒には、チタン (Ti) に弱く白色輝点が集中し、0.5% TiO₂が固溶されるので、砂鉄系鉄素材の履歴と読みとれる。

このPhoto. 7のCOMPに示したファイヤライトとヴスタイトの大型共晶介在物は、鍛打作業の繰返し時の鉄肌に生じたものの捲き込みがあり、廃鉄器再生により派生した事が窺われる。

化学組成分析：Table. 2 に示す。鍛打が繰返し施され、夾雑物が絞り出されているので高純度の組成となっている。局部的には共析鋼 (0.77%C 215Hv個所) 部分も蔵するが、平均的には純鉄同様の0.004%炭素 (C) 域で占められ、珪素 (Si) 0.01%以下、マンガン (Mn) 0.01以下、燐 (P) 0.041%、硫黄 (S) 0.004%、銅 (Cu) 0.007%となる。砂鉄特有成分もクサビと比較すると減少し、チタン (Ti) 0.001%、バナジウム (V) 0.000%となる。しかし、随伴微量元素のニッケル (Ni) 0.008%、クロム (Cr) 0.003%、ジルコニウム (Zr) 0.000%、砒素 (As) 0.003%などはクサビと大差ない数値であった。

4.まとめ

金沢城跡二ノ丸菱櫓石垣に使用されていた17世紀代のクサビとカスガイは、たたら製鉄で製造された砂鉄系鉄素材の充当が推定された。鉄の材質をみると、クサビは精錬鍛冶炉から出てきた不純物除去の処女鉄で、炭素量は共析鋼 (0.77%C) 領域から純鉄 (0.005%C) クラスの鉄塊を鍛打成形しており、カスガイは廃鉄器 (古釘など) 再生で、脱炭状態の極低碳素鋼の折返し曲げ鍛接での成形となる。

この両鉄製品の鍛造仕上げは、鍛接不良部分を残すが、これを基点にした亀裂の発生や、極低碳素鋼部分の炭素量不足からの塑性変形を受けた形跡はなく、強度面を含めて何ら不都合面は認められず、既存素材で鉄器として機能するものと考えられる。

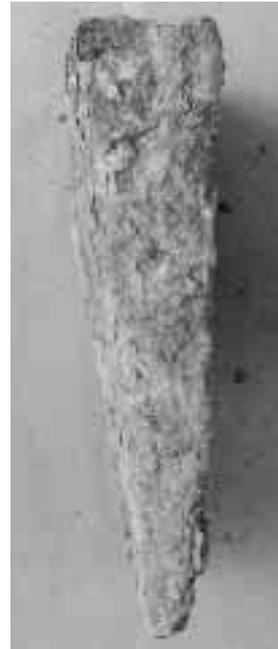
一方、金沢城跡石川橋 (白鳥堀調査区) では、16世紀代の鍛冶遺構 (SX03) や、鑄造溶解遺構 (SX01) など検出されて、これに関連する遺物が出土して、当時の金属器製作の実態の一部も明らかになっている。この時に出土した遺物と、今回調査のクサビ・カスガイは、技術の系譜として両者は連動するものといえる。

最後に、石垣復元に際しては、クサビ・カスガイを現代製鉄での鉄素材で製作した場合、耐食性の検討が必要となろう。ここに幾つかの候補鋼材を挙げて、その耐食性データを参考資料として添付しておく。(编者注：本文では割愛した)

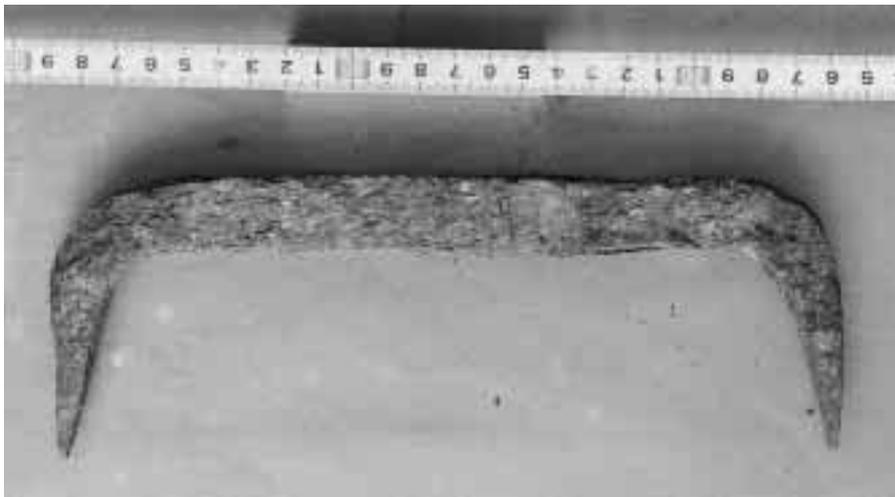
注 大澤正己「金沢城跡石川橋出土鑄造・鍛冶関連遺物の金属学的調査」『金沢城跡石川門前土橋 (通称石川橋) 発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター 1998

5.おわりに

本稿は、(株)九州テクノリサーチ・営業技術部・TACセンターの協力のもとにまとまった。試料調整とマクロ組織・ミクロ組織の撮影は浜口政彦氏、顕微鏡組織のコメントは影山英明氏、データ整理は鈴木瑞穂氏、全体の文章化は大澤正己が執筆している。 (1999.7.5)

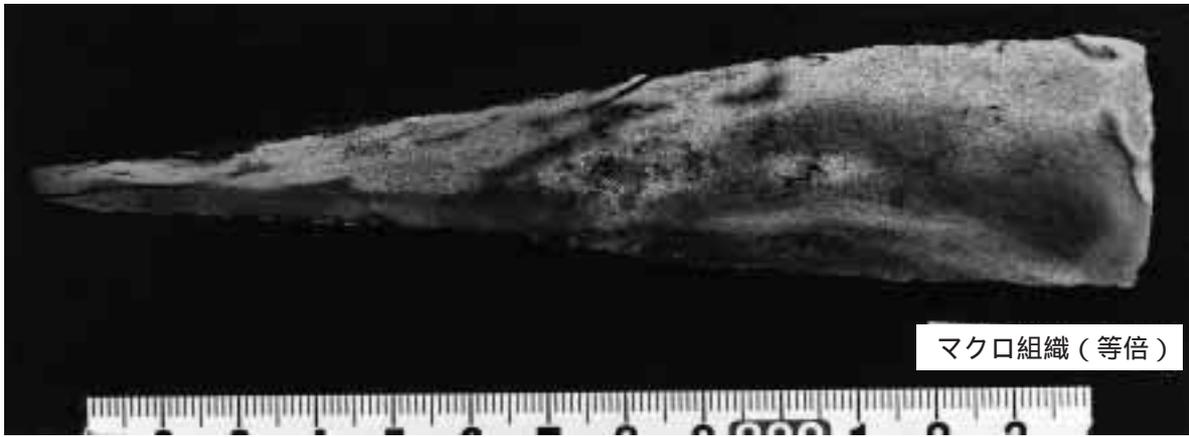


クサビの外観



カスガイの外観

Photo. 1 供試材の外観写真



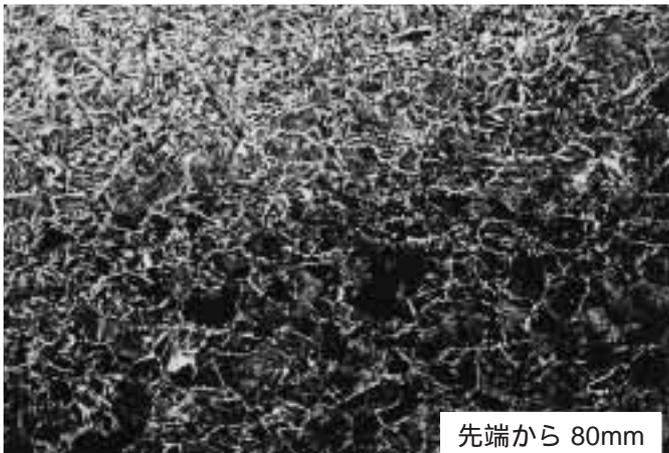
マクロ組織 (等倍)



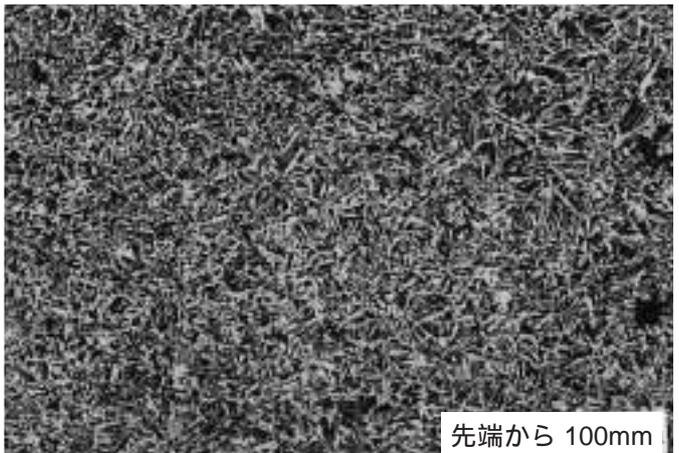
先端から 30mm



先端から 50mm



先端から 80mm



先端から 100mm

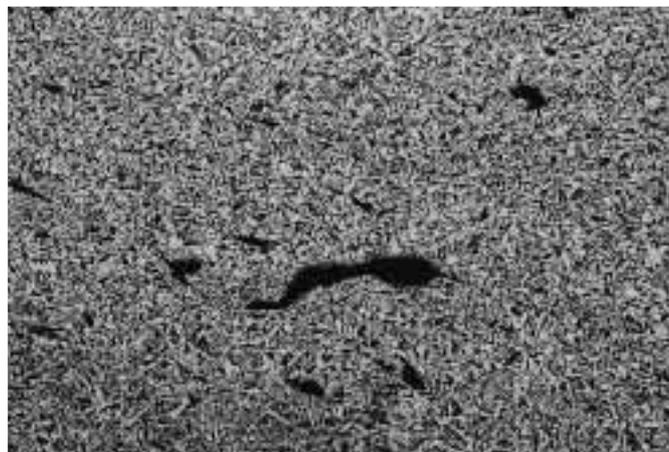


Photo. 1
クサビのマクロ
・ミクロ組織

(× 25)

(クサビの硬度測定箇所)

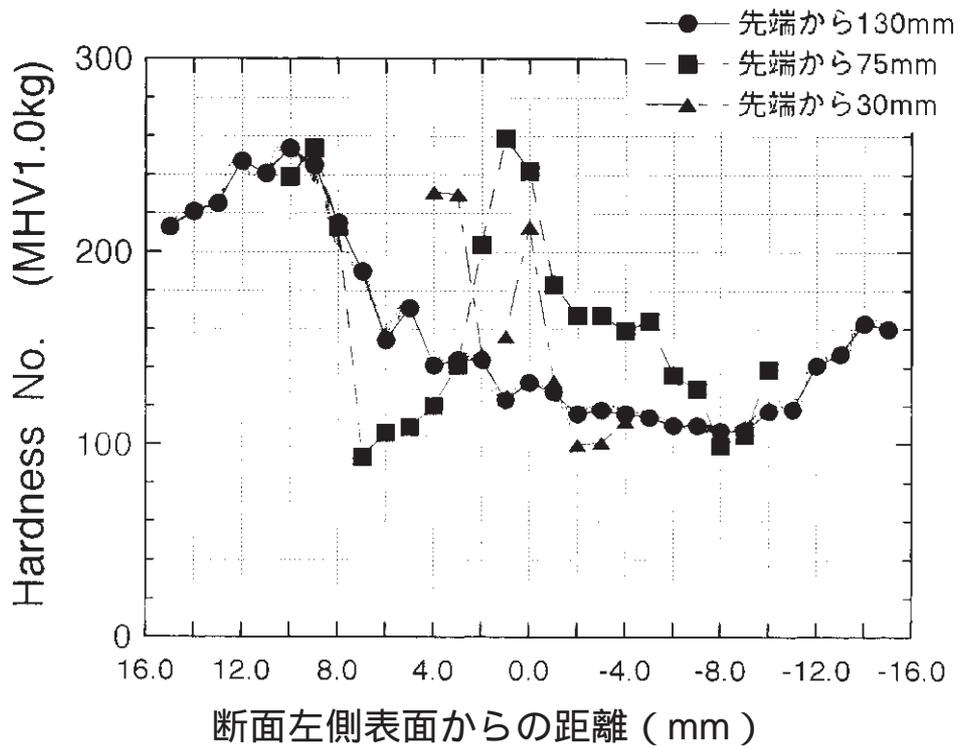


Fig. 1 クサビの厚み方向 (横断面) の硬度測定結果

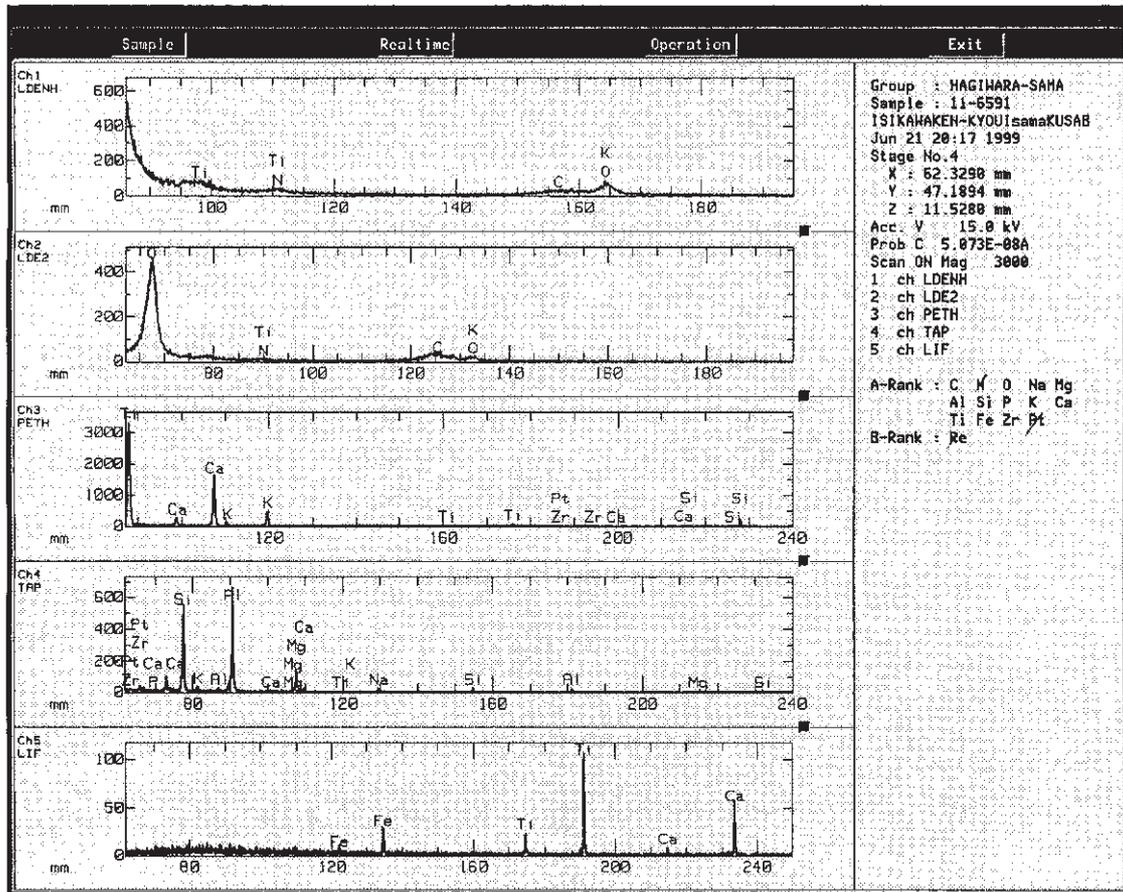


Fig. 2 クサビの鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果(1)(photo.3 に対応)

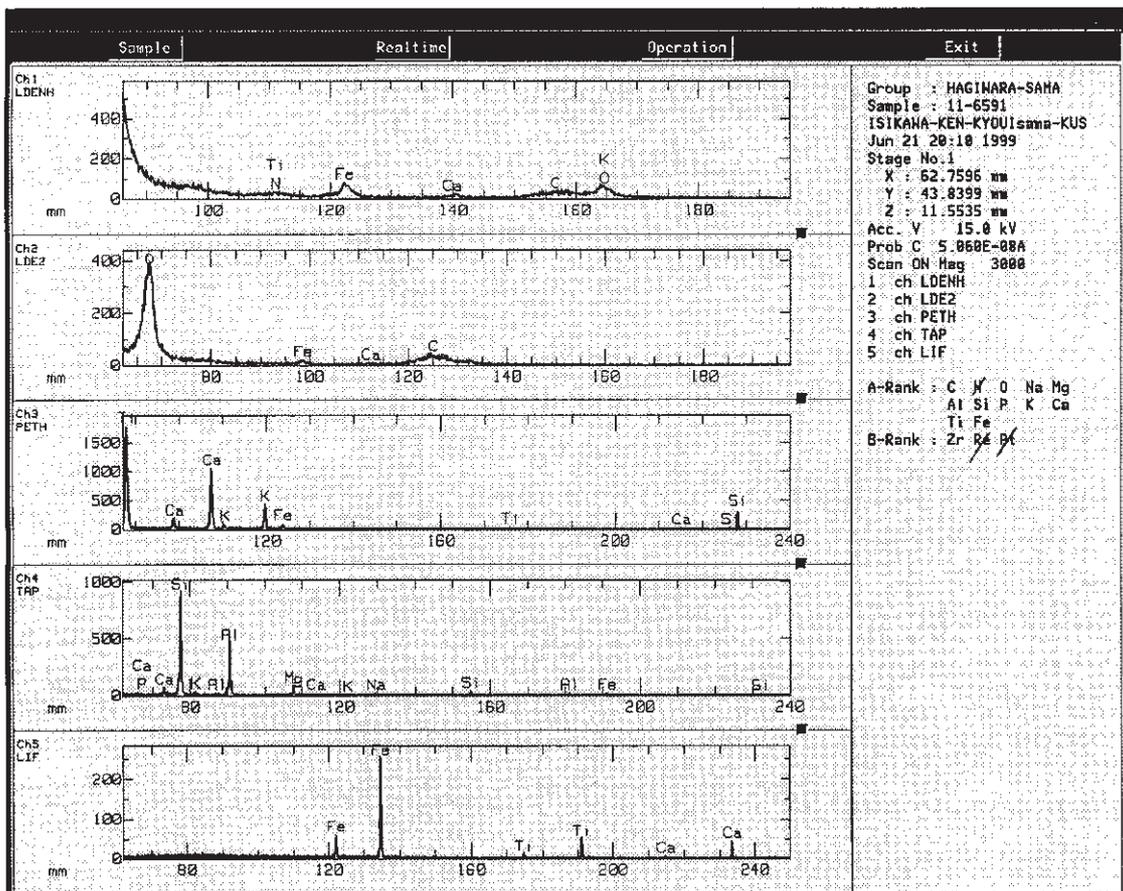


Fig. 3 クサビの鉄中非金属介在物のコンピュータプログラムによる高速定性分析結果(2)(photo.4 に対応)

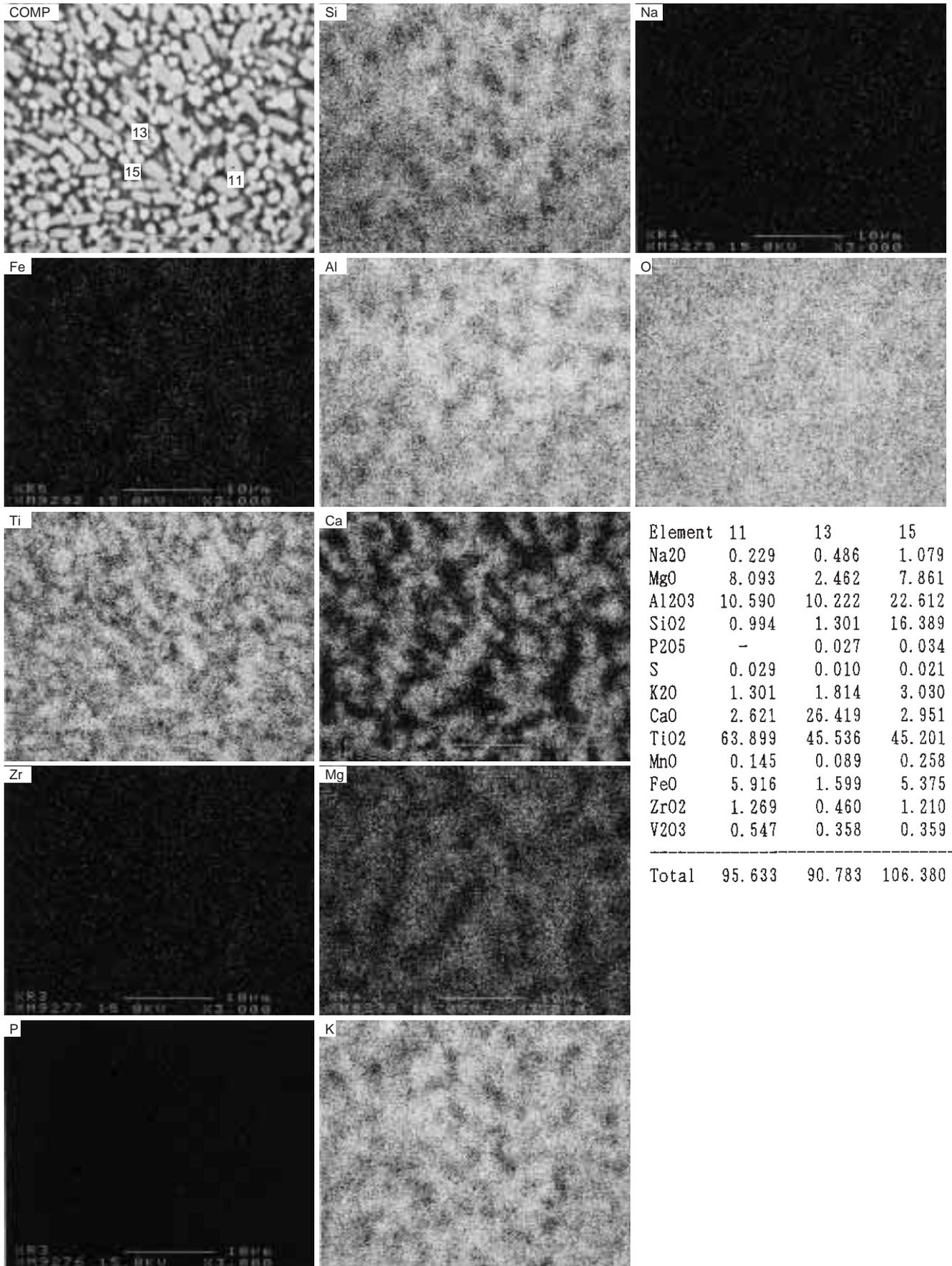


Photo.3 クサビの鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値（1）

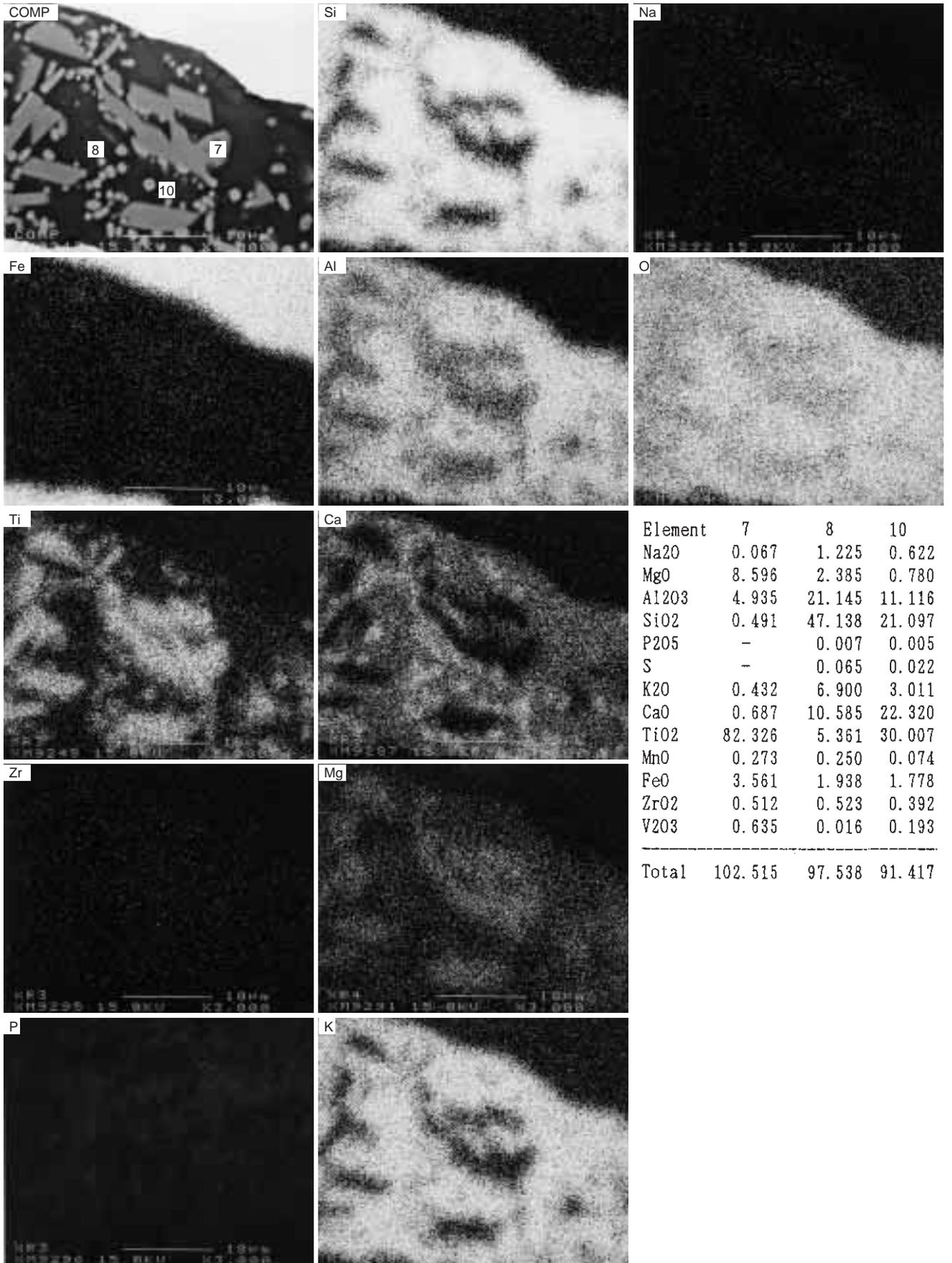


Photo.4 クサビの鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値(2)

(× 25)

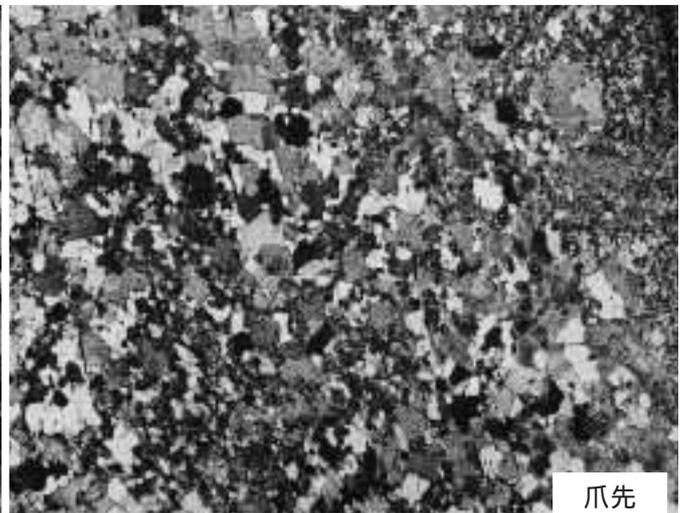
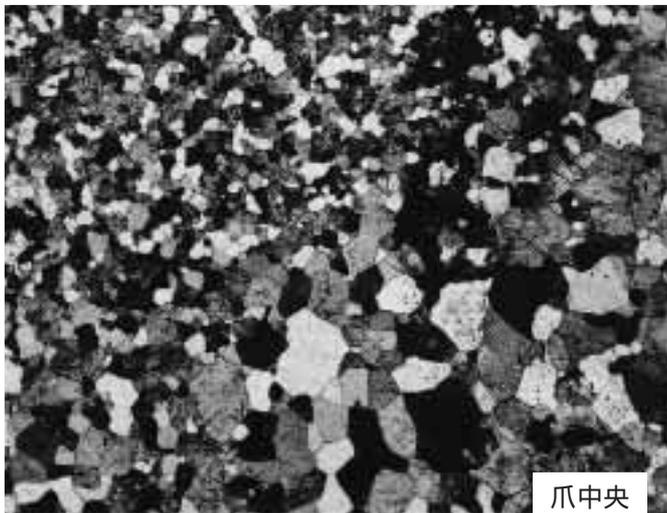
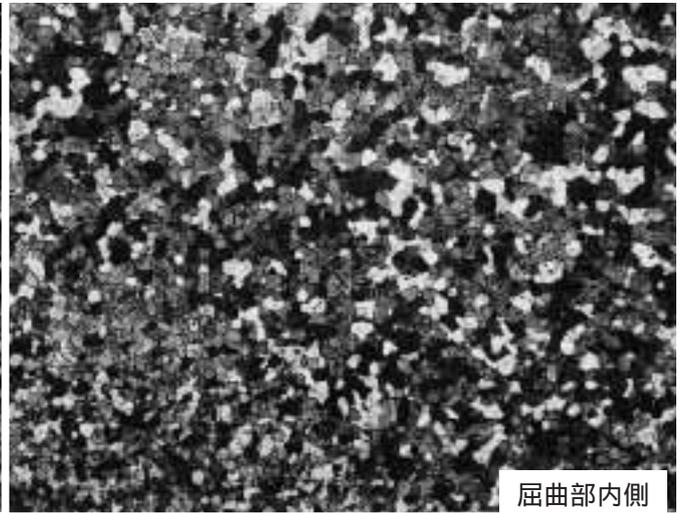
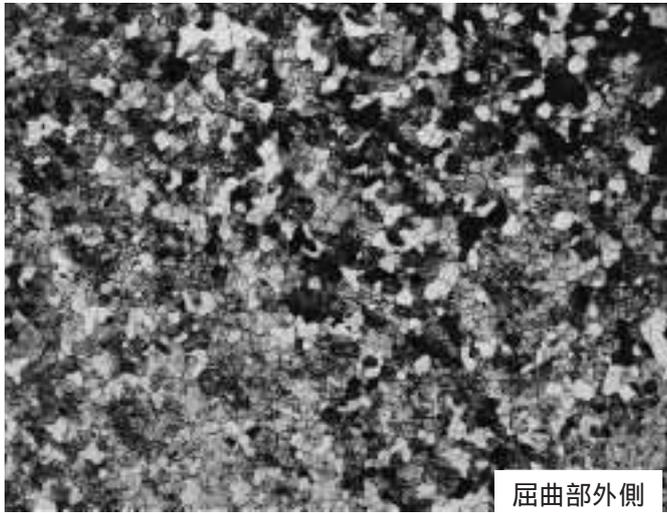
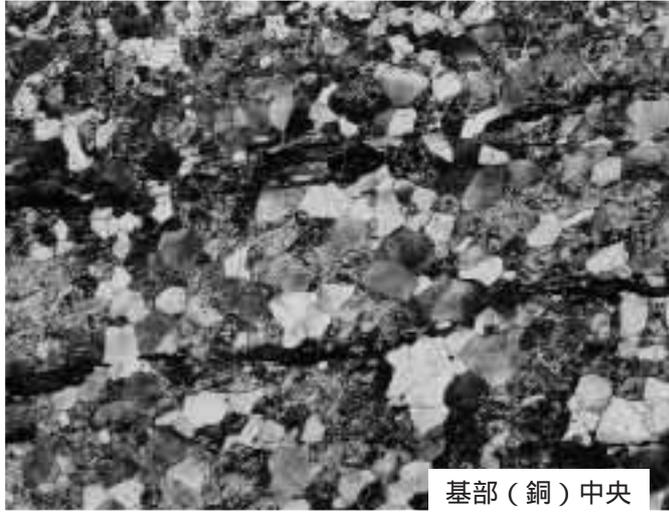
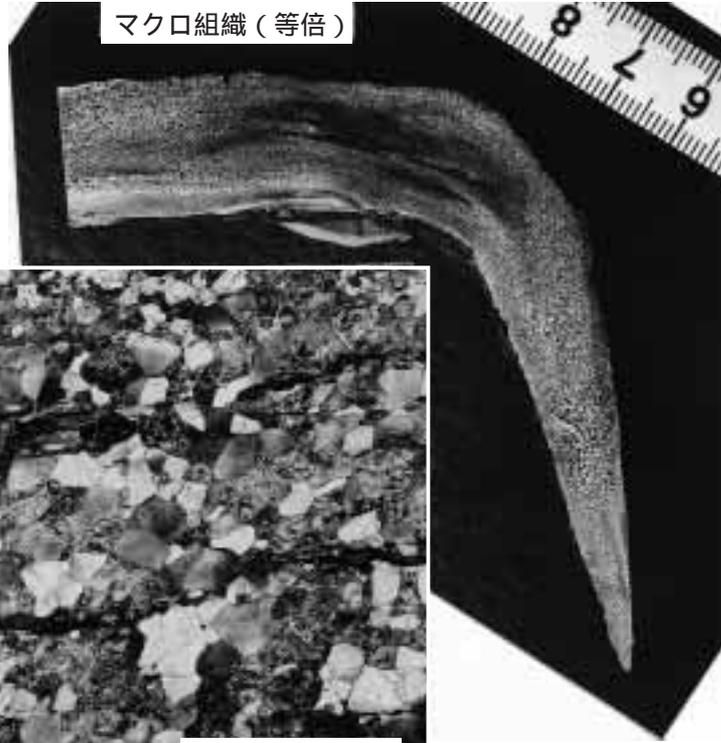


Photo. 5 カスガイのマクロ・ミクロ組織

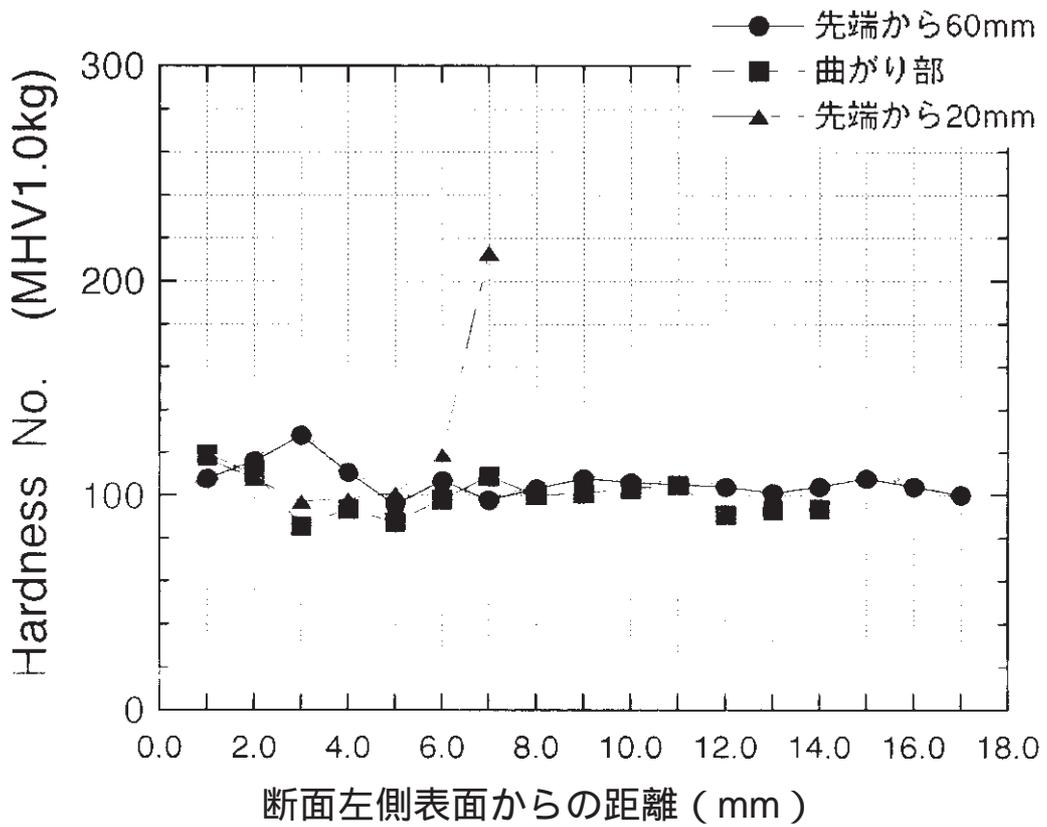
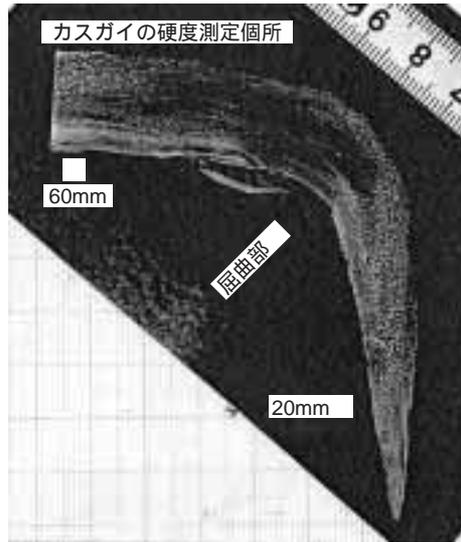


Fig.4 カスガイの厚み方向（横断面）の硬度測定結果

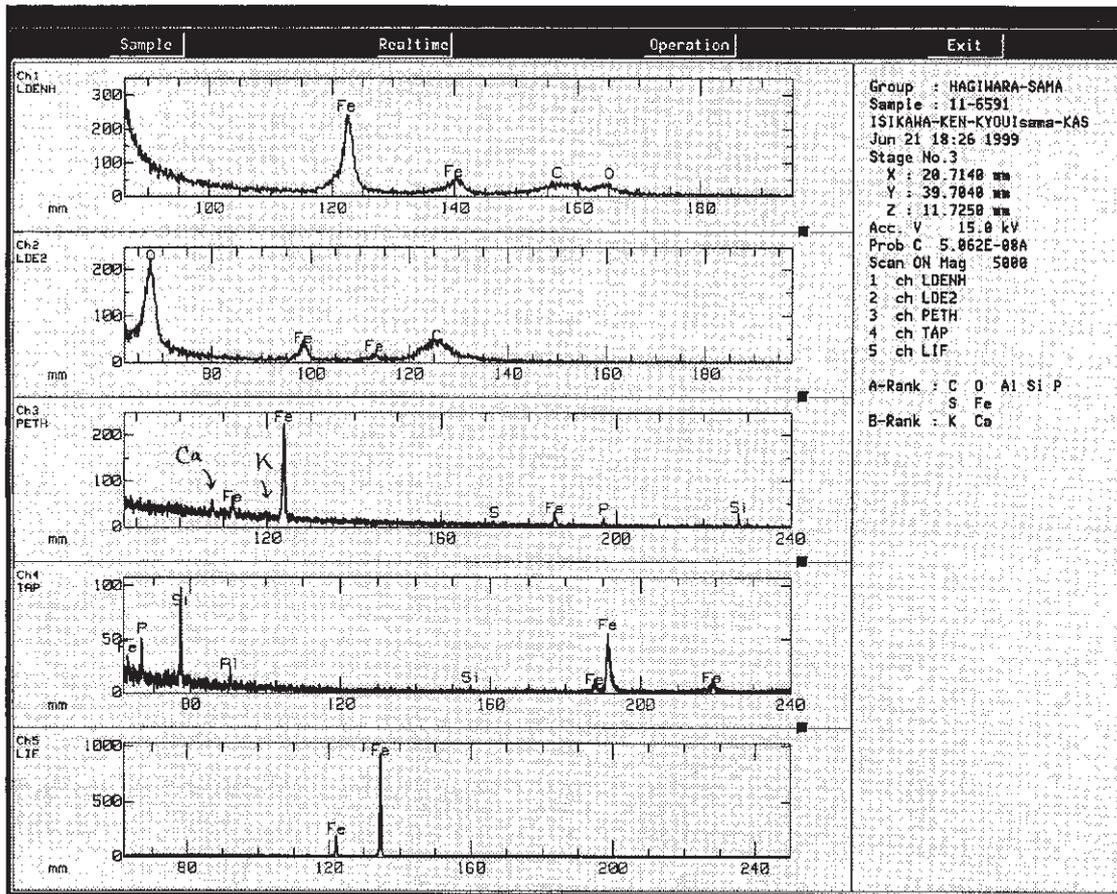


Fig. 5 カスガイの鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果(1)(photo. 6 に対応)

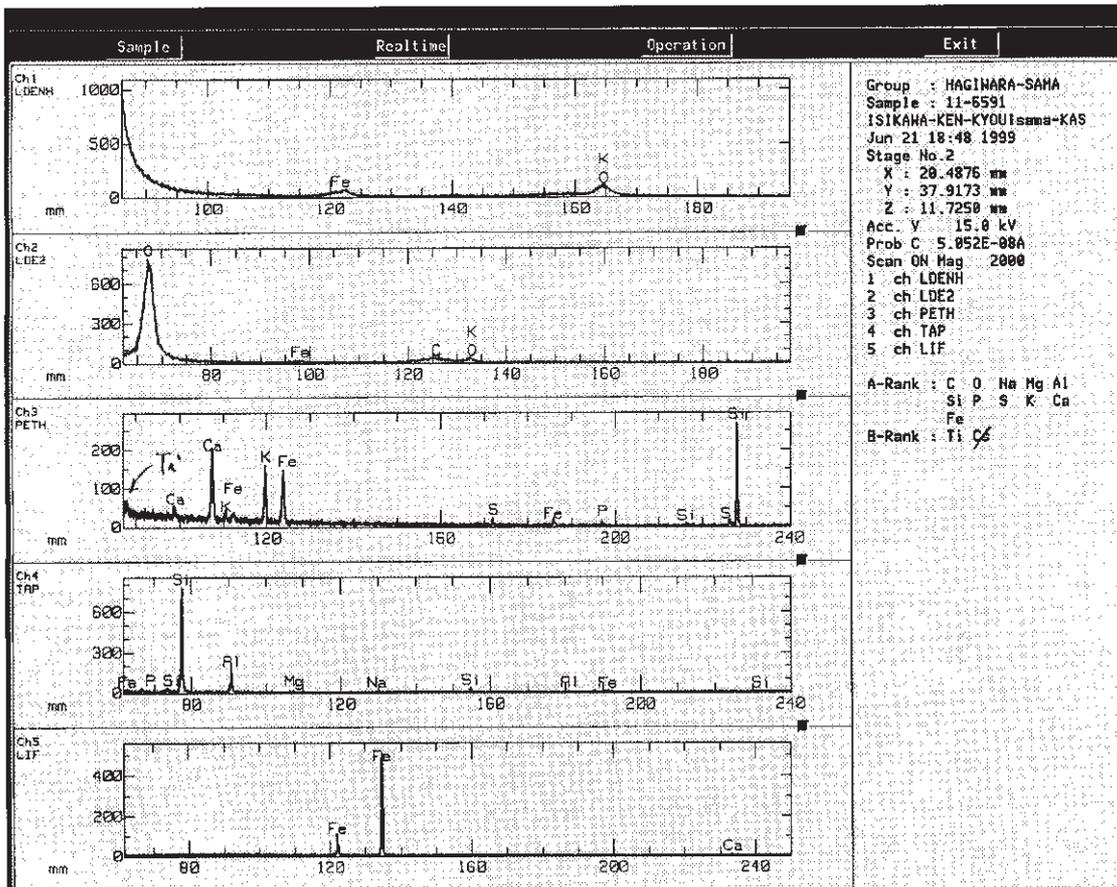


Fig. 6 カスガイの鉄中非金属介在物のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果(2)(photo.7 に対応)

拡大

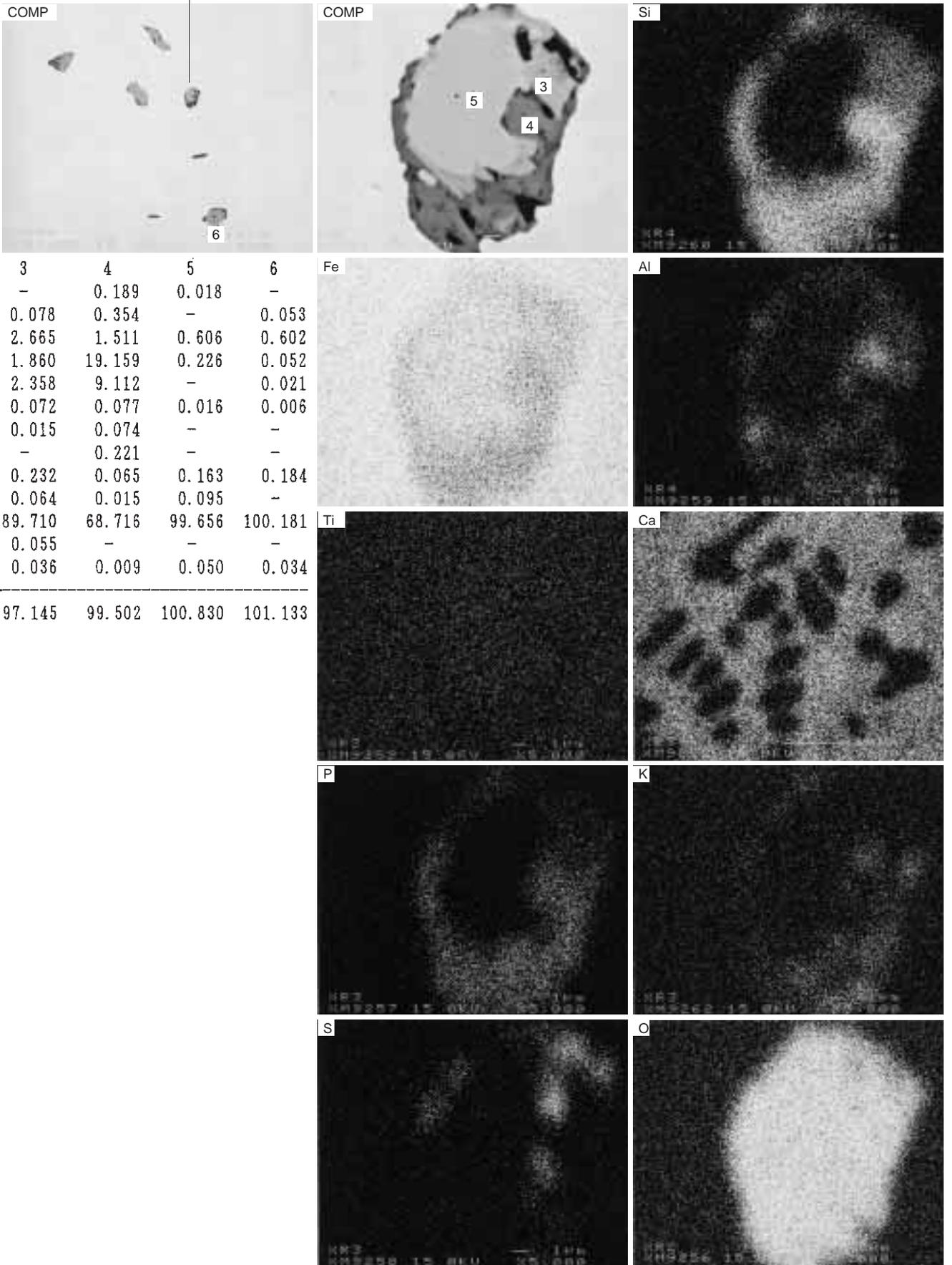


Photo. 6 カスガイの鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値（1）

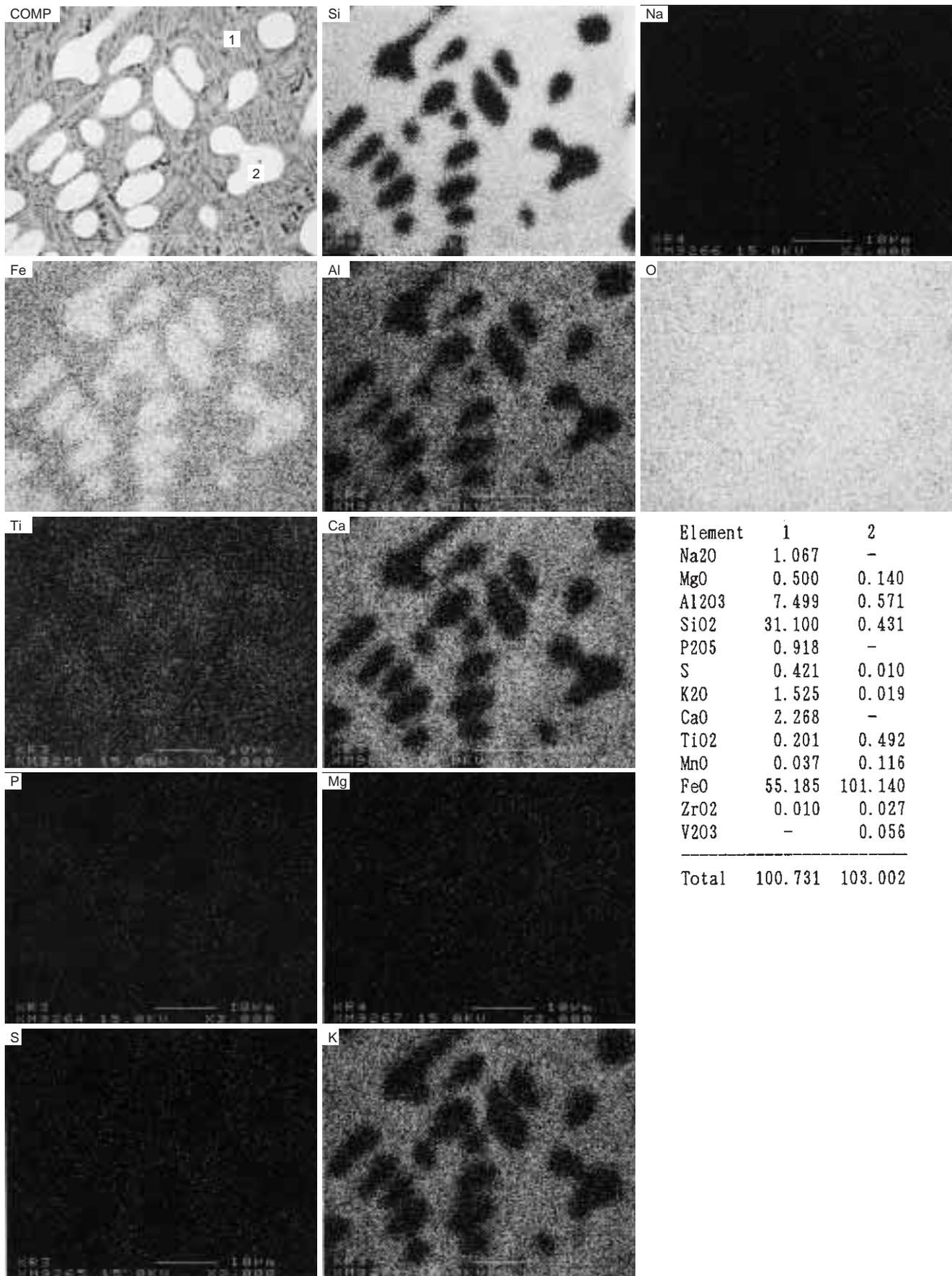


Photo. 7 カスガイの鉄中非金属介在物の特性X線像と定量分析値(2)

Table.1 供試材の履歴と調査項目

遺跡名	出土位置	遺物名称	計測値			調査項目								備考
			大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	加ワリ	
金沢城跡	菱櫓 五石目E(ホ70)	クサビ	146×135×32	3185.7	L(●)	○	○	○		○	○			
金沢城跡	菱櫓 北東角 角二(ホ73)	カスガイ	234×83×14	515.9	L(●)	○	○	○		○	○			

Table.2 供試材の化学組成（メタル定量）

遺跡名	出土位置	遺物名称	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Ni	Cr	Zr	As
金沢城跡	菱櫓 五石目E(ホ70)	クサビ	0.170	0.01	<0.01	0.034	0.002	0.011	0.013	0.006	0.005	0.003	<0.001	0.004
金沢城跡	菱櫓 北東角 角二(ホ73)	カスガイ	0.004	<0.01	<0.01	0.041	0.004	0.007	0.001	0.000	0.008	0.003	0.000	0.003



金沢城跡二ノ丸菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓石垣台



クサビ・カスガイ出土状況

付記 金沢城跡二ノ丸菱櫓等石垣台出土のクサビ・カスガイについて

(財)石川県埋蔵文化財センター

使用箇所・数量

石垣台構築に際して、クサビ(34点)・カスガイ(217点)が詰め石状に用いられていた。近世後期の改修部分=続櫓一帯では、楔は見られないもののカスガイの使用量はたいへん多い(140点)。構築当初の寛永八年(1631)頃及び寛文八年(1668)修築箇所と推定される菱櫓~五十間長屋折曲部では、角部を中心にクサビ・カスガイが多用される(クサビ33点・カスガイ77点)。他方、近世中期の改修部分=五十間長屋一帯では、ほとんど用いられていない(クサビ1点)。

出土状況等の観察

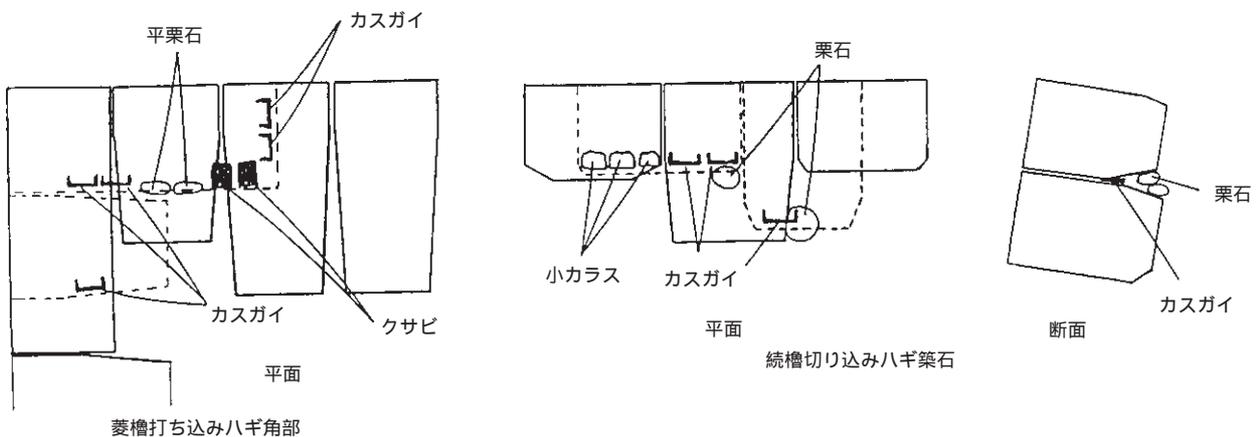
- ・打ち込みハギでは角部のみ、築石は天端石(笠石)の下以外は使用しない。
- ・切り込みハギでは角部及び築石に使用。
- ・クサビは主に角部で使用。
- ・勾配や合場の微調整というより滑り止めか。
- ・クサビ・カスガイ共に表面の錆は進んでいるが、中の遺存状況は良好なものが多い。
- ・クサビ・カスガイの膨張(錆)による石の損傷は見られない。

第1表 楔・錠集計表

99 08 23集計

	形状・大きさ(単位cm)	菱櫓~折曲部	五十間長屋	続櫓	合計
ク サ ビ	正方形タイプ(14×15、厚3.5)	13	0	0	13
	正方形タイプ小(12×12、厚2.5)	4	0	0	4
	長方形タイプ大(13×16、厚3)	5	0	0	5
	長方形タイプ小(9×12、厚2)	10	0	0	10
	長方形タイプ特小(4×8、厚1)	0	1	0	1
	計測不能	1	0	0	1
	小計	33	1	0	34
カ ス ガ イ	大(全長22、歯長8、厚2)	38	0	69	107
	小(全長18、歯長7.5、厚1.8)	18	0	48	66
	特小(全長15、歯長6、厚1.5)	2	0	2	4
	折れ・計測不能	19	0	21	40
	小計	77	0	140	217

()内の数値は標準サイズを示す



第1図 クサビ・カスガイ使用状況模式図

石川県埋蔵文化財情報

第3号

発行日 2000(平成12)年3月31日

発行者 財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 (株)橋本確文堂
